

The background of the entire page is a photograph of several wind turbines. The turbines are dark in color, and their blades are spread out against a clear, bright blue sky. The perspective is from a low angle, looking up at the turbines, which creates a sense of height and scale. The lighting is bright, suggesting a sunny day.

あきたの文芸第57集

あきたの文芸

第五十七集

あきたの文芸 第57集 目次

●小説・評論

最優秀賞

二〇五〇年 東北州 由利支庁 …… 坂本愛子

奨励賞

チチ活 …… 森田真

グリーン賞

渡邊莉花

●詩

奨励賞

君の歌 …… 鈴木仁

奨励賞

キチジョウソウ …… 鈴木敏男

入選

田口奈央子 鈴木いく子

グリーン賞

渡辺逞示 佐々木陸翔

●短歌

最優秀賞

デジタル世界 …… 熊谷すが子

奨励賞

なにわ梅 …… 佐々木鏡子

奨励賞

盆帰り …… 東海林文子

奨励賞

亡夫のワイシャツ …… 玉尾サツ子

入選

柳澤知子 小林康子 松井憲一

鈴木修一 佐々木ヨリ子 工藤美咲

グリーン賞

善治幸太

●俳句

最優秀賞	窓から……………	片倉 弓
奨励賞	羽黒山……………	佐々木 成
奨励賞	古希のほとり……………	三浦 静佳
奨励賞	玄武……………	岸部 吟遊
入選	瀬川 恵美子 佐々木 豊	藤井 洋舩
	丹野 剛紀 金 道博	田村 陽子
	高橋 雄子 藤井 ただし	
グリーン賞	吉田 唯杏	

●川柳

最優秀賞	あれから……………	藤子 あられ
奨励賞	刹那を生きる……………	小畑 犀川
奨励賞	羽化の序章……………	三浦 千両
奨励賞	母……………	三浦 善隆
入選	菅原 浩洋 岸部 旭星	佐藤 ちずる

●エッセイ

最優秀賞	蛍光管にアポ……………	高橋 文子
奨励賞	母のおはぎ……………	臼井 道和
入選	佐々木 容子	
グリーン賞	福岡 苑実 跡部 佐知	

●最優秀賞受賞のことば

.....72

●選 評

.....74

小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ
石倉 葵	寺田 和子	山中 律雄	佐藤 茂樹	山崎 如酔	武田 幹夫
羽田 朝子	保坂 英世	古澤 りつ子	泉屋 おさむ	伊藤 光愁	中村 寿
尾崎 加奈	前田 勉	加藤 トシ子	加藤 昭子	近藤 たつお	渡辺 修

●あきた県民文化芸術祭2024「あきたの文芸」応募状況

●あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

小說・評論

小説・評論

最優秀賞

二〇五〇年 東北州 由利支庁

由利本荘市 坂本 愛子

六月 唐葵・タチアオイ

パラパラパラとティンパニを叩くような軽い音が近づいてきて、窓の向こう、空中近くで止まりました。ホバリングのまま、「充電頼むわあ」ととうさんの声が降ってきます。

うちの農業用ドローン「藤兵衛5号」です。

自家用ドローンには屋号を愛称にする人が多いのですが、「とうべえ」は「飛べ」に通ずると気をよくしたとうさんが、名前のシールをよそより一回り大きくしたので、ひときわ目立ちます。

五月の連休に秋田市に住む息子が通信キットを持って帰ってきて、マイクとスピーカーカーを搭載してくれました。もちろんカメラも取りつけられますので、普段の田めぐりは1号から5号までの藤兵衛たちの役目です。上空

から田んぼの水の張り具合、出穂の状況、病気の前兆などを撮影し、パソコンに報告します。膨大なデータからAIが問題を報告してくれるほか、秋口には作柄の予想もしてくれるのです。

私は洗濯物を干す手を止めて、物干しから身を乗り出しました。家の前に広がる田んぼを「田面」、略して「たもて」といいます。

田面のはるか遠く、とうさんがドローンの行く手を見守っているのが見えました。私は大きく手を振って、二階の物干しから駆け下りました。

藤兵衛5号はすでに着地し、羽根をたたんでいます。軽いアイドリング音が「待て」の合図に従う犬の呼吸のようだと、いつも思います。バッテリーを外して充電済みのものに入れ替え、スイッチを入れるときに、つい飼いや犬に命令するように「よし」と言ってしまうのは私だけでしょうか。搭載マイクに「とうさん、行きまーす」と呼びかけると、「ばあさんはどうした」と返ってきました。「ばあさん」、すなわち姑であるかあさんはさつき、畑へのだらだら坂を上っていくのが物干

しから見えました。とうさんには、「山の畑」と返事をしてドローンを起動しました。藤兵衛5号はまっすぐ上昇すると、とうさんの待つ田面に向かって忠犬のようにダッシュしていきました。

とうさんは田んぼの除草中です。ドローンに除草用のアタッチメントを取り付けて、稲の上すれすれを往復させます。稲株の間の雑草をアタッチメントで引っかけて抜くという簡単な仕組みですが、GPS搭載ですので、田んぼの緯度経度を登録しておけば済みます。人間はときどきアタッチメントにからまった草を外し、バッテリーを交換するだけです。最新式のドローンは自分で充電ステーションに戻って、自分でバッテリーをプラグに接続し、満タンになればまた田んぼに戻ります。そうですが、それだと「ポチ」とか名付けたくなりそうです。うちの「藤兵衛」は少し前の機種なので、田面であれば自宅で、遠くの田んぼに行くときは太陽電池を軽トラクに載せて行きます。太陽電池が小型になったおかげで、農作業の自動化は格段に進みました。トラクターも田植え機も稲刈り機も動力部は一つで、本体にバッテリーをカセットの

ように取り付けるだけです。

三十年前、「団塊の世代」と呼ばれた人たちが労働市場から退くと、この国は深刻な人手不足に陥りました。需要がないわけではなく、供給不足によって倒産するなど、だれが想像したでしょう。売れるのに作れない、作っても運べない。重い貧血のように、じわじわと国力が奪われる状態が続きましたが、慢性の病気は得てして治療の機会を見落としがちです。「円」は為替市場で一人負けし、歴史の教科書で習ったプラザ合意前の水準に戻るのは、という冗談が冗談といえなくなりました。

動力源とAIの革命的な進歩は、息も絶え絶えの農業にカンフル剤となりました。それがなければ、とうさんとてここまで農地を増やすことはなかったでしょう。

毎年収穫期が終わると、「来年から田んぼを引き受けてくれないか」という電話が来ます。知り合いはもちろん、見ず知らずの人からも。なかでも相続登記が義務になったあと、首都圏在住にもかかわらず田畑を相続せざるを得なかった人たちからの電話は切実で

す。親が健在なうちは当然のように米を送ってもらっていたものの、自分の田んぼがどこにどれだけあるのかも知らない。だいぶ前から、耕作放棄地の持ち主には草刈りの賦課金が課される決まりができました。そうでもなければ、あちこちに放棄地が点在して、まわりの田んぼに大変な迷惑がかかります。どこも農地の集約が進み、一枚の田んぼは数ヘクタール、数十ヘクタールの大きさですが、いったん農業後継者が途切れると、膨大な耕作放棄地が発生してしまうのです。わが家のように、まがりなりにも夫という五十代の男手がある農家に、田んぼの委託が集中するのは無理ありません。

夫は現役の消防士ですが、消防士に限らず、農家の子弟の公務員は副業としての農業が認められ、それどころか農繁期には非農家の職員が農家に出向、という制度もあります。田植えや稲刈りとはもとより、果物の摘果、収穫、選果、トマトやキュウリなど蔬菜の選別と箱詰めなど、農作業は一時期に集中するので、いかに機械化が進んでも一定数の人手は必要なのです。

数年前から市場に出せるようになった「みちのくみかん」の収穫には、商社の若い社員が大挙して押し寄せ、さしずめ上高地のテント村の様相でした。地球温暖化を見据えて大手商社が東北各地で実験的に進めていた温州みかんの栽培が軌道に乗り、この辺りの勾配地はいまやみかん山です。

みかんの試験栽培が始まったとき、まだ元氣だったばちゃんは「わだしの若いころなば、静岡だの岡山だのサみかん挽ぎの出稼ぎに行ったもんだけど、世の中はア変わったもんだ」と目をむいていました。東京からみかん挽ぎの出稼ぎに来ているよ、と言ったら、好奇心旺盛なばちゃんはあの世から戻ってきそうです。

「地球沸騰」とまで言われた温暖化は、化石燃料の制限、再生エネルギーへの転換が進み、ようやく上げどまりました。ここ十年ほどは温室効果ガスが目に見えて減っているようですが、いったん熱くなった地球が冷めるまでには世紀単位の時間がかかります。その間、私たちはこの気候と付き合っていかなければならないのです。

私の感覚から言っても、秋田は三十年前の仙台です。よほどの山間部でもない限り、雪は降っても積もることはめったにありません。営業車以外、冬もノーマルタイヤです。

仙台は昔の東京、東京は九州の気温でしょうか。今の九州はコーヒード豆やバナナの産地ですから、もはやハワイです。雨季と乾季がはっきりと分かれ、山地を覆うのは熱帯雨林です。

洗濯物の残りを干しながら、ばばちゃんのことを思い出します。

私がこの家に来てもっとも驚いたのは、実家とわずか二十キロほどしか離れていないのに、まったく違う生活習慣があることでした。江戸時代は藩も違う上に、所領をめぐって争いもあったといいます。「由利地域」と大括りにされてはいますが、実家と違ってこのあたりは、どちらかといえば山形県に親和性がある気がします。

たとえば洗濯物の干し方です。上着は前を、ズボンの類は履き口のウエスト部分を鳥海山に向けて、とばばちゃんに教わったのです。「お山に背中だの尻だの向けたら失礼だ

べさ」と。なるほど、南の鳥海山に向けて並べれば、西からの海風が間を通って早く乾きそうです。そういう暮らしの知恵なのかもしれません。

街道に向かって並ぶタチアオイが、だいぶ上まで咲きました。

ばばちゃんはこの花を「カラオエ」と呼んでいました。唐の葵だからカラアオイ。あとで気づいたのですが、枕草子にも載っていました。バラもひまわりもない王朝の庭に、唐葵はどれほど華やかに咲き誇っていたことでしょう。

この花の一番下のつばみがほころんだら入梅、順々としてつべんまで咲き進んだら梅雨明けだそうです。

そうなったら真夏、ノウゼンカズラの季節です。

十一月 東禍流さま

温暖化とはいえ十一月ともなれば朝夕の風は寒く、夜明けが遅くなっていることもあって、朝起きが辛くなりました。夫が夜勤なのと米の出荷が終わったのをいいことに、今朝

はみんな寝坊です。いつもは真っ先に起きて雨戸を繰るとうさんが、私より遅いのは珍しいことです。まとりつく猫をあやしなから、まず大型モニターの電源を入れます。

新聞という紙の媒体がなくなってどれほど経つでしょう。

夜明けの気配をまとって次第に近づいてくるバイクの音、郵便受けの蓋がきしんで、そのあと下駄箱の上に新聞が落ちるコトンという音。バイクは同じでも配達の人とは交替らしく、新聞が縦になっている日と横に折られている日がありました。横の日は長さがあるので、夫が下駄箱の上に無造作に置いた車のカギなどを蹴散らしていることもあって、「今日は横の人だ」と思うのでした。

百年以上も続いた戸別配達というシステムが崩壊したのは、人手不足が最大の理由ではあります。けれど、インターネットの普及は新聞のみならず、テレビ、ラジオ、郵便など、ありとあらゆる伝達手段を根底から覆しました。今では、大型モニターで配信された新聞をさっと読み、必要な個所だけ印刷するか保存します。ですから、記事はすべてA

4一枚分をひと単位に構成されており、大事件は数十単位、いわゆるベタ記事は一単位です。読み上げ機能もあるので、近ごろ老眼が進んだと嘆くかあさんは、よくラジオのように聞いています。

壁のカレンダーを見ていたかあさんが、「今日は霜月満月だった」とつぶやきました。とうさんはモニターのリモコンを操作して月齢を画面に表示します。「去年のもち米がまだ少しあるから、ぼたもちでもしようか。智ちゃん、小豆はまだあったかねえ」とかあさん。確か秋彼岸に多めに煮た小豆餡が、冷凍庫にあったはずです。

霜月の満月の夜は、日が暮れたら外に出てはいけない、音をたててはいけない。灯りが漏れてもいけない。家々は早ばやと雨戸を閉ざし、灯を落として、カサリとも音を立てないように息をひそめて夜明けを待ちます。真夜中、神社の禰宜さんが辻々を見回り、元旦にご託宣を下します。「どこそこの家で話し声がした、火事に気をつけろ」だの、「あの辻で人影を見た、洪水がくる」だの。

火事だの洪水だの干ばつだのを自分のせい

にされてはたまらないので、その夜ばかりはどの家も静まり返り、聞こえるのは集く虫の音と川のせせらぎばかり。私が嫁ぐ少し前までは、犬を飼うにも遠慮があったといえます。

飢饉で村を捨てた飢えた民が、月明りを頼りによろばい歩く。音をたててはいけない。声をあげてはいけない。東禍流の衆の魂魄にからめ捕られてしまうぞ。

飢えた人々のためには、草の葉に盛った白い飯を街道に供えます。そして日が落ちる前にさっと食べ終えるように、夕食はぼた餅やお稲荷さん。音がしがちな皿小鉢も、なるべく使わないのが習わしです。

そんな風習も、律儀に守っているのはうちぐらいかもしれません。なにより家がない、人がいない。東禍流さまの言い伝えを守るのはこの集落の数軒だけになってしまいました。なにしろ一人暮らしだったり、老人施設に入居したりで、日ごろから人の気配が少ないのです。神社も無住となって久しいのですが、仮りに禰宜さんが見回りに来られても人の気配のする家は少なく、猫の子一匹通らないことでしょう。

とうさんが天気予報を見ているモニターから着信音が響き、近所のシゲオさんのひげ面が画面いっぱいに映りました。「電話」の時代の名残りか、シゲオさんはモニターに向かって大声を張り上げます。

携帯電話の契約台数が日本の総人口を上回ると、固定電話網のシステムを維持する費用が大きな負担になりました。そこで光回線のシステムだけを残して、電話回線や電話柱がなくなったのはいつだったのでしょうか。

シゲオさんの家でもすったもんだの挙句、離れて暮らす息子さんが来てインターネット回線をつなぎ、テレビ電話を開設したのですが、見えないマイクに向かってしゃべるのに慣れないらしく、とうさんに「シゲは電話要らねえ、地声で聞こえる」と言われています。

シゲオさんの用向きは、「生活センターさ行ったら、ついでにオレの宅配便をもらってきてくれねえか」というものでした。

宅配便も郵便も町までは配達しますが、その先の戸別配達には安からぬ別料金がかかります。宅配の荷物も郵便も、町の「生活セン

ター」に留め置き、各自が取りに行くのです。うちのように農業用のドローンがあれば、ドローン回収ということもできますが、シゲオさんのように車もない、ドローンもないとなると、暮らしが立ち行かないのです。

そもそも圏道区制とは、居住区を集中させて行政のコストを削減するのが目的です。

首都圏、北海道のほか、日本列島を東北州、関東州、北陸州など十の行政区に分けて都府県は廃止、旧県庁所在地のみを市として人口の集中を図る、というものです。

あの・災厄の前から人口減少は顕在化していました。秋田県一県に相当する人口が毎年減り続けたのですから、計算上二十二世紀には首都圏しか残らないことになりました。国も手をこまねいていたわけではないでしょうけれども、若者の三分の一が非正規労働者では、子どもどころか結婚すら考えられないのは当然のことです。少子高齢化と人手不足でこの国が行き詰まったタイミングで、あの・災厄がこの国を襲いました。自力で復興するには壊滅的な被害でした。そうやって初めて、国民もこの国のグランドデザインを考えない

ればならなくなったのは皮肉なことです。

復興の前に圏道州制という明治の廃藩置県以来の大改革が即断され、同時に、その地域が何を中心に暮らしていくかを決めました。太平洋に面した工業地帯は、あの・災厄により大なり小なり被害を受けていましたから、製造拠点は分散せざるを得ません。その前から有数の再生可能エネルギー基地であった東北は、豊富な電力を基に製鉄、アルミ製錬などの重工業を誘致します。三陸に昔、製鉄所があったことも幸いしました。同時に、温暖化で栽培地域が限られつつある稲作も、東北がその多くを担っています。

世界中から莫大なODA（開発援助）を受けて、圏道州制はスタートしました。居住区を集約し、行政コストを削減する。行政組織を小さくし、ITが補完する。もとの秋田県に、大学は一つ、高校は九校。基幹病院は一つですが、救急対応や遠隔手術ができる大規模な診療所がいくつかあります。小中学校は昭和の大合併時の市にそれぞれ一校ずつですが、昔の町村役場があったところに学習センターが設けられ、そこで遠隔授業が受けられます。通学せず家でインターネットを使った

授業を受けてもいいのですが、たいていの子どもがセンターに通ってくるところをみれば、「学校」は単なる座学ではなく、友だちと話し、遊び、ときにはぶつかり合う場なのでしょう。

人口の集約を図るといっても、農林漁業に従事する人は当然その場所を離れられないわけで、生産手段や移動手段を持つ自立可能な人々だけが辺縁部に暮らすことを許され、高齢だったり、田んぼが少ない、後継者がいないなどの人たちは、秋田市か由利支庁の中心部である本荘町に移っていききました。

シゲオさんも、息子さんのいる都会か本荘町の高齢者施設に移るよう勧められたのですが頑として聞かず、「まあ仕方ないか」という雰囲気になっています。とうさんをはじめ村の人たちも、生まれてこのかたここを離れたことがないシゲオさんにとつて、それは「死ぬ」というに等しいとわかっているのです。

「シゲの分までばた餅拵こしらえてくれや」
ぽつりと、とうさん。

私も、もちろんそのつもりです。

十二月 冬水田んぼ

来春作付けするコメの銘柄を何にするかの相談で、とうさんとかあさんは秋田市に行っています。高速道路だけなら完全自動運転ですが、秋田市内は城下町の名残りで細い道や一方通行が多く、とうさん一人で運転するのは億劫だったでしょう。お昼をごちそうする約束でかあさんを誘いました。

昔の映画のリバイバル上映があるとかで、帰りは遅くなるそうです。「卒業」というアメリカ映画で、聞いたこともない私にかあさんは、「結婚式場から花嫁をさらう映画」と言いおいて、おしゃれをして助手席に乗り込みました。

映画館に足を運ぶのはマニアと言ってもいい人たちで、そもそも映画は配信を前提に作られています。配信でヒットすれば劇場で上映されることもあります。今上映されているのはたいていが昔の「名画」といわれた作品ですから、とうさんたちの世代には懐かしさも心惹かれるのでしょう。

会議を終えたとうさんから電話がありました。

「冬水田んぼのカメラの向きがおかしくなったから、見てきてくれや。今から座標を送る」

私のモバイル（昔はスマホと言ったものの進化形）に緯度経度のデータが届いています。カメラは「非常事態発生」とばかりに、とうさんのモバイルにSOSを送ったのでしょう。田面の川沿いのカメラのようです。

田んぼを見張るカメラと水を調整するコンピュータは稲刈りのあとに全部撤去するので、田面は冬水田んぼにしているのでカメラもそのままです。冬に田んぼの水が張られていると水生の生き物が増え、それを目当てに渡り鳥が集まります。雪が少なく落ち穂も拾い放題なので、この辺は冬鳥の楽園なのです。ハクチョウの姿はまだですが、バンがまだいるかもしれません。田んぼで暮らし、稲の番をするから「バン」と呼ばれるこの鳥は、本来は夏鳥ですからとくに南に渡る時期なのですが、近ごろでは留鳥になりつつあるようです。

田面まではまっすぐ数百メートルです。私は自転車の充電を確かめて漕ぎ出しました。

田んぼのカメラは足が折れて横たわっていました。イノシシか何かが倒したのでしょう。穂が出てからは、このカメラが大きな音を出したり強烈な光を放ったりして野生動物を追い払う役目もします。イノシシは天敵と認識して攻撃したのかもしれませんが。足ごと回収し、自転車の荷台にくくりつけました。ここまで来ると、川の水が石を洗っているのが見えます。

鳥海山北面に端を発し、雪解け水や伏流水を集めて日本海にそそぐこの川は、「白雪川」という典雅な名で呼ばれています。二千メートル超の高みから河口までわずか三十キロメートルの距離を駆け下るのですから、水量は少なくとも流れは速いのです。鳥海山の大噴火で飛んだという大小の噴石を押し流す勢いで、白く泡立ち水しぶきを放っています。

河原の石の間を縫うように嗅ぎまわっている犬が見えました。

同じ集落のエミさんの飼い犬、ポンタくんのようにでした。ポンタくんは私を見つけるなり、引き綱を引いたまま土手を一目散に駆け

上ってきます。ポントくんになめまわされながら、「ぼんちゃん、一人で来ちゃったの。」

お母さんはどうしたの」と綱を確保すると、土手を這い上がってきたのはエミさんの娘さんのハルカちゃんでした。私の長男と同年ですが、高校卒業後仙台に行って、確かネイルアーティストとして活躍しているとエミさんが話していました。

「ハルカちゃんでないの、久しぶりだねえ」ソフトボール部で真っ黒に日焼けしていた子はすっかり垢抜けて、化粧も服装も秋田市ですら見かけないほど都会的です。ポントを真ん中に、しばらくは近況報告です。

「ハルカちゃん、寒いのにポントの散歩？」
「ううん、ばあちゃんの法事で帰って来たんだけどさ、親戚のおじさんたちが酔っ払って、まだ嫁っこサ行かねえのか、だの、こどもは早く産んだほうがええ、だのうるさくて」

なるほど、昭和の色濃いい人たちが言いそうです。

「母さんも叔母ちゃんたちも、女はみんな台所で忙しく働いてるのに、男たちときたら、やれビールだの酒だの、こっちサ来て酌しろ

の、勝手なことばっかり言ってさ」

ハルカちゃんはよほど腹に据えかねたのでしょう。ポントが帰りたいように綱を引くのを無視して続けます。

「だいたい、ばあちゃんは父さんの親だよ。それなのに、寝たきりになったらみんな母さんにお任せでさ。施設に入れるのだって、叔父さんたちは最後まで反対したんだよ」

エミさんが近ごろ珍しい在宅介護をしてきたこと、自分が体を壊して初めて姑さんの施設入所がなかったことを知らない者はいません。エミさんは私より若いのに、腰を痛めてすっかり背が縮んでしまいました。

「私、何度も『帰って手伝おうか』って母さんに言ったんだよ。だけど母さんは駄目だって。家事とか育児とか介護とか、『ひとのお世話』をすることが女の義務だと思われているところサ、帰ってきちゃならね、って」

ハルカちゃんの声は口惜しげにくぐもっています。そして振り切るように頭を下げると、ポントに引かれて歩き出しました。

私もエミさんも平成の生まれですが、その舅姑さんは良くも悪くも昭和の人でした。

年ごろになったら結婚しろ、結婚したら子どもを産め、老人の介護は家族がするもの、男は表働き、女は陰働き。家訓のようなその習慣に逆らえなかったエミさんは、ハルカちゃんにそういう決めつけの犠牲になってほしくなかったのでしょうか。多かれ少なかれ、地方にはそういう空気がありました。若い女性がそれを嫌って都会を目指したとしても、彼女たちをだれが責められるでしょうか。

災害も犯罪も、都会よりここが安全なことは疑いようありません。一人暮らしで病気をしたらどうするのか、思わぬ失業や事故を考えればこのほうが安心なのも分かり切ったことです。

けれど、狭いアパートで余裕のない暮らしぶりであつたとしても、自分のことは自分で決める、他人に役目を決めつけられたくない、という彼女たちを、だれが止められるのでしょうか。

三十年前、少子高齢化と人口の一極集中が止められないと分かったとき、国は「このままでは地方が消滅する」と、結婚を支援する政策を次々に打ち出しました。県主催のお見合いパーティーやマッチングアプリなどとい

うものもありました。

それでも若い女性は都会を目指しました。

私たちはあるとき、何を間違えたのでしょうか。

三月 雁風呂

白に薄墨の濃淡で描かれていた鳥海山が、ここ数日の雨で陰影を増しました。

温暖化により平地の積雪は激減しましたが、海水温が高い分降雪量はかえって多いよううで、山の雪は昔より深いといえます。ただ溶けるのも早く、稜線や鞍部が青い影を落としています。

種蒔きじいさんの雪形を待たずに、苗代の準備が始まりました。今日はとうさん、夫、息子の三代そろって、種蒔きの共同作業に出かけています。私はかあさんと二人、援農の若者たちを迎える準備です。作業衣を洗濯し、長靴が傷んでいないか点検します。去年と同じメンバーと聞いていますので、名札を変える必要がないのは助かります。

夫は毎年、裏の竹林から唐竹という細めの竹を伐り出し、人数分の杖を作ります。うち

に來た翌日にはそろって山の神社にお参りしますが、二百数十段の苔むした石段を上るのは、若い子にとっても難儀なこと。まして両脇は杉の老木の並木で、枯れ枝や杉の葉でとても滑りやすい。軽くてしなり強い唐竹の杖は、このために作られるのです。

平野に岬のように突き出た神社の境内からは、うちの田んぼが一望できます。夫は参拜のためだけではなく、これからの農作業の範囲を示すためにこの場所に案内するのです。

うちに援農に来てくれるのは首都圏に住んで東京の米商社に勤める若者たち。あの・災厄で都心のインフラは寸断されました。しかも地面が動いて歪んだため、GPSを用いても土地の境界が特定できないところも多く、災害仮設住宅さえ建てられずにいます。従って、都心で働いているのは首都圏の自宅から通勤できる人に限られており、あとはリモートワークです。首都圏は流通網が大きな被害を受けたため食料も十分とはいえず、この国に飽食の時代があったことが信じられないほど不自由しています。せめて援農先では腹いっぱい食べさせてやってほしい、と商社か

らも言われていますが、その点は請け合ってもいいでしょう。

作業衣を干していると、街道に大型トラクターが停まりました。山の上の牧場の三代目、トシキくんが牛乳を配達してくれたのです。

トシキくんは高校卒業後アメリカに留学し、大規模酪農を学びました。しかし学ぶにつれ、日本の国情に合った酪農があるのではないかという思いを強くしたそうです。大規模酪農には飼料の輸入が欠かせません。自前で飼料を供給できる範囲に抑えないと、多頭飼育はリスクが大きいうというトシキくんの慧眼は、あの・災厄によって裏付けられました。飼料用穀物の輸入港が軒並み閉鎖され、その上田の急落で国内の畜産業や酪農業は致命的な打撃を受けました。

少し前から荒蕪地を借りて飼料用トウモロコシや大豆を栽培していたトシキくんは、乳牛の頭数を減らすとともに、小規模の牛乳加工場を建てて長期保存牛乳を製造し始めたのです。その後の流通網の混乱を見れば、これは大英断でした。

それまで、トシキくんの牧場に生乳を集荷に来るのは岩手県の牛乳工場でした。加工してパック詰めされ、秋田県内のスーパーやコンビニに戻ってくるのは早くても翌々日です。運転手不足により集荷回数が減りそうという時点で、自社加工・自社販売に踏み切ったのです。高温殺菌法を導入したので長期保存も効き、本荘町や秋田市に卸すことも可能になりました。

麓の集落に限り、こうして定期的に届けてくれるのですが、大型トレーラーで来るのは初めてです。

「仔牛の出荷で駅まで行くもんで、ついでに」

「盛岡のセリ場まで行くんでないの」

「いや、今日は実習者が来る日だもんで空けられなくて。家畜専用貨車をチャーターしたから、あとはセリ場まで届けてくれるんだ」

農家が援農の子を受け入れるように、牧場は実習者と呼ぶようですが、内情は同じく首都圏の関連企業で働く若者の酪農体験です。

見ればトレーラーの助手席には女性らしき影が。かあさんの物問いたげな視線から逃れるように、「この前の実習の子が居着いてし

まってよお」というなり、踵を返して走っていきました。

あとに残された私たちは、顔を見合わせて笑いながらトレーラーに手を振りました。

私が子育てをしていた三十年前、小学生の将来になりたい職業はだんぜん「ユーチューバー」で、いわゆる良識ある大人を慨嘆させたものです。

一方、コロナ禍でリモートワークが進む中、この社会をまわすために現場で働くエッセンシャルワーカーが注目された時代でもありました。ライフラインを維持するための必要不可欠な運輸、物流、販売の仕事、電気、ガス、水道、金融機関など公共インフラの仕事、福祉関係者、教育関係者など、必要不可欠な仕事の多くが、感染のリスクにさらされながら働いているということに、多くの人が改めて気づかされました。長時間労働が当たり前の運送業が「働き方改革」を要求され、低賃金に抑えられてきた介護福祉業界にも処遇改善が図られました。

エッセンシャルワーカーの代表である第一次産業に社会の目が向いた理由は、皮肉なこ

とに異常気象による農業構造の危機とあの・災害でした。

余剰米の倉庫がいつの間にか底が見え、しかも米の主産地が水害や干ばつに見舞われる。イワシ、サバ、アジなどの近海魚が姿を消し、遠洋に出るための燃料が高騰して割が合わない。深刻な食糧不足がよそごとと思えなくなった時に、あの・災害です。多少強引なやり方ではありましたが、国が産業構造のグランドデザインを考えるには、あるいはまたとない好機だったかもしれません。

地域ごとの計画生産性が進んだせいで、農業はかつてのように「労多くして報われない」職業ではなくなりました。なんといっても、飢える心配がないということの価値をこの国が再認識したのは、あの・災害がきっかけでした。

「職業に貴賤はない」とはよく言われます。

けれど私は、「賤」はなくとも「貴」はあると思います。

人々の生活を守り、維持していくために欠かすことのできない仕事こそが、最も尊い仕

事。「自己実現」に名を借りた「自己顕示欲」のための配信や、広告料目当ての浅はかな配信などは、仕事というもおこがましいと思ふのです。

もしかするとあの災厄は、浮かれ、思いあがつたこの国に喝を入れるため、神さまが与えた試練なのかもしれません。それにしてはあまりに犠牲が大きすぎたとは思いますが。

高い空を渡り鳥の一群が北上してゆきます。ハクチョウよりは小柄なので、カモの仲間でしょうか。

渡り鳥が帰る季節にばばちゃんが話してくれた「雁風呂」の話を思い出します。

雁は遠くシベリアから海を渡るとき、一本の小枝を咥えて飛び立つそうです。疲れたら波間に小枝を浮かべてその上で休み、また咥えて南下します。そしてこの国に着いたら岸に小枝を置いて上陸し、各地に散ります。春にまた集まって北に帰るとき、自分の小枝を探して咥え、この地を去るのだそうです。あとには、この冬に命を落とした雁の数だけの小枝が残ります。海辺の人々はその小枝を集めて風呂を焚き、長い北帰行の無事を祈りつ

つ、帰れなかった雁を供養するのだといいます。

私の家には今年も、援農の若い雁たちが舞い降ります。その子たちが卒業しても次の子たちが、また次が、と若者が途切れることは当分ないでしょう。

彼らの助けが要らないほど自動化や機械化が進み、また彼らも都会に住みながら豊かな食料を得られるようになった時こそ、この国が本当に復興したといえるのかもしれない。

その時には私も、雁の小枝ならぬ彼らが残した唐竹の杖を集めて風呂を焚き、うちに来てくれた子たちの平穏を祈り、またあの災厄の犠牲になったもろもろの命を弔いたいと、心から思ふのです。

奨励賞 千千活

兵庫県宝塚市（秋田市出身）

森 田 真

「先ほど、神戸線で発生した人身事故の影響で、列車に遅れが出ています」

—またか。

玲奈は、ため息をつきながら、スマートフォンで聡に連絡した。

『電車の遅延。少し遅れるから、単語テストの勉強をやっといて』

一分もしないうちに返信があった。

『わかりました。気をつけて来て下さい』

玲奈は既読をつけると、スマートフォンをカバンにしまった。それと同時に、信号待ちをしていた電車が再び動き出した。

今月に入って何回目の人身事故だろう。土曜日はないと思っていた。電車に飛び込んで死ぬのは止めて欲しい。同じ一般市民に迷惑がかかるのだから。

玲奈は再びスマートフォンを取り出すと、大学の同級生の和泉からSNSに連絡が来ていた。

『来週の土曜日、ヒマ？』

玲奈はすぐに返信した。

『土曜日は家庭教師があるから、ムリやわ』

玲奈が発信すると、すぐに既読がつき、

『まだ、あのおっさん教えてるん？』

あきれ顔の犬のスタンプと共に返信が来た。

『うん』

『ほれたか？』

『アホか』

怒っている猫のスタンプを押した。

『一日くらい休みな。遊びに行こう』

『受験が近いし……』

『友達よりパパ活なん』

『パパ活ちゃうし、アホ』

『わかった。また、違う曜日で誘うわ。仕事頑張ってる』

『和泉、ほんまにごめん』

既読がつくと、同時に雲雀丘花屋敷駅に着いた。

聡の家は、この駅から歩いてすぐだ。ここは大正時代に山を切り開いて造成された由緒ある高級住宅街だ。メイン道路になる坂道

歩いていくと、古びた病院のような白い建物が見える。その一階の奥に彼の部屋がある。

玲奈は呼び鈴を押すと、すぐにドアを開けた。聡はいつも通りスリッパを持って玄関で待っていた。聡は玲奈の姿を見ると腰を折って挨拶をして、足元にスリッパを置いて、荷物を預かった。玲奈は無造作に靴を脱いでスリッパに履き替える。荷物を奥の部屋に置いて戻ってきた聡は、玲奈の靴を揃えてから、玲奈の上着を預かり、ハンガーに掛ける。

二人のいつものルーティーンが終わると、玲奈はゲーミングチェアに座り、聡のノートを確認する。

「宿題はできてるなあ。じゃあ、単語のテストをするわ」

玲奈はカバンを開くと、透明のクリアファイルから単語テストを取り出し、聡の机の上に置いた。聡は、シャーペンで頭をかきながら、テストに向かう。

毎回、五十個ずつ英単語テストをしている。聡はたいてい真面目にやっているが、時には仕事が忙しくて、できない時もある。今日は、あまり筆が進んでいない。様子を伺うかのように玲奈は聡の顔を見た。

「単語はやってないなあ。そんな調子で大丈夫か？ テストが近いねんで」

玲奈は呆れた顔で聡を睨む。

「すみません」

聡は弱々しい声を出した。

「まあ、しゃあないなあ。じゃあ、来週は百個やで。今日の分と合わせてテストするわ」
「わかりました。来週は必ずやっておきます」

聡は単語帳の該当箇所に付箋を貼った。

その後は、いつも通りに、文法の問題を十問と長文の問題を二問やって、最後にリスニングの問題を一問やった。全体的にかなり正答率は上がっている。志望校の京阪外国語大学の四年制は無理でも付属の短期大学部は公募制推薦入試で合格できそうだった。短期大学部から大学の三年編入の枠が四百人分ある。知る人ぞ知るバイパスであった。

「聡、公募制推薦入試は二日あるから、初日はチャレンジで四年制を受けて、二日目は滑り止めで短期大学部に出願しような」

玲奈がそう言うと、聡は何度も頷いた。

二時間の勉強が終わる頃に、仕出し弁当が届く。玲奈はいつも聡と一緒に夕食を食べてか

ら帰る。一時間の時給は五千円スタートだったが、今は一万円になり、夕食とデザートもつく。週一回二時間で、月八万円になる。玲奈の母がスーパードパートをしているが、これだけ稼ぐには朝から晩まで働いても十日はかかる。

玲奈は最初、個別指導塾で講師のアルバイトをしていた。九十分一コマ千八百円で学年の違う二人の勉強を交互に教えた。なかなか結果が出ずにクレームの嵐だった。もう、教育の仕事は辞めようと思った時に、家庭教師派遣センターを経営している叔母の道子から紹介を受けた。

最初は自分の父親と同じくらいの年齢の男性を教えることに抵抗はあったが、会ってみると、身体も小さく童顔で文句一つ言わないこの男を気に入ってしまった。

―コスパのええバイトやわ。

玲奈は天ぶらを咀嚼しながら、聡を見た。

「聡は、なんで結婚せえへんかったん？」

今では、何でも聞ける間柄である。

「僕が若い頃は『三高』と呼ばれて、身長、学歴、年収が高くないと女性に相手にしてもらえない時代でした」

聡は下を向いて細々と答える。

「厳しい時代やったんや。私ら、身長が逆やったら良かったのになあ」

玲奈は父がアメリカ人で、百七十六センチもある。聡よりも頭一つ大きいのだ。

「玲奈先生は恋人がいらっしやるのですか？」

今度は聡が聞いてきた。

「いらっしやらない。いらっしやらない」

玲奈は箸を置いて、笑いながら右手で聡の質問を遮った。

「いたら、毎週土曜日の夕方にここに来れへんよ」

「それも、そうですね」

聡はホッとした様子で頷いた。

玲奈は、恋人はいたことがない。中学、高校はバスケットボール部で過ごした。大阪で選抜メンバーに選ばれたこともある。忙しい日々だった。大学は外国語学部なので女子が多く、恋愛の対象者がそもそも少ない。過去に好きだった人はいたが、告白して交際する勇気もなければ、時間的余裕もなかった。

夕食が終わると、聡はコーヒートケーキを出してくれた。

この時間になるとお腹もいっぱいであまりして、帰るのが嫌になる。玲奈がコーヒーを飲んでケーキを食べている間に、聡は玄関で玲奈の靴を磨いている。聡に磨かせるためにいつもローファーで来ている。どっちが雇われているのかわからない。

玲奈がコーヒーの最後の一口を飲んで、コーヒーカップを皿に置いた時に、聡が戻ってきた。聡は手を洗うと、玲奈の上着と荷物を持ってくる。玲奈は何も言わずに受け取ると玄関で靴に履き替えた。

「じゃあ、また来週な」

「お疲れ様でした。ありがとうございますました」

聡の丁寧なお辞儀を見て、満足そうに玲奈は扉を閉めた。靴はピカピカになっている。坂の下りは楽で、ここからは大阪の夜景まで見渡せる。光の宮殿の階段を黒光りした靴で一足一足降りていく度に、来週の訪問が待ち遠しく思えてくるのだ。

「おじさん、この大学を受験するん？ 入学しても、浮くんとちゃう？」

サンドイッチを頬張りながら、和泉が笑い

ながら言う。

「そうやろうな。でも、この大学にどうしても入りたいんやって」

玲奈はハンバーガーを一口かじった。大学のカフェテリアは十三時半を過ぎると、席がかなり空いている。玲奈と和泉は三限の授業を取らずに、この時間に昼食を取ることにしていた。

「女子が多い大学に四十五歳のおっさんなんか来たら、なんかあったら、すぐに犯人扱いされるよ」

和泉は悪態をつくが、聡に興味は持っていた。

「受験前に大学を見せとくのも悪くないし、一度オープンキャンパスに呼んだったら？ 保護者と間違えられるかもしれんけど……」

「オープンキャンパスかあ」

「うん、玲奈が三年もつき合ってるおじさんってどんな人なんか見てみたいし」

「別に恋人とちゃうし」

「でも、気持ち悪いおっさんやったら、三年も続いてないやろ」

「まあ、そうやな」

「中学の時からずっとクラブで共に戦ってきた

た玲奈の初彼を見てみたいわ」

「だから、彼氏とちゃうって。生徒やから。まあ、一回誘ってみるわ」

玲奈も親友の和泉に聡を紹介することにまんざらでもなかった。

玲奈の母は夜の十時に帰ってくる。スーパのパートだ。売れ残りの総菜をテーブルに置いて、ソファアの上で死んだ熊のように横たわっている。

玲奈の母は、一流私立大学の英文科を卒業して、昔は大手メーカーで秘書をやっていた。その時の上司がアメリカ人で、社内恋愛をするようになり、結婚退職して玲奈を産んだ。その後、夫婦仲は悪くなり、玲奈が三歳の時に二人は離婚した。玲奈の父はアメリカに帰り、アメリカ人女性と再婚し新しい家庭を持っている。

玲奈は物心ついた時には父はいなかったの
で、父の記憶はない。仕事の日はボロボロになるまで働いて、休みの日はゴロゴロしている母とずっと二人で暮らしていた。

大学も奨学金で通っている。奨学金は借金であることはわかっている。四年間でいくら

借りることになるか計算すると夜も眠れなくなるので、一切しない。何とかなるだろうと考えている。

「まだ、行ってるんか、あのおっさんの家庭教師。道子の紹介なんやって。変なアルバイト紹介してくれて……」

道子叔母さんは玲奈の母の実の妹だ。

「いい人やで。すごい気を遣ってくれるし、時給もええし」

「それが危ないんや。四十五歳の独身のおっさんが今から大学行って何するん。玲奈に会う口実で勉強してるだけやわ。あんたは、そのパパ活の餌食になってるだけやで」

玲奈の母はビールを開けて、一口飲んだ。

「私は立派やと思うで。お母さんと年が違わんおじさんが、自分の娘ぐらいの年齢の先生の指導を受けてるってすごくくない？ 三年やって英検の準二級に合格したんやで」

「はあ、四十五歳の男が英検準二級を取って何になるん？ 私は準一級を持ってるけど、スーパールのレジやで。世の中には年齢制限ってもんがあるんよ。彼の努力は認めるけど、それはただの自己満足やで」

玲奈の母は吐き捨てるように言って、割引

の値札の入ったポテトサラダを開いて食べ始めた。

「あんたのような若い子でも就職たいへんやのに、そのおっさん、今から大学入ってどうするん？ 何かになれるん？ お金と時間のムダやんか」

「別に人の勝手やん。いくつになっても目標持って生きられるって素晴らしいことやと思うけど……」

「……」

玲奈の母はそのまま、マグロのような格好をしてソファで眠ってしまった。玲奈は母に布団を掛けてから歯を磨きに行った。

―他人には理解されへん生き方やけど、自分が満足やつたら、それでええやん。

玲奈は自分の部屋に入って、布団を敷いた。

「聡はなんで今から大学に行こうと思ったん？ 何かなりたいもんでもあるん？ 通訳とか？ 翻訳家とか？」

次の週に家庭教師の授業が終わってから、弁当を食べながら、玲奈は聡に聞いてみた。

「……」

「嫌やつたら、答えんでもええよ。ただ気になっただけ」

玲奈は聡が出してくれたお茶を飲みながら言った。

「確かに、おかしいですよ」

聡もお茶を飲みながら、屈託なく話す。

「僕は元々、英語が苦手でした。でも、玲奈先生に習っているうちに段々わかるようになって、楽しくなってきました。それで、先生が通われている外国語大学に行ってみたいと考えるようになったんです。その先は僕にもわかりません」

「……」

「ただ、ずっと働いてきて仕事も先が見えてきて、僕より十歳も若い大卒の課長がいて、僕は万年、課長代理です。高卒社員の最高出世なんです。僕は独り者で、支えていく家族もいないので、貯金は結構あります。今、早期退職すれば、退職金も割り増しされます。そのお金で大学に通ってみたいんです」

「……」

「それでは、答えになりませんか？」

「答えになってるよ」

玲奈は聡の眼を見つめて言った。思わず、

抱きしめたくなったが、その衝動をкаろうじて抑えた。

「へえっ、そうなんや。私が思てるよりずっと純粋な人なんやな」

和泉は玲奈から聡の大学進学の原因を聞いて、唸るように言った。

「なおさら、会ってみたくなったわ。オープンキャンパスに誘ってみた？」

「誘ったけど、来るのは恥ずかしいんやって」

「そうか」

和泉は飲みかけのコーヒーから口を離れた。

「でも、和泉を聡の家に連れてきてもいいって」

玲奈が和泉の顔を覗き込むと、和泉の顔色が変わった。

「いつなん？ 次の土曜日？」

「うん」

「行く、行く。あと、玲奈に会いたいって言うてる人があるんやけど、会う？」

「えっ、誰なん？」

玲奈は怪訝そうな顔になる。

「滝川君。高校の時のバスケット部の大阪選抜の男子」

「えっ、阿倍野学院高校から関西体育大学に行った滝川君？」

「そう、百八十八センチの滝川君」

「合宿の時に、食堂で一度話しただけやで」

「向こうはちゃんと覚えてくれてるってことは何かあるやろ。身長も釣り合うしなあ」

「こういうシチュエーションは苦手やわ」

「私も一緒に行くから大丈夫やで」

「さすが、持つべきもんは親友やなあ」
こうして、人と会う話が二つともまとまてしまった。

次の土曜日、玲奈と和泉は聡の家に向かった。駅を降りて坂道を上がっていく。

「すごいなあ、この辺。高そうな家ばかりやん」

和泉は辺りの豪邸をキョロキョロ見て驚嘆の声をあげる。

「聡のここは古いマンションの二LDK。中は改装してるから綺麗やけどな」

玲奈は聡の家に着くと、いつも通り呼び鈴を鳴らし、ドアを開いた。聡はスリッパを二

組持って、玄関に待機していた。
「はじめまして、川島聡です」

聡は挨拶をすると、玲奈と和泉の足元にスリッパを置き、二人分の荷物を預かった。

「はじめまして、堂本和泉です」

和泉も聡に挨拶した。玲奈はいつも通り、靴を脱いで、スリッパに履き替えた。聡は二人分の荷物を部屋の奥に運び、二人の靴を揃えた。そして、二人の上着を預かり、ハンガーに掛けた。

「すごいなあ」

和泉は聡の手際の良さに圧倒されていた。

「聡、宿題やったん？」

「はい」

玲奈はソファに座り、前に立っている聡からノートを受け取った。和泉は二人のやり取りを玲奈の隣で見ている。

「どういう関係なん？」

「先生と生徒やん」

玲奈は足を組んで、スリッパを揺らしながら、聡のノートを見ている。聡はその前で気をつける姿勢で立っている。

「自分の父親くらいの年の人をこんな風に扱ってええんか？」

和泉は小声で玲奈に囁いた。

「聡がこういう関係を望んでんねん」

玲奈は聡にも聞こえるような声で言った。

聡も黙ったまま頷いている。

「すごいわ。全然、パパ活とちゃうんや」

和泉は恐れ入ったという顔つきで二人を眺めた。

家庭教師の授業が終わると、テーブルには豪華な仕出し弁当が並んだ。和泉の分も聡は注文してくれていた。

「何もありませんが、どうぞ」

聡は二人分のお茶を入れると、玲奈が合図をして、和泉も食べ始めた。

「おいしいわあ」

和泉は新鮮な刺身を口に入れると、思わず声が出た。

「それは、良かったです」

聡も嬉しそうに自分の分に箸をつけた。

「いつから、こういうご関係なんですか？」

和泉は申し訳なさそうに聡に尋ねた。

「三年前からです。僕は生徒の側なので、玲奈先生に気を遣ってもらおうと悪いので、あえて年下だと思って接してくれるように頼んだんです」

「最初は演技でやってたけど、今はほんまに年下やと思ってる」

玲奈は左手でスィカのように聡の頭を軽く叩いた。

「でも、毎週二人で時間を過ごしていて、玲奈に愛情を感じたことはないんですか？」

和泉は聡の顔をまじまじと見つめた。

「あります」

聡のこの発言に、玲奈も思わず箸を置いて、二人の話を聞き入った。

「でも、僕はこの身長で、この年齢です。玲奈先生が対等に愛してくれる可能性は著しく低いです。ただ、生徒として先生からの寵愛は受けられています。それで十分です」

「……」

和泉は二人の關係に納得がいったようで、これ以上突っ込んだ質問はしなかった。食事が終わると、玲奈と和泉はデザートとコーヒをよばれ、聡は玄関へ二人の靴を磨きに行った。

「四十五歳には見えへんなあ。三十五歳くらいの印象やわ」

和泉は玄関口を見つめながら、玲奈に言った。

「結婚してへんから若いままなんやろなあ。いい人やろ？」

「うん。玲奈はどうなん？」

「何が？」

「聡さんに恋愛感情を抱いたこと、今までに一回もないん？」

「……」

玲奈は少し考えてから言った。

「好きになることはあるわ。あんだけ尽くしてくれる同世代の男は、いいひんから。でも、あえて、考えへんようにしてる」

「なんでなん？」

「聡を困らせたくないし」

「どういう意味なん？」

「もしも聡が今のままの關係をずっと望んでるんやったら、これ以上、踏み込まへん方がええんかなって思ってる」

「先生と生徒の關係を続けるってこと？」

「うん。もちろん、自分で制御できなくなったら、恋に落ちる可能性はあるけどな」

「そうなんや、深いなあ。何か二人の關係が羨ましくなったわ」

和泉はコーヒを飲みながら、壁に掛かっている絵を見つめた。虹色の帽子をかぶった

少女が笑っている絵だった。その裏に、はみ出ている紙片が目に入った。

「あれ、あの額縁の裏に何か挟まってんで」

和泉がそう言うと、玲奈は手を伸ばしてそれを取った。それは少女の写真だった。あどけない笑顔で両手を顎の下に置いている。

「かわいいなあ」

玲奈が和泉にその写真を見せようとした時に、聡が戻ってきた。玲奈は慌てて写真を背中に隠した。

「どうかしましたか？」

聡はきょとんとした表情を浮かべて玲奈の顔を覗き込んだ。

「えっと、この写真がその絵の裏から出て来てんだけど……」

一瞬、聡の表情が曇った。

「ああ、これは……、あ、姉の子です。昔の写真ですが……。出てきたんですね。ありがとうございます」

「……」

黙る玲奈に気遣ってか、和泉が声を上げた。

「さあ、玲奈。そろそろ帰るか」

「ああ、そやね」

玲奈は立ち上がると、聡から上着を受け

取った。和泉も聡から上着をもらった。

「じゃあ、また、来週な」

「ありがとうございます」

玲奈と和泉が同時に声を掛けると、聡は満面の笑みで、

「お二人とも、ありがとうございます。どうぞ、気をつけてお帰り下さい」

と言って、深々と頭を下げた。

二人が外に出ると、百万ドルの夜景が迎えてくれた。和泉は感動して声をあげた。

「帰りにこんな景色も見れるんや。そら毎週来なくなるわけやなあ」

「……」

玲奈は黙って下を向いたまま歩いている。

「玲奈、さっきの写真のことを気にしてんのか？」

「うん」

「ひょっとしたら、少女誘拐犯ちゃうか？あの年齢で独身って、ちよっと危ない人なんかも。ロリコンなんかなあ」

「ううん、多分、違うと思うわ」

「そうやな、真面目そうな人やし……」

二人は、軽く頷き合って、坂道をゆっくり下って行った。

聡の入試の日を迎えた。玲奈と和泉は聡の合格祈願で、近くの神社に参拝に来た。お賽銭は百円にした。試験で百点が取れるようにだ。

「この神社って、合格祈願以外にどんなご利益があるんやろ？」

和泉はスマートフォンを取り出して、検索してみる。

「えっと、恋愛成就やって。聡さんとのことをお願いしたら？」

玲奈は右手を横に振った。

「それはないわ」

「じゃあ、滝川は？」

「それはあるかなあ」

玲奈は恥ずかしそうに認めた。今日は滝川とランチに行くのだ。最初は和泉も同席する予定だったが、滝川が玲奈と二人きりで食事をすることを望んで、和泉は外されたのだ。

「ほんまに失礼やで、滝川。お前におごる金はないって」

和泉は砂利を蹴った。

「ごめんな、和泉。あんたが私に話をくれたのに……」

「ええよ、滝川って超合理主義者やから、きつと費用対効果を考えたんやと思う。私の役目は終わったから、そこにお金をかけへんって」

和泉は苦笑いをしながら続けた。

「玲奈、もしもの話やけど、今日、滝川と上手くいったら、聡さん、私にくれへん？」
「えっ、それとこれとは話が別やん。無理やわ」

玲奈は真顔になって両手でバツを作った。

「冗談、冗談。確かに背は低いし年もいつてるけど、若く見えるし、かわいい顔してるし、お金いっぱい持つてるやろし、優しいし、真面目やし、結構ええかも」

「そうやね」

玲奈は社務所を見た。

「おみくじ引いてみよか？」

「ええなあ」

玲奈は白い筒を揺らして、一本引いてみた。

「九番です」

巫女さんが、白い紙を渡してくれた。

「末吉やって。『待ち人さわりあり、来ず』ってどういう意味なん？」

玲奈はスマートフォンで意味を調べる。

「知らせはあるけど、待ち人は来いひんねんで、こんなん凶と同じやん。詐欺やで。お金返して欲しいわ」

「まあ、先でええことあるってことやから、私の大吉と交換しような」

和泉は自分が引いた大吉のおみくじを玲奈に渡すと、末吉のおみくじをポケットにしまった。

「私は、今日は何もないから、これから先にええことある方が嬉しいし」

「こんなことして、ご利益があるんかなあ」

「まあ、頑張っといで」

和泉は玲奈の肩をポンポンと二回叩いた。

滝川と待ち合わせたのは、梅田のインターナショナルホテルのロビーだ。もう何年も会っていないのに、よく覚えてくれていたものだ。

今日は、ラベンダーのハイネックトップスにグレーのスカート、黒のローヒールにした。数少ないコーディネートの中から無難なものでまとめた。化粧もアイシャドーと口紅はいつもより濃い目にした。

約束の十三時になって、滝川が現れた。丸坊主だった高校の時とは違い、ニュアンスパーマの茶髪で、グレーのジャケットに白いズボン、黒のローファーでシックに決めている。百八十八センチの長身は何を着ても見栄えがする。

「ごめん、待った？」

「ううん、今着いたとこやわ」

三十分も待ったなんて言えなかった。玲奈は滝川の余裕のある表情に圧倒された。またローヒールを履いていても、相手を見上げられる心地の良さを久しぶりに味わっていた。
「ここのレストランに予約してるんや。どうぞ」

「ありがとう」

ウェイターに案内されて、玲奈と滝川は大きな窓から緑に囲まれた庭園が見える窓際の席に座った。

「お飲み物は何になさいますか？」

「僕はコーラ。山崎は？」

「私はウーロン茶で」

玲奈は名字で呼ばれたのは久しぶりで、少し戸惑った。飲み物が来ると、軽く乾杯をして再会を祝った。

「いやあ、山崎、間違えたなあ。モデルみたいになってるやん。今日は身長だけが目印やったから、すぐにわかったけど……」

滝川はストローでコーラを少し飲むと、アイスブレーキングに入った。

「滝川君も格好ようになったわ。昔は丸坊主でジャージ姿やったのに……。私も身長だけを頼りに探してたわ」

「確かに、こんな大きい奴ら、この辺にはおらんしなあ」

「そうやな」

二人はお互いの顔を見て笑った。

「滝川君、今バスケは？」

「やってないわ。高校までが限界やった。山崎は？」

「私も辞めた。高校では大阪選抜に入るんがやっとこさで、大学からのスポーツ推薦は来なかった。英検二級のおかげで外大に入れたし、中学の英語教師になろうと思って、今、教職課程を取ってんねん」

「へえっ、学校の先生か。山崎は面倒見が良さそうやから、向いてるかもな」

コース料理のアパタイザーが運ばれてきた。カルパッチョやブルスケッタ、カナッ

ペ、チーズの盛り合わせが白いテーブルクロスを彩った。料理の説明が入るが、玲奈にはよくわからない。滝川も聞いていなさそうだった。

「見栄張ってこんなところに連れてきたけど、料理の内容は不明なんや」

滝川は慣れない手つきでフォークを使って、チーズを口に運んでいる。

「ありがとう。非日常で、いい感じやわ。高そうやし、割り勘でええから」

「今日は来てもらったんやから、おごるわ。」

予算オーバーで堂本はリストラしたけどな」

滝川は笑いながら、和泉を外した理由を伝えてくれた。

何がどうおいしいのかは、よくわからなかったが、緊張しながらのランチの時間が終わった。その後、玲奈と滝川は百貨店に行った。男の人とデートするのが初めてだった玲奈には新鮮な時間だった。玲奈はランチのお礼に何かプレゼントしようと考えて、ブランド物のハンカチを買って渡した。

「気を遣わせてごめんな。でも、ありがとう。今日は楽しかったわ。また、会ってな」

滝川はハンカチを受け取ると、大事そうに

カバンにしまった。玲奈は軽く頷いた。最初のデートとしては、これくらいで良かったのかもしれない。

滝川と駅で別れると、時計を見た。十六時五十分。ずいぶん長居してしまった。家庭教師の時間に間に合わない。慌ててSNSで聡に連絡を取った。

『四十分ほど遅れる』

と打ってから理由を考えていると、

「神戸線で、車両故障のため遅延が生じています。お急ぎのところ申し訳ございません」

とタイミング良くアナウンスが入った。その後、急行に乗って聡の家に向かった。

電車の中でスマートフォンを確認しても、既読がつかない。いつも返信の早い聡がSNSを見ていないのは、何かあったのだろうか。入試のことも気になる。玲奈は不安を感じつつ、はやる気持ちを抑えるために、スローテンポの音楽を聴いた。

駅に着いたが、まだ既読はついていない。ローヒールに慣れていないが、足早に坂道を駆け上がった。聡の部屋の前に到着すると、呼び鈴を鳴らし、ドアを開いた。

聡はいつも通りスリッパを持って、玄関に

立っていた。

「既読がついてへんけど、メッセージ読んでなかったん？」

玲奈は荒々しく聡に荷物を渡した。

「すみません、スマートフォンを大学に忘れて。でも、見つかったみたいで、明日の短期大学部の受験の日に返してもらえるそうです」

聡は小さい声で恥ずかしそうに言った。

「そうなんや。じゃあ、ずっと、玄関でスリッパ持って待ってたんや」

玲奈はため息をつくとき、ローヒールを脱いで、スリッパに履き替えた。

「今日は、いつもと雰囲気違いますね」

聡は玲奈から上着を受け取ると、上目遣いに玲奈の表情を伺った。滝川との視線のギャップを感じながら、玲奈は聡から目を逸らした。

「試験はどうやったん？」

玲奈はソファに座ると、聡の方に手を伸ばした。聡はカバンの中から入試問題を取り出して玲奈に渡した。

「リスニングが少し難しかったです。長文はできたと思います」

聡は直立不動でそう答えた。

「まあ、今日はチャレンジで明日が本番やら、気合を入れてな」

「はい」

いつも通り、単語テストをして、長文、文法、リスニングのノルマをこなした。明日の短期大学部の入試は通りそうだ。他の男とのデートに使われた靴を一生懸命磨く聡の後ろ姿を見ながら、エクレアを食べて紅茶を飲んでいると、玲奈は不思議な気持ちになってきた。

――多分、聡は今日の私の行動を全部知ってるわ。他の男とデートしたことも、時間に遅れて嘘ついたことも。それでも、私を慕い続けて、私の靴を磨いてくれているんや。

気がつくと、玲奈は聡の後ろに立っていた。聡は振り返って玲奈の顔を見上げた。

「すみません。今やっと、靴磨きが終わりました。素敵な靴ですね。初めて見ました」

玲奈の靴は光沢を帯び、ダイヤモンドのように輝いている。いつもは男性用のローファーを履いているが、今日のローヒールは外国の通販サイトで買ったサイズの大きい女性用だ。

「……」

こうして、黙って聡を見下ろすのも悪くはなかった。玲奈は滝川を見上げる時と同じくらいのドキドキ感を聡にも感じた。

「どうかされましたか？」

聡はしゃがんで玲奈の靴を玄関に揃えると、玲奈の顔を下から見上げた。玲奈もしばらく聡の顔を見つめた。もう言葉は要らないはずだった。

しかし、玲奈の気配を感じ取った聡は思わず視線を逸らした。

「す、すみません」

聡は頭を下けたままだ。

「なんで謝るん？ 変やん」

玲奈は優しく微笑んだ。聡は慌てて立ち上がると、玲奈の上着と荷物を取りに行った。

「じゃあ、明日も入試、頑張ってきてな」

「ありがとうございました」

「……」

玲奈は無言でドアを閉めた。何か階段を上っている時に、一段外されたような拍子の抜けた感じがした。

次の日に、SNSで聡から連絡が入った。

『今日の試験はできました。玲奈先生のおかげです。ありがとうございます』

玲奈は既読だけつけて、聡の言葉を噛みしめた。

「また、あのおっさんと連絡取ってるんか？いい加減に普通の恋愛でもしたらどうなん。

大学生の今が『売り』やのに……」

玲奈の母はビールを飲みながら、スルメを噛みしめる。

「別にええやん。私の勝手やし」

玲奈は母に背中を向けた。

「あんたをこんな子にしたんは、私にも責任あるしなあ……」

玲奈の母は小さな声で言った。

「責任って、どんな？」

「お父さんと離婚して苦労させてるってこと」

「そんなん、別に苦労とは思ってないよ。

お母さんが苦労するんは自業自得やけどな」

「そうやね。ダメな男を選んだからなあ」

ビールがゴクゴクと玲奈の母の喉元を勢よく流れていく音がした。

「お父さんのせいだけとちゃうわ。お母さんはどうなん？二人でやっていこうとする努

力が足りひんかったんとちゃうん？」

玲奈は振り向き様に母に言った。

「他人が一緒に生活していくんって、ほんまにたいへんなんやから。ただ、あんたがおじ

さんを好きになるのは、お父さんがおらんからやと思うわ。それに関しては申し訳なく思ってるねん」

玲奈の母は下を向きながら、そう言った。

「私は聡に父親を求めているんやろか？いや、そんなことはないわ。」

玲奈は自室に戻ると、インターネットで服

を探した。滝川から次のデートの予約がSNSに入る。いつも同じ服っていうわけにはい

かない。聡のアルバイトで得た潤沢な資金を

使って、外国の通販サイトで、サイズの大きな服を注文する。スカートとローヒールの靴

が増えた気がする。

次の週の土曜日に玲奈は滝川と美術館に

行った。好きな絵があるわけではなく、ただ

美術館というところに行ってみたかったのだ。今日のランチ代は玲奈が払った。美術館

の入館料は滝川持ちだ。

「絵見ても、全然わからんなあ。つくづく中

学、高校時代に何か文化的なことをやっくのとて大事やと思うわ」

「同感やわ」

二人は笑いながら、館内の喫茶店に入った。アイスコーヒーを注文して上着を脱いだ。

「今日はこの後、何か予定あるん？」

滝川が聞いてくる。

「うん。十七時から家庭教師やわ」

「そうなんや。何年生を教えるん？」

「大学受験生やで」

「それは責任重大やな」

「うん。まあ、もうじき終わりやけどな」

「どこか決まってるん？」

「今日の十七時にネットで発表なんや」

「そうなんや、合格してるとええなあ」

「うん、ありがとう」

アイスコーヒーが来た。ミルクを沢山入れてかき混ぜると、白くなった。

「入れすぎやで、ミルク」

「今日は黒より白の方がええから、ゲン担ぎやわ。あんまりおいしくなさそうやけど……」

玲奈は苦笑いしながら、一気に飲み干し

た。

聡の部屋の前に立つと、玲奈は二度深呼吸してから、呼び鈴を押して、ドアを開いた。

聡はスリッパを持って待っていた。いつも通りのルーティーンを済ますと、奥の部屋のゲーミングチェアに玲奈は座った。

十七時になり、パソコンで大学のホームページから合格発表のページを開いた。聡は受験番号と生年月日を入れる。玲奈の通う四年制の外国語学部は不合格だった。しかし、短期大学部の方は無事に合格していた。

「良かったなあ。これで大学生やね」

玲奈は聡の肩を抱いた。

「ありがとうございます」

聡は深々と頭を下げる。今日で家庭教師も終わるのかと思うと少し寂しさもあった。

「よう頑張ったわ」

「お茶でも入れてきます」

聡は照れくさそうに台所に移動した。玲奈もリビングのソファに座り直した。足を組むと、聡がテーブルの上にお茶を置いてくれた。

玲奈はため息をついた。三年も一緒にいた

のに、二人で外に出たこともないし、写真の一枚もない。少し寂しい。

「聡、一緒に写真撮るか？」

「はい」

二人でVサインの写真を撮った。同じ目線で撮れば、少しだけ年の離れた恋人同士に見えなくもない。SNSで聡に写真を転送した。

「聡、私のこと、どう思ってるん？」

聡は視線を外して答えた。

「す、好きです」

「私、今日、同い年の男子と美術館に行ってきた。どう思う？」

「……」

「こうしてスカート履いて、他の男と昼間歩き回った時に履いてた靴を聡は後で磨くんやで。どう思うん？」

「……」

「悔しくないん？ 私に腹が立たへんの？」

「……」

「聡は本当にそれでええん？ 私のことが本当に好きなんやったら、独占したいと思わへんの？」

「……」

「何とか言うてや」

「僕には、そんな権利はないです。僕は玲奈先生の生徒で、恋人ではないですから」

「そう、卑怯な男やなあ」

「……」

「この前、私は聡にキスしようとした。それがわかってるのに、視線を逸らして逃げたやん。なんで？」

「怖かったんです。玲奈先生と恋人関係になるのが」

「怖い？ 恋人関係になることの何が怖いんですよ？」

「僕のような人間が玲奈先生と対等の関係になるのが怖かったのです。僕は今のままで十分満足なんです」

「聡は自分のことしか考えてへん。私は今のままでは満足できひんの。私らは、ほんまに社会から受け入れてもらえへん関係なん？ 他人が何なん？ 世間が何なん？」

「……」

「わかった。今日で家庭教師も終わりやし、もう二人で会うこともないわ」

「……」

聡は黙って下を向いたまま立っている。玲

奈はスマートフォンを出してSNSを確認した。

『聡さん、どうやった？ 合格してた？』

和泉からだった。

『生徒、合格してた？』

滝川からだった。二人に合格の報告をしたら、すぐに既読がつき、祝福のメッセージが届いた。

その時、チャイムが鳴り、仕出し弁当が届いた。聡は手を洗うと、テーブルの上を片付け、玲奈の前に弁当とみそ汁とお茶を置いた。自分の分もテーブルの反対側に置いて、椅子に座った。

『どうぞ、食べて下さい』

玲奈はお重を開けた。とんかつにハンバーグに白身魚のフライにカキフライまでついている。聡も弁当に箸をつけた。

『聡、ごめん』

『えっ？』

玲奈が謝ると、聡は意外そうな声をあげた。

『私の気持ちを押しつけてしても……』

『いえ』

『上手く言えへんけど、聡との三年間とはとて

も楽しかったん。私が三歳の時に両親が離婚してて、物心ついてから一度もお父さんに会ったことないねん。だから、きつと、お父さんとの生活にすごい憧れがあったんやと思う』

『……』

『でも、聡をお父さんの代わりに見てたわけとちゃうよ。お母さんによると、うちのお父さんは大柄で、すごいワガママな人やつたらしいから、聡とは似ても似つかんわ』

『……』

『聡は、よう気がつくし、怒らへんし、優しいから、私が好きになってもしゃあないわ』

『……』

『でもずるいわ。これだけ好きにさせといて、最後は逃げるんやから。今までずっと同じことを続けてきたんとちゃうか。卑怯やで。だから結婚できひんねん。世間体とか人がどう見るかなんて関係ないやん。ほんまに好きなんやつたら、そう言うたらええやん』

『……』

『これだけ言われて、何か言い返すことはないん？』

黙って下を向いている聡を玲奈は見下ろし

た。聡は箸を置いた。

『玲奈先生、僕も本当のことを話します』

聡は視線を玲奈に合わせた。今までにない真剣な表情に玲奈の顔もこわばった。

『実は、今から二十二年前に僕はある女性と結婚しました。そして、子供ができました。女の子です。そうです。あの写真の子です。あの壁に掛かっている絵は、あの子が三歳の時に、姉からプレゼントされたものです』

『……』

『名前は『玲奈』とつけました。玲奈先生と同じ漢字です。『玲』は清らかで宝石のように美しいという意味で、『奈』は左右対称の末広がり縁起が良い字だと言われました』

『……』

玲奈は黙ったままだ。玲奈の名づけ親のお婆さんから聞いたのと同じ意味合いであったからだ。聡はさらに話を続ける。

『僕たちは大切に娘を育てようと思いましたが。しかし、僕の妻は娘が三歳になると、保育所に預けて働きに出るようになりました。娘にピアノを習わせたいと思っていたようです。僕の給料では十分ではなかったのです。そして、保育所で事故に遭って娘は亡くなりました』

ました。僕は妻を責めました」

「……」

「妻が働きに出なかったら、こんなことにならなかったと思っていました。このことが原因で僕たちは離婚しました」

「……」

聡の瞳からは大粒の涙がこぼれていた。玲奈はただ黙って聞いていた。

「道子さんから家庭教師の候補者の履歴書を三通見せられた時に、名前を見て玲奈先生に決めました。そして、玲奈先生と初めてお会いした時に娘の生まれ変わりのように僕は思いました」

「……」

「もともと僕の娘ですから、背格好は玲奈先生とは似ても似つかないくらい小さくて器量も良くなかったでしょう。でも、僕は玲奈先生を娘の代わりに大切にしようと思いました。かつての罪滅ぼしのつもりだったんです。でも、玲奈先生に誤解させてしまったら、本当にすみません」

聡は何度も頭を下げた。

「私の方こそ、勝手に恋愛感情を持ってしまったってごめん。聡の気持ちはようわかった

わ。他の男と遊びに行ってきた靴を喜んで磨いてくれるのって、父親が娘に与える無償の愛なんやな。初めて経験したわ」

玲奈の視界に入る聡の姿がぼやけて見えた。

「玲奈先生」

「もう、先生って呼ぶのは止めてな。これからは対等やから、敬語も禁止やで」

玲奈は立ち上がって聡を抱きおこすと、しっかりと抱きしめた。

「玲奈……」

「それでええよ。私は聡のこと、『お父さん』って呼べるかなあ。悪いけど、自信ないわ。でも、聡が私のお父さんになってくれるんやったら、嬉しいわ。いっぱい甘えたい。これからは私を支えてな。頼れる存在になつてな」

「わかったわ。ありがとう、玲奈」

聡も玲奈を抱き返した。

「お父さんとこんなふうに抱き合ったことってあったやろうか？」

玲奈は子供の頃のかすかな記憶をたどって見たが、思い出せなかった。

「そうなんや。その展開は読めへんかったなあ」

次の月曜日の午後、大学のカフェテリアで、玲奈は和泉と一緒にパスタを食べていた。

「びっくりしたけど、これで良かったかなって、正直、ホッとしてるところもあるわ」

玲奈は笑いながら言う。

「聡さんも滝川も両方取れたし？ 二兎追う者は二兎とも得るか。お父さんと恋人を一気にゲットって、羨ましいなあ」

和泉はフォークを口に挟んで、両手でピースサインを玲奈に送る。しかし、玲奈は首を横に振った。

「滝川君には全てを話してん。聡に恋愛感情を持ってたって……」

「えっ、言わんといたら良かったのに……」

和泉は口からフォークを落とした。

「滝川君は同じような青春を過ごした仲間って感じやわ。報告した時は相当ショックを受けてたらしいけど、今は立ち直ってるって言うてた。これからは普通の友達として続いていくわ、多分」

「正直者やね、玲奈は……。ああ、私も恋愛

してみたいなあ……」

「和泉はどんな人が好きなん？」

「面白い人がええかなあ。真面目な人よりは
明るくて、お笑い系の人がええわ」

「滝川君の友達で、そんな人いるか聞いてみ
よか？」

「いいなあ」

和泉はサラダを頬張りながら微笑んだ。

「わかった。言うとかわ」

玲奈がスマートフォンをカバンから出す
と、聡からSNSで連絡が入っている。

『玲奈、入学手続きの書類が送られてきたん
やけど、書き方がようわからんから助けて』

玲奈は既読をつけて、

『了解、お父さん』

と送った。

グリーン賞 螢の送り火

五城目町 渡邊 莉花

かなかなかなかな
げこげこげこげこ

奥の草むら、木々から日暮と蛙の鳴き声が一緒にした。

薄暗がりの中、ずっと向こうまで続く田んぼのあぜ道に、何かがうずくまっていた。

日暮と蛙の鳴き声。それと、子供の泣き声。うずくまっているのは、男の子だった。小さな体を抱え込むようにして泣いている。周りを見回しても保護者のような人物は誰もいない。男の子は一人のようだった。

その様子を、俺はただ黙って眺めていた。田舎と云えど、子供が出歩くにはもう遅い時間だ。声をかけて、保護者に連絡するか、家まで連れて行ってやるのがいいのだろう。だが、俺は黙っていた。いつまでも涙を流す少年をただ見下ろしていた。

男の子が誰なのか、知っていたから。

このあと男の子がどうなるのかも知っていたからだ。

男の子はまだ泣いている。

そんな男の子に、ぼつんとした淡い光が近づいた。

遠い星空の下、たった一つの灯りに男の子が気づいたようだ。ぐずぐずと鼻を吸りながらも、灯りを追ってぐちゃぐちゃの顔を上げた。

灯りの正体が、男の子にも俺にも分かったとき。

そこでまた、ゆっくりと意識が浮上した。

ぱちぱちと、重い瞼を何度か瞬きする。それでも視界はばやけたままだった。指でごしごしと擦って、ようやく見慣れた天井の、見慣れた木目が目に映った。

むき出しの両腕に、畳の感触。むくりと体を起こして、それからまた目を瞑った。座布団すら敷かなかったから、首が痛い。右に左と動かすと、カキコキと体の中から音が響いた。立ち上がろうとして、昼に嫌というほどかいだ匂いが部屋に漂っていることに気がつ

いた。まだ、線香の香りが残っているのだ。そしてそれは、このくたくたの高校の夏服にも染み付いてしまったらしい。

どうやら俺は、かなかなという声を聞きながらぼーっとしていて、気付いたら眠ってしまったようだった。しかしその眠りは心地の良いものではなくて、蒸し暑さがまとわりつく、けれど冷たくて暗い泥水の中に引きずり込まれるような、そんな気持ちの悪い眠りだった。おまけに嫌な夢まで見てしまった。

畳に夕日が差し込んで、空気中では橙色の塵が無数に踊っている。

それをぼんやりと眺めながら、ふと思いついた。

そうだ——あの場所に行こう。

人間の眠りには浅い眠りと深い眠りの二種類あり、ほとんどの人はその二つを繰り返しながら寝ている——と言ったのは、先生だったか。その内夢を見るのは、浅い眠りの方らしい。だとしたら、さっき夢を見た俺の眠りも、浅いということになる。ここ最近、ずっとそうだ。寝ようと思っても暑さがまとわりついて、眠れない。運良く意識を手放せた

しても、数時間もたたずに起きてしまう。

あそこに行けば——何か変わるかもしれない。
い。

そう思って立ち上がり、襖の向こう、縁側に出た。

「あらっ、薫」

「……母さん」

鉢合わせしてしまった母さんは、やはり黒のワンピースは似合っていないかった（実際にこれをワンピースと呼ぶかは分からない。俺は上下がつながっている女性用の服はだいたいワンピースと呼んでいる）。母さんは本来、暖色系の色がよく似合う明るい女性なのだ。いつもからからと笑っているような——あいつみたいに。

「出かけるの？」

「ああ、ちょっと……アイスを買いに」

「そう、気をつけてね」

「うん」

うっすらと隈のできた母さんの目に見つめられると辛くて、なるべく目を合わせないようにして横をすり抜けた。

特段アイスを食いたいわけではなかった。

母さんにこれから行く場所を伝えたら、きつ

と止められると思った。心配をかけたわけではない。けれどあの場所に行かなければいけないと思ったのだ。

家を出ると、日暮の声は一層大きく重なりを増した。同時に、夕陽が容赦なく体を刺してくる。それらを振り払うようにして、俺は足を動かした。

「薫、俺のパピコ食っただろ」

「は？」

その日、あいつが唐突にそう言ったのは、朝ごはんの目玉焼きを半分に割ったときだった。

あいつ、というのは俺の弟——一颯（いぶき）のことだ。双子だ。おまけに一卵性双生児ということもあり、顔だけはやはり似ている。顔だけは。

「俺のつてお前、あれは二本に分けたうちの一本だったろ」

「そうだけど！ チョココーヒー味の時はどっちも俺が食べたかったの！」

高二にもなってアイスで大袈裟に怒るこいつは子供っぽい。俺たちは双子といえど、性

格はあまり、というか全く似ていないのだ。ちなみに俺はチョココーヒー味よりもグレープ味の方が好みだ。

「だったら先に言うか、名前でも書くなりしとけばいいだろ」

「そうだけど！ 俺たち双子だろ？ 以心伝心、しようぜ」

ったく、これだから薫は——と言いながら、奴は俺の皿のベーコンを箸でつまもうとしたので、脇腹に拳を入れてやった。

「イテッ。何するんだよ、薫！」

「うるさい、お前が悪い」

自業自得だ。取り返したベーコンを口に放り込む。

「あーもう、先生ならこのくらい許してくれるのにさ」

「あー？」

「先生」というのは、俺たちの幼馴染みのことだ。もちろんそれは本名ではなく、同い年にしては大人びているという揶揄も含め一颯がそう呼びだしたのだ。小さい頃からのあだ名で、俺もそう呼んでいる。

「そりゃあそうだろう、先生は」

「そりゃあそうだろう、じゃなくて！ 薫も先

生くらしいの優しさをさあ……」

「ご馳走さまでした」

「お粗末さまでした！」

さっさと皿を片付け出す俺に一颯からの恨めしげな視線を感じるが、無視する。

「薫ー。部活帰りにでもアイス、買ってきてくれよ」

「ああん？」

もう食卓を出ようとしていた。そろそろ部活に行かなければいけない。もちろんそれは一颯と同じはずだが、こいつは既に食べ終えているというのに、だからと椅子で揺れている。

「お前、自分で食べたいなら自分で買えよ」

「えー、でも薫も食べたいだろ？」

「そ、それはそうだが……。俺は部活、真面目にやってるからな。帰りは疲れてるんだ」

「ひどい！俺だって卓球真面目にやってるし！」

よよよ、と嘘泣きをして抗議をする一颯だが、別に卓球部を馬鹿にしたつもりはない。単にバスケ部の方が卓球部よりも練習時間が長いのだ。

「いいよいいよ！薫の分、買ってやんない

からな！チョココーヒー味、全部俺が食べちゃうもんね！」

「行ってきます」

「行ってらっしゃい！」

夏休みといえど、朝は忙しいのだ。少し遅れただけで先輩にどやされるかもしれない。

靴を履き替え、俺は振り返ることなく痛いくらいの日光が振りかざされた外に出たのだった。

「イテッ」

膝と、右の手のひらから腕にかけてざらざらした痛みが走った。ぼんやり歩いていたら、情けないことに転んでしまったのだ。じんわりと血が滲んだ腕を見ても、何とも思わなかった。

立ち上がった、一応、ズボンについた砂を落とす。また目標の場所に向かって歩き出した。足は、主に左膝にヒリヒリとしたものを感じるが、我慢できないというほどではない。制服のズボンを履いていたことが幸いだ——そう思うことにして、怪我の具合を確認することすらしなかった。

一応、さっきよりは足元を確認しているが……たぶん、別に大きな小石があったわけでも、段差があったわけでもないんだ。

涼しさのかけらもない風が、右腕の敏感になった肌を攻撃する。

あの場所に、自分から向かっているというのに、足取りが重い。ちゃんと足を上げられなくて、なんでもない道に躓いてしまう——情けない。

こんなところ、一颯に見られたら。

何やってんだよ、と笑われてしまう。

あまり前を見て歩かなかったものだから、ここまで辿り着くのに時間がかかってしまった。

細い砂利の道を進む。左側はぐんぐん成長中の稲、右側には清い小川。沈む目線の先に赤々とした夕日が刻々と沈みかけているのが目に入った。それでようやく、空が群青色の面積の方が広がっていることに気がついた。もうすぐ、夜だ。けれどもまだ、鬱陶しいような暑さはずっとまとわりついてくる。日暮が鳴いている。それに蛙の合唱も加わった。それ以外には何も無い。

ここには毎年、一颯と先生と三人で花火をしに来ていた。

見ろ薫、二刀流だ！ と走り回る一颯に、応戦する俺。その様子に笑っている先生。

それはつい数日前のことだというのに、なんだかずいぶん昔のことに感じられた。

でも今はここに俺一人で、日暮と蛙がただただ五月蠅い。それでふと、もう何年も前のことが頭の中に蘇った。

花火とは別に、この場所には少し、かすれた思い出がある——と言っても、これはあまり覚えていたくないタイプの思い出だ。

きつと、小学校に入るよりも昔のことだったと思う。発端は忘れたが、一颯と喧嘩して、家を飛び出したことがある。今では適当にあしらえるようになったが、あの頃は俺も馬鹿正直にあいつとぶつかっていた、気がする。子供の足でがむしゃらに走って、田んぼのあぜ道の真ん中で体を抱え泣いていた。

だんだん薄暗くなってきて、蛙の合唱も不気味に思えてきたから、何度か帰ろうとは思ったはずだ。でも帰ったらアイツがいる……そう思うと体が持ち上がらなくて、その

ままどんどん日が暮れた。

結局俺があの日、一人では帰ることはできなかった。じゃあどうしたのかと言うと……。

忘れてしまった。

喧嘩して家を飛び出すなんて小っ恥ずかしい記憶、そもそもおぼろげであまり覚えていない。だがまあ、こうして今無事でいるということは、帰れたのだろう、きつと。そう納得したところで、鼻を伝った汗がぼたりと地面に落ちた。

田舎の夜、ここには誰もいない。

昼寝をした頃よりはいくらか涼しいはずだが、背中にまだ蒸し暑さがしがみついている、心地よさなんて欠片もなかった。

「薫には今年も勝つ！ 先生には今年こそ勝つ！」

一颯が憎たらしいキメ顔でそう言った。両手の手持ち花火。左手をビシッと突き出している。その仕草もまた子供っぽいというか、一颯らしかった。

もうすっかり沈みそうな夕日が実りかけの

稲穂を染め、あとは群青色が広がっていた。

砂利の上には水を張ったバケツと、炎をゆらす蠟燭、それに大量の手持ち花火。花火は三人で持ち寄り、蠟燭は先生、バケツは俺たちの家から持ってきたものだ。ところどころ薄汚れて傷のついたバケツの側面には、平仮名で小さく「かおる」、大きく太い字で「いぶき」と書かれてある。

一颯のこの宣戦布告は、三人だけの花火大会の締めに行う線香花火のことだ。そもそも相手にされていない俺はムツとする。確かに去年は、開始四秒で俺の火玉はぼつりと落っこちたのだが。

「一颯、線香花火の話は、まだ早いよ」

先生がぐすりと笑った。そこで俺は、一年前のときも全く同じやりとりをしたことを思い出した。……つまり俺は、二年前も早々に火玉を落としたということだ。嫌なことに気づいてしまった俺の手持ち花火の勢いがだんだんとしおれていった。

「いや、先生強いからなあ。先に言うておくことで自分の士気を高めてるんだ！」
「どういことだよ。あと、当然のように俺は先に負けることを前提にするな」

「へへっ、そんなこと言って薫、これにはすっごく弱いからなあ。」

けっこう運悪いよな、と笑う一颯にぐうの音も出ない。おみくじで大凶を引くこともあった。そしてその横で、あいつは大吉を引いていたりするのだ。先生は、たしか中吉だったか。「なんだか微妙だねえ」と苦笑いしていたのを覚えている。

「一颯、毎年勝っていたからって今年も薫に勝てるとは限らないだろ。もちろん、僕も負けないけどね」

先生がそう言って、火花を完全に吹き切った火花をバケツに差し込む。同時にジュッと、短く心地いい音がした。その横で俺は新しい火花を蠟燭に近づける。

「いいや、俺が勝つね。前はギリギリのところで負けちゃったけど」

まだそう主張する一颯の二刀流の火花が燃え尽きて、奴はその二本を勢いよくバケツに突っ込んだ。

俺は足元に向けていた火花を胸くらいの高さ上げてみた。ちょうど夕日が完全に沈んで、視界に火花のばちばちとした明るさだけが残った。

「僕、思うんだけど」

その火花もとうとう勢いを無くしてきたとき、先生がぼつりとつぶやいた。

俺は黙って先生に目をやり、そこらに転がっていた拳大の石に火花をぶつけて遊んでいた一颯も「ん？」と顔を上げた。

「来年から、火花をやる場所、変えたほうがいいと思うんだ」

「は？」

「へ？」

俺と一颯から、情けない声が漏れる。先生の言った言葉が唐突すぎて、まったく意味が分からなかったのだ。

きょんとした目を向けられた先生は「ええつとね」と、困ったように瞬きをした。

「この場所って、本当は蛍の群生地らしいんだよ」

そう言っ先生は何も持っていない手を組んで、ゆっくりとしゃがんだ。先生のいつも穏やかな目に、夜の小川が映り込んでいる。

「ああ、この小川があるからか？ たしかに綺麗だもんな、水」

「うん、そうだけど、ほら」

俺の言葉に頷いたあと、一颯の方を見る先

生。正確には、一颯の手元を見ている。

「……こんなにバチバチやってちゃあ、蛍が寄ってくるわけがないか」

「そうなんだよ」

うんうんと頷く先生。蛍がいる場所では火花をするとそこにいた蛍が寄らなくなるから、場所を変えようというわけだ。なるほど、先生らしい。けれども俺は、そんなに納得ができていない。

蛍なんて、光るだけで結局ただの虫じゃないか。火花を言っても夏のこの一日だけだし、虫はどちらかというと嫌いな俺は、蛍がいるからといってわざわざ場所を変える必要があるのかと思った（なぜ虫が嫌いになったのか……。主に、一颯のせいだと言っ述べておく）。

そう言おうと、口を開きかけたときだ。

「そうだな、来年から別の場所でやるか！」

一颯が、すくっと立ち上がった。溜まり場が火事にされちゃ、たまったもんじゃなければ、と続けると、バケツにさっきまでの火花を放り投げた。先生が嬉しそうにするのが分かった。

「薫も、それでいいだろ？」

くるり、と一颯が俺を振り返る。それは強要でも何でも無い、純粹に、ただ俺に聞いた、というだけの言葉なのだろう。

「……ああ」

なるべく淡々と、いつも通り答えるようにした。喉か胸元のあたりに、花火の燃えかすが押し詰められたような気がした。しかし一颯は満足したのか、「そっかそっか！」と楽しげに新しい花火を手を取った。器用なことに左右二本ずつ、合計四本を手を収めている。

「でも今日は、この場所最後の花火ってことで楽しもうぜ」

ばちばち、と通常の四倍にもなる花火の音。先生がそうだね、と返すのが聞こえた。

俺は燃え尽きた花火を捨てもせず、持ち手の部分を右手でぐりぐりと押し曲げたり丸めたりしながら、ただぼんやり、すっかり夜の色に染まった田んぼを眺めた。

「にしても、蛍かぁ。そんなの俺、知らなかったよ」

「僕も父さんから、初めて聞いた」

「だよなあ。薫は？」

「——えっ？」

急に自分の名前が出て、喉から締めりのない声が漏れた。しまった、全く聞いていなかった。二人の方を振り向くと、揃ってきょとんとした顔をしていた。

「悪い、何が？」

「だから、ここに蛍が集まるって、知ってたかって」

やれやれ、という仕草をする一颯にイラッとすると、ぼーっとしていたのは俺なので、こいつの頭をはたきたくなるのを強い精神力で我慢しながら答えた。

「知ってたが、何だよ」

「うえっ！ 薫、知ってたの？」

大げさに驚く一颯。先生も、驚いたように目を丸くしている。

「うるさいな、って、俺は知ってて一颯は知らないのかよ」

「こっちのセリフだよ！ なんで薫は知ってたんだ？」

「それは……」

言われて、はたと気づいた。

この場所は、蛍の群生地。なぜ俺は、そのことを知っていたんだろう？

頭にこんな疑問が浮かんだあと、日暮と蛙

の声、何年前かもわからない、夜のあぜ道と、淡い光が脳裏に蘇った。

「薫？」

不思議そうな顔の一颯が、下からひよいと覗き込んできた。

「うわっ！」

「え、なに」

不覚にも驚いてしまった。あのときのことを思い出していたこともあり、余計。一颯が、逆立ちした蛍でも見たような顔をする。

「驚かすなよ！」

「ええっ、いつも通りじゃん」

眉を下げる一颯。その後ろで先生が全身で笑いを堪えているものだから、俺はあまり面白くない。

「それで？ 薫はなんで知ってたんだ？」

「知らん、忘れた」

「えー！ なんだだよー！」

不満げに抗議する一颯。それを無視して、俺は新しい花火を、さっきよりも背丈の減った蠟燭に近づけた。

「来年は、さ」

背中から、一颯の声がする。俺は振り返らずに、火花を吹き出す自分の手のそれに視線

を落としていた。

「花火じゃなくてここに、蛍を見にこようぜ」

いいねそれ、と先生が返すのが聞こえた。

水面に、丸になりきっていない月がゆらゆらと揺らめいていた。

一向に存在感を無くさないヒリヒリとした腕の痛みを、俺は無視した。

あの花火の夜は、それから——これも毎年恒例である、「誰が一番長く火を持たせられるかゲーム」が始まった。俺はやはり、これにめっばう弱くて、残念ながら早々に寿命が尽きてしまった。あとは一颯と先生のそれをばんやり眺めることになった。

その頃にはあたりはもう真っ暗で、灯りといえど青暗い夜に浮かぶ月と、一颯と先生の線香花火、すっかり短くなった蠟燭の炎くらいしかなかった。

「薫、どっちが勝つと思う？」

そう、一颯が聞いてきたことを覚えている。

だけど、それで……。俺はなんと答えて、

結局どっちが勝ったんだっけ？ どうしてだろう、たった数日前の出来事だというのに、

肝心な勝敗については記憶から抜けてしまっている。あのとき、一颯の予想通りの一番に負けてしまつて、少し面白くなかつたから

だろうか。

不思議に思いながらも砂利の上にしゃがんでみた。バケツや蠟燭を置いたのはたしか、このあたりだ。

そうだ、早々に負けて、面白くなくて——

俺は二人の方ではなく、真っ暗な小川を眺めていたんだ。だから最後、二人のどちらが勝つたのか分からない、のだろう。それにし

たつて記憶がおぼろげだが。

俺はゆっくりと、小川を挟んで向こう側の稲穂に目をやった。それでふっと、思い出した。

あの線香花火の時間、頭に何を思い浮かべていたか。

蛍だ。

先生の話を聞いて、思い出したのだ。

何年も前、一颯と喧嘩して家を飛び出し、この田んぼまで走って、夜まで泣いたこと。

——そして、暗闇の中に、蛍を見たこと。

そのたぐさんの光を、帰って来ない俺を迎えにきた、あいつと一緒に見たこと。

俺はこのときの光景を、もう覚えていて、もう何度も思い出していたんだ。

数日前の、花火のときも。

昼寝の、夢の中でも。

それから——あいつが、死んだと聞かされたときも。

ふと、視線を小川に落とす。ばんやり月が映り込んでいた。

「——ああ、」

見れない。

見れなかつた。

月明かりの下の稲穂も、小川も、夜空も、足元すらも。

ぜんぶぜんぶ、あいつを思い出してしま

う。

気付いたら勝手に、鳴咽が漏れた。足に力が入らなくて、からからの土に手をつく。

「ぐ、あつ、うああ、」

だいたい、馬鹿だろ。

馬鹿だろ、あいつ。

なあお前、なんで死んだの。

もう、そうだ、三日も前になるんだ。

車に撥ねられた、らしい。夕方、部活帰りの、見渡しの良い、障害物なんて何もない農道で。相手の車は、居眠り運転をしていたという。ただ、本来なら一颯は別に、轢かれることはなかった。まさに轢かれそうだった小学生の女の子を、庇ったらしい……そう警察の人が母さんに話していたのが、耳から頭へゆっくりと流れ込んできて、やがてぐるぐる渦を巻いた。

庇ったって、そんな。

なんでそんなことしたんだ。

なんでその道を通ったんだ。

なんで部活、その時間に終わったんだ。

なんで俺と同じバスケット部じゃないんだ。

なんで——転がっていた袋に、グレープ味のアイスも入ってるんだ。

あの日から冷凍庫にアイスは補充されないうままだ。

二日間、お前の顔を見なくて。今日見たお前の顔、本当は別人なんじゃないかって思うくらい、白かったよ。触った手は、俺の知っているそれではなくて、ただただ冷たかった。

でも、俺が、最後に見た、お前は、違う。

俺が最後に見たのは、アイスごときで怒って、俺のベークンを奪おうとして、宿題もやらない——そんないつも通りの一颯なんだ。そんなお前が、小学生を庇った、だって？

「はっ、馬鹿だよ、」

馬鹿だ。

馬鹿で単純で、そのくせ優しいから、こんな役回りが回ってくるんだ。

それとも、こうなのかな。

俺があのととき、「分かった。アイスだな、買ってくるよ」って言うてたら。

お前、死ななかったのかな。

「うっ、あっ、あははっ」

涙の中に、狂ったような笑いも込み上げてきた。

双子といえど、俺と一颯は似ていない。

俺はチョココーヒー味よりグレープ味が好きだし、線香花火はすぐに落ちるし、運は悪い方だと思う。

俺は一颯より勉強ができる。

運動は、いつだって一颯の方ができた。小学生の頃は俺も卓球部だったけれど、お前に、一颯に、もう追いつかないと分かって、中学からはバスケットに入った。

虫取りをしたら一颯の方が多く捕まえられる。

廊下にゴミが落ちていたら、お前は拾うだろうが、俺はきつと通り過ぎる。

迷子がいいたら、お前は声をかけるだろうが、俺はきつと目を逸らす。

幼馴染みを、先生と呼び始めたのはお前で、俺はそれに乗っかっているだけだ。

顔だけは似ているが全然似ていない双子だ。服装も髪型も表情も、利き手だって違うから、双子で間違えられるということは、ほとんどなかった。

俺が悩んで迷う間に、お前は無鉄砲に突き進む。いつでも馬鹿でいられるお前が羨ましくて、でも妬むには眩しすぎた。

だから俺は、お前がいなくなつて。

この二日間、うまく眠れないんだ。

馬鹿だ。

馬鹿だろ。

いなくなつてからようやくそれが分かる俺が、大馬鹿だ。

お前、一颯は、こんな俺を見たらどう思うだろうか。

何やってんだよと、笑ってくれるだろう

か。

「……？」

そのとき、視界の端に月ではない明るさが降りてきた。その明るさに誘われて、ほんの少し頭を持ち上げてみた。

「あっ……」

蛍だ。

その明るさは、一匹の蛍だった。広く、薄暗い田んぼに、そいつはただ一匹。けれど、ちかちかと確かに辺りを照らしていた。

無意識に俺は、濡れた目でそのにじんだ光を追っていた。頭の隅で、久々に空を見上げた気がする、なんて思った。

蛍が飛ぶ空は、綺麗だった。

蛍の光が灯る小川は、綺麗だった。

「気づかなかったな……」

ほろり、と口から漏れた言葉は誰かに向けて言ったわけではなかったが、蛍が反応するようににちかちかと瞬いたように思えた。

また、すつと頬に水が伝った。

「薫！」

そのとき、来た道から知った声がした。つられて振り向くと、俺の体が照らされる。眩しさに目を細めながらも、それが懐中電灯の

光だということに気がついた。

その光の持ち主、同じ夏服を来た幼馴染みが息を荒くして駆けてきていた。

「せん、せい」

「薫！ 探したよ」

ゼエハアと膝に手を置く先生は、一拍置いて切羽詰まった顔を俺に向けた。

「いったいこんな遅くまで、どうして……その腕、どうしたの」

「ああ、これはその、転んで」

足元を見ながら、俺はボソボソと答えた。

先生の顔が、見れない。というか、泣いた顔も見せたくない。

「薫」

先生がまた、俺を呼んだ——特別優しくも怒っているわけでも、心配そうなわけでもなく。ただ、いつも通りに呼んでくれた。

自然と、俺は顔を上げた。まっすぐにこちらを見る先生の目とかち合った。

「心配、した」

「……ごめん」

赤くなつた目を、濡れた跡のある頬を、先生はどう思うだろうか。だけど先生はまた、くしゃっと、いつも通りに笑った。

「帰ろう、薫」

先生が俺に手を差し伸べた。

何年も前の古い記憶が、脳裏にふっと呼び戻された。

俺はしばらくその手を眺めた後、ゆっくりと握り返した。走ってきた先生の手は熱くて、少し汗ばんでいた。

「冷たくない……」

「え？」

聞き返した先生に、俺は笑ってただ首を振った。

一匹の光は、いつの間にかどこかに飛んでいってしまった。

「薫、ほたる、きれいだねえ」

「うん。……一颯」

「ん？」

小さなたぐさんの灯りは、無数の蛍だった。目を輝かせながら見上げるあいつに、小さな俺はうつむきがちに、言った。

「ひどいこと言った……ごめん」

返事が、帰って来なかった。俺はいっそう下を見ることに必死になり、拳を握りしめ

た。

「……おれも、ごめん」

ややあつて握った拳にあいつの手が重なった。小さな俺は、顔を上げる。

「帰ろう、薫」

「……うん！」

遠い遠い星空の下、小さな影が二つ並んで歩き出す。その様子をいくつもの灯りが見守っていた。

詩

詩

奨励賞 君の歌

大仙市 鈴木 仁

メガネを取って

背伸びをすると

コオロギと目が合った

君は知らない内に

森の中の隙間だらけの部屋へ

迷い込んでしまったのだろう

賢治さんの「春と修羅」が

生まれて百年というこの秋も

世界は相変わらず

砲弾が飛び交い

欲望のために焚いた炎で

たったひとつの生命の星さえ

燃やし尽くしてしまいそうだ

そんな文明の

プレート断層上に

つぎつぎと台風が襲いかかる

このか細い島国に生きて

僕等は出会った

やがて窓の向こうで

友達が心配そうに歌い始めると

思い出したように

向きを変える君を

僕は書きかけの

スケッチブックに乗せて

扉の外へそっと置いた

そして

ゆっくりと草むらに入って行く

君の背中に

僕は何かを尋ねたかったけれど

もうスバルの光も消えかけて

曙の空はすっかり秋の透明度

賢治さんが背表紙に記された

詩集という文字を

ブルンズの粉で消したように

世界の欲望を消し去って

おだやかな朝の訪れを待つ明日

そのときと

君の歌が

夜明けを告げるだろう

奨励賞 キチジョウソウ

にかほ市 鈴木敏男

静けさをたたむように

ひっそりと繁茂している草

太陽が嫌いではないだろうに

思慮深い草なのか

踏み石の領域まで蔓を伸ばしながらも

木の下で黙々と蔓延っている

子どもの頃は

雑草との知識がなく

容赦なく遊びに行くときは踏んだ草

この草が・・・

縁起の良い花だと知ったのは

あなたに

小さな花の写真を見せたとき

これはとても縁起の良い花であり

キチジョウソウだと教えてくれたのだ

淡紅色の小さな花

庭に植えたのは

家の繁栄とアナタの幸せを
願って父上が植えたのでは？・・・とも

俺は

四人兄弟の長子

助治郎家の八代目

父が満州から帰還して生まれた

その頃に父が植えたのだろう

庭とは名ばかりの坪地に

衛生兵だったと言う父が・・・

だが、その父の思いを知ることもなく

どんどんと蔓延っていくキチジョウソウを

子どもの頃は全く無関心に踏みつけ

時には疎むように俺はむしり取って来た

年はめぐり季を伴って

今年も秋が来れば

キチジョウソウは花を見せるだろう

木の下に楚々として咲くだろう

その時俺はこの花に視線を留め

熱りたって生きて来た

七十六年の土塊に
どのように対峙できるだろうか

キチジョウソウに思いを託した

父は旅立って三十三年

キチジョウソウを教えてくれた

あなたもこの世にはいない

入選 あなた

仙北市 田 口 奈央子

あなたの声が大好きです
優しい声が大好きです

あなたの顔が大好きです

あなたのえくぼが私も欲しいです

あなたの手が大好きです

手相が独特でつい笑っちゃいます

あなたの料理が大好きです

サラダラーメンおいしいです

あなたの匂いが大好きです

花の柔軟剤の香りが大好きです

「いってらっしゃい」の声に励まされた心が
満面の笑みに弾んだ心が
小さくなったあなたの手に驚いた心が
お弁当の匂いで喜んでいた心が

抱きしめた時の匂いにほっとした心が
今はあなたのいない寂しさで破裂しそうです

あなたの声が大好きでした
どんな声だったのか思い出せません

あなたの顔が大好きでした
どんな顔で笑っていたのか思い出せません

あなたの手が大好きでした
もう手比べもできません

あなたの料理が大好きでした
味を一つも思い出せません

あなたの匂いが大好きでした
同じ柔軟剤を使ってもあなたの匂いではありません

戻らない日々
に心を置いて
今日もあなたに手を合わせます

入選 時のブランコ

大きな振り子に身をまかせ
笑顔が見えるだけでいい

秋田市 鈴木 いく子

大きな振り子のブランコに乗って

ゆっくりゆらゆら揺れている

過去と今をいつたりきたり

記憶を合わせて揺れている

大きなブランコに乗って

パズルを眺めている

時間の流れのパズル絵は

忘れたカケラが多いけど

そんなことに悲しまないで

ただ穏やかに過ごしてほしい

時のブランコが今にとまる

昔をぼんやり背景にして

無理に考えすぎないで

焦ったりしなくていい

ただ穏やかに過ごしてほしい

ゆっくりゆらゆら揺れだした

グリーン賞 友よ

仙北市 渡 辺 逞 示

自分の葬式にいるヒトを数えた

一人二人と増えてく人数に私の心は埋まる
予測変換の様な指先だけの答えばっかして
周りにいい顔してるんだ

でもどうだろう

僕は自問自答をするんだ、よくね。

迷いはないか、それでいいのか

間違いはないか、それで幸せなのかって。

私は、そうだね。気づいたんだ

キミだよ、キミさえいればいいんだ

いつでも笑い合える キミさえいればいいんだ

グリーン賞

字数制限なしの恋

大仙市 佐々木 陸 翔

恋の表現って

「甘酸っぱい」とか

「苦い」とか

パツと思いつくのはこのくらい

ここで頭にハテナを示す

なんで恋を味覚で表すのだろう

僕達が口にする

固形、液体では無いはずなのに

まあ単純な

比喩表現であることは明白だ

頭でそういう情報処理はされてるけれど

心の中では情報処理機能が働かない

だって恋って

視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚の

五感を駆使してつくるものですよ

一つの感覚の一つの言葉

それだけで表せる恋なんて

面白みの欠片さえも見つけられない

だから僕は

自分のボキャブラリーを憎むほどの

恋物語を書き上げたい

短 歌

短歌

最優秀賞 デジタル世界

由利本莊市 熊 谷 すが子

とめどなく抽象となるデジタルの世界迫り来否応もなく
やうやくに繋がるラインの時差ながくときめき褪せて齟齬多かりし
騒立ちし氣を指先に変換し屈託のなき絵文字に送る
キャッシュレス決済あやしむためらひに時勢の波に置き去りになる
変はりゆく画面に長く弄されてネット予約の迷路さまよふ
離り住む子らの動画に誘はれリアルタイムの時空に遊ぶ
戦渦なき世を歩み来てデジタルに悩めるけふの平穏たふとし

奨励賞 なにわ梅

秋田市 佐々木 鏡 子

梅漬くる季とはなれどあまりにも瓶は重きと半ば諦む
つぶらなるなにわ梅の実店頭にしほし迷ひてつひに購ふ
袋にてぐらぐら揺らせばたつぷりと液あがりきて梅なじみゆく
わが漬けし梅待ちくれし族らも今は大方この世にあらず
梅雨の雨やうやく上がりてみちのくも猛暑となるや先づは梅干す
松の木に窺ふからず酸ゆき香に寄り付きはせず姿を消しぬ
玻璃鉢にルビーのごとく透く梅の香りがくはし朝餉の卓に

奨励賞 盆帰り

秋田市 東海林 文 子

台風と列車運休をすり抜けて娘の帰省は冒険の色
太さ長さがキュウリを超えた胡瓜たち手の回りきらぬ母の畑に
聞き返しが増えたる母はこのところ懐かしきものに呼ばれる目をして
キャベツは甘く茗荷オクラはほろ苦く花も味わう母の食卓
この夏のミソハギ過ぎて青と白の桔梗を飾るすがしき盆棚
花のときは束の間なりて一面の青き稻穂を風は撫でゆく
信じたい信じられたい人がいて胸なる羅針盤の温しも

奨励賞 亡夫のワイシャツ

男鹿市 玉尾 サツ子

再手術夫の手にぎり泣き合った病室なれば声をこらして
病室で夫と筆談したノート世間話のそれらであれど
あの時に酸素マスクを外したらはつきり聞けたのに夫の声
灯すたび遺影と目が合いごめんねとあの日気づいてやれなかったを
土手の菊黄の群れはめた亡夫ゆえに今年も咲きたるを供えたり
日曜日ごとにアイロンがけてた亡夫のワイシャツ刺繍して着る
亡き夫の夢は吾呼ぶ声ばかり声だけでも分かりはするけど

入選 延齡草

鹿角市 柳 澤 知 子

幼き日我をなだめて幼稚園に連れ行きくれし兄逝き給う
知らせ受け急ぎ向かえるお別れの道中に咲く合歓と槿と
高速の道両側に山百合はとぎれることなく咲きて居りたり
眠るがの兄の横顔父母のどちらにも似て穏やかなりき
山野草好み育む兄にして我が花便りをも喜び給う
時間忘れ春陽の元の庭仕事今年も土に触れるうれしさ
去年の春病む兄の生命希いてし延齡草が今も咲いてる

入選 月のころは

井川町 小林 康 子

夏の夜の月を待ちているばら苑の深紅の八重は清少納言
十六夜の月は一糸もまとわずに御簾のすき間を抜けて入りくる
黒髪にうずもれ睡るおおかたの女御はひとり空洞を抱く
虫すだく官能の闇に入りゆけばはだしの足裏に小石があたる
いにしえの人恋う文字は白き紙のひだりにわずか寄りてくずれる
訪うてくる男を待ちているだけの十二単の色褪めゆかん
にくきものひとつひとつを並ぶれば千年前にも今のわれにも

入選 写経

秋田市 松 井 憲 一

新年の供養の経を書きをれば父母のころ天より聞こゆ
うぐひすの声のみ今日の写経の間余白ゆたかに心やすらぐ
形見なる端溪硯を取り出して写経に励む母の年忌に
かぎりある身とぞ思ひて書く経は序章のごとし黄泉への旅の
天逝の母の遺愛の写経集ときをりめくり亡き母偲ぶ
仏名の一字一字を書き写し父母を憶ひぬ夜長の秋に
つつがなく終へゆく年の喜びを父母に告げつつ写経を納む

入選 語らいの森

秋田市 鈴木 修 一

親の下なる幼鳥のフラミング親のしぐさに羽づくろいせり
トナカイの挨拶ならん柵越しに子へゆつくりと角振りくれし
ベビーカーに吊す模型のオニヤンマめがけヤンマの本物が来る
純白のオオカミ逝きてフォトブックに乙女のごとき姿を遺す
母猿の計を告知せる猿舎にて檻の高みの猿を仰ぎつ
自傷行為現るといふ若キリン悠然と身を揺すりて過る
園の果て象舎の森にひぐらしの声わきたちて風にまぎれず

入選 術後十年

横手市 佐々木 ヨリ子

「八月のこの雨出穂の慈雨となる」かつて教師の口調に夫は
昨日今日の猛暑に稲の花咲くと目を閉じて夫の達観の顔
ちぐはぐな事にも慣れて夫の目の術後十年たいせつな日々
明暗の区別かすかな夫が指す高窓よりの月のあかりを
戦中の農を称へし姑が顕ち二人の夕餉長くなりたり
観察に一途なりし子のオジギサウ眠る頃なり明日子が帰省
終活のコツなどメモし子らは去る二人の米をさらさらと磨ぐ

入選 まぶしい今をふたりで

能代市 工藤 美咲

青色の表紙の歌集を読む 今日を素敵な日にするためのまじない
慣れてないロールアップの足元を風がくすぐる「初夏だ」とわかる
「アロハシャツ似合う」「ズボンが新鮮で良いね」褒めて確かめあって
お互いに呼吸を揃えるようにしてたどる美術展 こう生きれたら
すれ違う学生たちにも気圧されず胸を張れるほど今がまぶしい
キャッチボールするためグラブを買っていたきみが待ってたわたしとの今日
受けとめるきみがいるから投げられる ボールも、わたしの言葉も、まつす
ぐ

グリーン賞 ひと夏の純愛観測

秋田市 善治 幸太

返信は来ても来なくてもいいんだ寧ろ来ないほうが風ぐ心
生真面目で本音と建前一緒くた 行けたら行くでほんとに来る人
あと二分既読の文字がいじらしいアイスコーヒー汗をかいてる
助手席は一日限りの特等席 盗み見る目とかち合う眼差し
どうしようもないたわごと掻き消して掻き立てられてあなた潮騒
改札前「またね」、は、ずるい どうせならとどめを刺してほしかった
のに
満開になったら後は枯れるだけだったらずっと八分咲きでいて

俳
句

俳句

最優秀賞 窓から

横手市 片倉

弓

窓拭きの青年涼しき目をもてり
生家いま蟬の集まる木を育て
花煙草窓を大きく開け放つ
秋桜父は一人になりたがる
笑ひヨガ終はりて見上ぐ天の川
内蔵の灯りぼつねん鉦叩
霧深し窓から波の音を聞く

奨励賞 羽黒山

由利本荘市 佐々木

成

神殿へ千古の磴や青葉闇
杉木立余さず千の蟬鳴けり
温顔の水子地蔵に蟬の殻
振る鈴の音色涼しき巫女の舞
蕉翁の像にまつはる梅雨の蝶
法螺の音の止むや鳴き出すほととぎす
昼暗き修験の谷や朴の花

奨励賞 古稀のほとり

三種町 三浦 静佳

不戦の世さがす点眼合歡は美に
父の呼ぶ方から青田波ざざと
底紅の耳打ちを待つ道祖神
古希晩夏いつも時間を追いかけて
浄財のひびき高らか盂蘭盆会
気がつけば秋の風吹く喉仏
自画像に覚悟描き足す星月夜

奨励賞 玄武

能代市 岸部 吟遊

白神は玄武や無量無辺に雪
水音の光となりて落の臺
縄文の土笛の野や草を摘む
ふるさとは深きふところ青田風
金剛の羽後の大空揚花火
ちちははの手の分厚さや稲穂波
白神嶺のでこぼこ撫づる盆帰省

入選 田植時

湯沢市 瀬川 恵美子

溝浚へ一直線に流れをり
黒々と水のしみ入る代田かな
山風にさざ波立ちし植田かな
植え終へし田に赤々と日の沈む
田植終ふ一夜明ければ水澄みて
ただ浮きてたよりなさそな早苗かな
一面の青田の色の濃くなりぬ

入選 靈山

由利本莊市 佐々木

豊

名瀑の硯の中に靈氣満つ
ケルン積む鼻の欠けたる地藏仏
噴火口挿り鉢斜面のお花畑
大粒の星の重たき登山宿
雲海の果ては浄土か茜さす
崩落の瘠せ尾根続き秋の声
友逝きし雪の靈峰凜と立つ

入選 出羽山河抄

秋田市 丹野剛紀

秋天の櫓の朱き手摺かな
採油機の囲ひの外に秋桜
川上に煙る稲滓火竿しづか
立つ鴨も浮きをる鴨も雄物川
放牛を里へ下ろす日片時雨
大き犬つれゆく人も着膨れて
品評会済み寒鯉となりにけり

入選 ふるさと

大潟村 田村陽子

泥鰌掘る泥の重さの古ばけつ
わかさぎの光を抄ふどつびき漁
ばしゃばしゃと泥打つ鯰たも撓む
ふるさとの掌より這ひ出す小蟹かな
清らなる水のささやき恋蛭
形良き寒鯉を二尾年祝
藁砧記憶の底に父の音

入選 百姓の一年

大仙市 藤井洋舫

服衣脱ぎ即田植機に跨がりぬ
水遊び爺も一緒に叱らるる
改札を出れば母ゐる梅雨の虹
ゆらゆらと硝子器沈む晩夏光
土蔵よりガリ版一式秋の暮
ペン走る新米贈る宛名書き
白息の列直角に登校す

入選 平和

にかほ市 金道博

桜蕊降る校庭のチャイム音
晩春やイベント替へのレンガ館
酒蔵はいつもの眠り風薫る
向日葵の全て向く先平和の灯
小鳥来る公会堂の版画展
立秋の青き海より風の声
母纏ふ玄の角巻子の笑顔

入選 詩の国

湯沢市 高橋雄子

学寮の庭班ごとの雪達磨
神様の乗つていさうな春三日月
不登校の少女の胸に仔猫かな
不恰好な自作の小皿ばつけ味噌
さなぶりの締めは恒例秋田節
カリヨンの響くダム湖や夏来る
蹲の水音軽し今朝の夏

入選 自給自足

横手市 藤 井 ただし

畢竟は自給自足の種おろし
臆に沃土はやさし畑打ち
ゑんどうの手を欲しがつてゐる虚空
挽ぎたての水も弾じける茄子の紺
小鼓の手かげんに診る西瓜かな
大根の曲りに倣い抜きにけり
漬け桶の底をまさぐる春の納屋

グリーン賞 最後の夏

大仙市 吉 田 唯 杏

熱帯夜怪談話で冷え冷えと
暑い日に私を追い越す雲の影
夏影を2人で歩く自転車へだて
心拍数どんどん上がるスターマイン
頬赤くなるのはきつと猛暑のせい
真っ直ぐにみつめる向日葵わたしみたい
夕暮れにUFOみつけたあれはベガ

川

柳

川柳

最優秀賞 あれから

秋田市 藤子 あられ

足止めを喰らった朝の反抗期
叶わない夢ばかり追う臍まがり
風向きを一気に変えたバカヤロウ
あんな日もあったとアルバムの黄ばみ
思い出をゆっくり拾う曲がり角
くり返すさよなら大人への標
青い日を丸呑みにして現在地

奨励賞 刹那を生きる

秋田市 小畑犀川

カマキリが欺く揺れる花となり
滲み出る樹液シエアするチョウとハチ
懸命に刹那を生きたセミの腹
成長をシャクトリムシが見た帰省
叩かずにそっと追いやる九月の蚊
海越えるアサギマダラの華奢な翅
ミノムシが個室で記す回想記

奨励賞 羽化の序章

秋田市 三浦千両

ポケットに夢のつばみとミントガム
詩集からそっと掏った雪月花
本命へ離れてむすぶ片おもい
母さんに初めてのウソうつむいて
むらさきの想い編み込むレース糸
あのひとをK子も好きと知りました
清楚とか無垢とかゆれているヴェール

奨励賞 母

男鹿市 三浦善隆

母の手に子と甲虫遊んだ日
おふくろの魔法にかかる盆料理
おむすびが美味い十指にある年季
文法はどうだっていい母の文
少子化の歎きを母は知らんぷり
ガッコ茶が美味いと母の総入れ歯
長生きをしたいさそたい肩を揉む

入選 バス停

秋田市 菅原浩洋

バス停で忘れん坊の妻を待つ
迷ってもきつと帰って来るんだよ
叱つてもあとで悔やんでいるばかり
夕風の櫓をこぐ舟の波しずか
菜の花の道を桜が散り急ぐ
夕焼けるみんな許して明日は晴れ
ゆるんでも結び目だけはほどけない

入選 老いごとろ

横手市 岸 部 旭 星

好奇心学びの森に湧く泉
師の教え十字架だった星だった
貯筋する老春という旗印
瘡蓋が取れて続編追いたがる
メビウスの帯を紡いだ共白髪
年金が帳尻合わす余命表
七合目虹のあたりで昇華する

入選 めぐり逢い

五城目町 佐 藤 ちずる

花冷えの街で出会っためぐり逢い
裏切りの小指が疼く花の闇
移ろいの月日の中で聞く本音
それぞれの答えが胸にあるさくら
葛藤をくぐって写す水鏡
まだ愛は隠しています春おぼろ
指の傷抱きしめ燃えてくる火種

エ
ッ
セ
イ

エッセイ

最優秀賞 蛍光管にアボ

湯沢市 高橋 文子

えびとアボカドのタルタルの作り方（四人分）

一、むきえび（十五尾くらい）は背わたを取り、ゆでる。

二、卵二個は堅ゆでにして殻をむき、粗みにんに切る。

三、アボカド一個は種と皮を除いて一口大に切り、レモン汁をかけて変色を防ぐ。

四、全てをボウルに入れ、タルタルソースとさっくり混ぜ合わせる。

二十年ほど前に雑誌で見つけたこの料理を、私はとても気に入っている。普段は八十年代の両親との三人暮らしなので、アボカドなどというものが食卓に上ることはないが、娘が帰省する際には、必ずといっていいほど作りたくなる。

二年前の秋、娘が帰省し、一週間滞在した。十年勤めた会社を辞め、転職するという。昇進や勤続表彰などという私の古い考えとは違い、これが現代の人たちのキャリアアップの仕方なのだろうかと思わされた。

娘の帰省となれば、この料理の出番だ。久しぶりに材料を買った。アボカドは小振りだったので二個買った。ゆでて切って混ぜるだけの簡単料理は、今回もうまかった。

翌日、アボカドの種を植えようと娘が出した。直径九センチメートルのピンク色の育苗ポリポットを二個、母が用意してくれた。家の脇の畑の土を詰め、一個ずつ種を入れた。上に被せる土は、芽立ちのためにあまり厚くしないように、との母のアドバイスをしっかり受けて、

「これでいいんじゃない？」と、手に付いた土をパンパンと払いながら、嬉しそうだった。

転職に驚かされた翌年は転勤だった。住み慣れた仙台を離れて、見知らぬ土地に赴くことに決めたという。大胆な決断に、本当に大丈夫だろうか心配したが、娘の勢いは止め

られなかった。引っ越しの手続きを全てこなした娘は、行ってしまう前に再び帰省した。

二日目の朝、

「ところでアボカドは？」との娘の問いに、また驚かされた。前回の帰省からほんの一年足らずの展開にただ翻弄され、私はアボカドのことをすっかり忘れていた。そういえば、冬の寒さで凍らせてはいけなかったからと、母が居間のテレビの横に持ってきたのだった。その後、芽だか根だかが出たようだというから、スマートフォンで写真に撮って娘に送信したものの、どうも不明瞭で、

「本当？ 良く分かんないね」とあっさり返されたきりだった。テレビの横にあったはずのピンクのポリポット二個は、いつの間にかそこからなくなり、世話をしてくれていたはずの母ですら、寄せた記憶も捨てた記憶もないと言う。

「だって、芽だか根だか、出たって言っただけじゃない」と平気で言い放った。あんなにあっさりに関心のない返信をしておいて、娘は今思い出したのか、それとも時々思っていたのか、堂々と口にした。

私たち三人のやり取りを外で聞いていた父

が、

「アボ、あるよ！」と言って娘を呼んだ。母と私は顔を見合わせた。とつくに失せてしまったと思っていた物の復活話に、慌てて外に出た。茶色の鉢に、小さな黄緑色の苗木がひよろりと立っていた。

「これ、アボカドなの？」

「んだ」と自信満々に答えた父は、

「ほれ」と鉢に刺さっている蛍光管を指差した。短い蛍光管に、黒のマジックで「アボ」と書かれていた。父は自慢げにニヤニヤ笑っていた。

「一つは死んで、一つだけ生きだ」と、また笑った。種から芽を出した植物が、健気けなげに生きていたんだと感動していると、

「なんで蛍光管なの！ しかもアボって！」と娘が大笑いしている。

もしかしたら父はアボカドの名前があやふやだったのかもしれない。アボ何とかだから「アボ」だけ書いたのだろう。蛍光管に書いたのは、ただ、たまたまそこに使用済のそれがあったからで、白い管に黒文字はよく目立つ。これは父のユーモアだ。おそらく父は、アボカドが少し芽を出したのを発見し、母と

私の知らぬ間に、家の隣の小屋に運んだ。

枇杷びわを食べれば枇杷びわの種、李すももを食べれば李すももの種、食べた後に残ったそれらの種を、父は何でも植えてみたがる。小屋の入口に数多くある苗木は、何となくどれもふさわしい鉢におもしろおかしく収まっている。父は全部の苗木が何なのかは覚えていないようだが、気にもしていない。ただ、孫の植えたアボ何とかを他と区別するために、ただ一つにだけ名前を書いた。

父のユーモアは私たち家族を癒いし続けている。人生にユーモアは必要だと私は思う。忙しく過ぎる日々の中で、笑える瞬間がたくさんあればいいと思う。父のたくまざるユーモアはどこから生まれるのだろう。ユーモアは、今いる現場から少し心を遠くに飛ばして、そこから取り込むもの、あるいはそこから降ってくるようなものだろうか。父の心の余裕は、父の人生で培ったもので、計り知れない。

アボカドは今、三十五センチメートルほどに伸びた。蛍光管の「アボ」の文字は少し薄

くなった。垂れ下がっている細長い葉は、少し肩の力を抜いているようにも見える。次の娘の帰省まで、どれくらい丈が伸びるだろう。

そしてまた今朝、父の座椅子のそばに置いてあったさくらんぼの種が、無くなっていた。

奨励賞

「母のおはぎ」

秋田市 白井道和

毎年、彼岸になると、我が家のテーブルいっぱい、あんこたっぷりのおはぎが並ぶ。料理が得意な母はお嫁に来た時から五十年近くおはぎを作り続けている。二世帯6人家族の我が家は、どちらかというと小食で、一升炊きの炊飯器も普段は4合から5合炊くことが多い。一年のうち、彼岸の時だけ、我が家の炊飯器は大活躍である。

彼岸に作る我が家のおはぎは、何よりあんこたっぷりが定番である。炊きたての餅米を大きな皿に一個分ずつ取り分けて、湯気が立ち上がるうちに、あんこをのせて「あちち」と言いながら、一個ずつ丁寧に握っていく。母に聞くと、母がお嫁に来た時は9人の大家族で、作るおはぎは、五十を超えていたそうである。

現在は、我が家にある一番大きな皿三つに三十個のおはぎが、彼岸になるとテーブルいっぱいに並ぶのである。その様子を一番喜んでるのが、私の中学生になった下の娘で

ある。家族の中でも一番のおはぎ好きの娘は、彼岸の中日の朝は母にねだって一人だけおはぎを食べる程である。

その日の朝は、朝食をすませると家族みんなでお墓参りに出かける。中学生の娘のように、おはぎを心待ちにしているご先祖さんのために。八十をとうに過ぎた父は、一番に我が家のお墓におはぎをあげると、そそくさといろんなお墓に気前よく母手作りのおはぎをあげていく。父母が若い頃にお世話になった親戚のお墓はもちろん、現在は無縁仏となり、誰もお墓参りに来ない我が家と同じ名前の墓にもあげていた。

ある年の墓参りの後には、思いがけず母に電話があつたそうである。それは遠い親戚のおばさんからであつた。「いつも貴女の作るおはぎを楽しみにしている。」そんな内容の電話だったと母から聞き、少しだけ驚かされた。母のおはぎを家族以外にも楽しみにしている人がいる。そんな親戚のおばさんも年をとったせいか、数年前から墓参りの日に電話がなくなってしまう、少し寂しく思っている。

お墓参りを終えると、家族六人そろってお

はぎを食べるのが我が家の恒例行事である。そんな我が家の恒例行事に危機が訪れた。

ある朝、同居する母の悲鳴が朝の我が家に響いた。私は何事かと二階から階段を駆け下り、母のもとへ駆け寄った。母は「痛い痛い」を繰り返すばかり。何が起きているのかわからぬまま困り果てた。このままではいけないと、救急車でなじみの病院へ搬送することになった。

病院での検査の結果、脊髄の圧迫骨折という診断が出された。母は起き上がることもすままならず、ただただ横になり、じっとするばかりであつた。食べることが大好きな母もしばらくは時折水を口にするばかりであつた。懸命の治療のいかいもあり、母は徐々に起き上がれるようになり、食欲も戻っていった。

当時、私はその病院で、院内の教師として働いていた。子ども達の主な病気は白血病。抗がん剤治療や、家族からの移植を行う厳しい治療を行っている子ども達と学習をともにしていた。午前の指導を終えると、母の様子を見に行き、妻の作る弁当を食べながら、母を見舞っていた。そんな母も徐々に元気にな

り、もう来なくても大丈夫という位、元気になった。母はリハビリを始めて、立ち上がれるようになり、少しずつ歩けるようになった。要介護の判定も4から2までになった。

私が勤める病院での生活も終わりをづけ、ようやく家に戻れることになった。我が家には、口うるさい母の声が響くようになった。子どもの小学校入学とともに、両親と同居していた我が家では、妻が母のいない間に台所に立ち、家庭を支えてくれた。物静かで普段は口数が少なく、忍耐強い妻は、ただただ仕事と家事を頑張ってくれた。母の退院後も、それは変わらず、娘二人の養育とともに頑張っていた。

前と同じように母が台所に立つことは難しかったが、程なくして、また彼岸の時期がやってきた。妻は、若い頃の母と同じように、慣れない手つきで、「あちち」と言いながら、おはぎを一個ずつ丁寧に握っていた。形や大きさは少しずつ違っていて、決してお店で売っているようなおはぎと同じではないが、母に代わり作ってくれる妻、妻に教えてくれた母へ感謝の気持ちが溢れた。

妻のおかげで、その年から我が家の彼岸の

恒例行事は続いている。母はすっかり元気になり杖をつきながら、妻と週一回スーパーで買い物するのを何より楽しみにしている。

八十半ばを過ぎた父はすっかり耳が遠くなつたが、毎朝家族とテレビ体操を行い、天気の良い日は私と二人近所を散歩している。高校生だった上の娘は大学生となり、中学生だった娘は高校生になった。二人の娘たちは今でも妻の作るおはぎが好物である。今年も彼岸には家族そろってお墓参りに行く予定である。ご先祖様も楽しみにしている妻の作るおはぎを持って。

入選 思い出の椅子

大仙市 佐々木 容子

最近、同職した二人が、「がん」のため六五歳と七〇歳で亡くなった。一生のうちに「がん」と診断される確率は、二人に一人と言われている。元気な人が「がん」と診断されたら、びっくりして落ち込むことだろう。という私も、今から二〇年前の一〇月に左肺腫瘍の手術をしている。

私の場合、仕事の忙しさで深刻に悩む時間がなく、幸い発見が早くステージも軽かったので、今に至っている。水泳仲間に左わきを見てもらうと、縦に薄くピンク色の線があるよと教えてくれた。手術後は定期的に検査をして、今は一年に一度CT検査を受けている。

職場で行われる、年に一度の健康診断で、肺の精密検査を求められた。その時点で結核しか考えられず、罹患していることを知らないで、こども達の前に立っていたことを追及されるのではと、そのことばかりを恐れていた。結核といえど、三〇代で同職した保育士

の旦那様が、結核になったと落ち込んでいた。その時に、結核は治療して治る病気だよ、と明るい方を見る言葉をかけたのを思い出す。

精密検査の結果は気になりながらも、運動会の準備で気ぜわしく医師の下へ行かないでいた。運動会が終わった頃に、すぐ来るようにという連絡があった。肺腫瘍なので厚生医療センターで検査を受けるようにと手続きされていた。一週間以上の検査を経て、検査資料を持って秋田大学付属病院へ入院した。

出産のために入院はしたが、病を告げられて入院するのは初めてだった。身体のどこにも痛いところがないので悲壮感はなく、日頃の忙しさから解放されて、三食昼寝付きの身分をいぶかしみながらも受け入れた。いたって食欲があり、見舞いに来た妹に有名店のケーキを頼んだほどだった。

執刀医からの手術説明を、夫とともに受けた。安心させるためだろうか、世界共通のマニュアルに従って、胸腔鏡手術をすると告げられた。特殊マットで身体を挟み、左わきが出るようにした状態で行うようだった。なんの不安もないので安心して手術に向かった。

初めての手術室に興味津々で、しっかりと目を開けていようとした。手術室は天井が高く、眩しすぎるほど明るい部屋だったような気がする。思い出すのはそこまでで、麻酔がきいてきてその後のことは何も覚えていない。麻酔から覚めて、気づいた時には固いベッドに横たわっていた。仰向けの状態のところに吐き気をもよおしたので、最悪な気持ち悪さだった。幸い、妹が付き添って介抱してくれたので、その時間は短くて済んだ。

手術前には食欲があり、毎回の食事は全量完食であったが、味噌汁のにおいが食欲をなくさせ、食事が進まなくなった。しかし、午後からは、左わきから赤や黄色の液体が流れる三本の管をスタンドで引きながら喫茶室へ行き、コーヒートとケーキはおいしく食べることもできた。

手術をして腫瘍を切除したことは、やはり身体には負担となって、身体をシャキッとしようと思っても力が入らないで、以前の元気な身体でないのがもどかしかった。入院している間は、疲れればすぐベッドで休めばいいのだが、家に帰って元の体力に戻るか心配だった。

退院に付き添った夫は見かねて、家に着く

さを思い出させてくれる。

前に家具店に寄って椅子を購入しようと言ってくれた。家にあるのは食事用の椅子だけだった。家具店でさまざまな椅子に腰かけ、身体にあうものを探した。少し大きめだが、枠が木でできていてキャメル色の皮張りの椅子に腰かけたら、座った途端に身体が包み込まれる感じで心地良かった。高価なので躊躇していると、ためらいもなく夫は、その椅子を購入してくれた。

手術前の元気な身体になかなか戻らず、少し動いては椅子に、どっぷりと腰かけて体力がついていくのを待った。力が入らない身体を椅子にゆだねると、柔らかな座面が身体を包み込み、とてもゆっくりした安心した気持ちになって、少しずつ回復する力がついてきた。一か月半で職場復帰をした。

今でもしっかりと形を保っている椅子。気持ちが悪く沈んだ時に腰かけたり、ゆっくりとストレッチを見たりするときに使っている。

夫は、私の手術から半年後に、胆管腫瘍と告げられた。手術するには、難しい場所で、抗がん剤治療もむなしく黄泉へ旅立った。

身体を包み込んでくれる椅子は、夫の優し

グリーン賞 マナーと善意の 三角折り

能代市 福岡 苑実

トイレットペーパーの三角折りが清掃完了の合図だと知ったのは小学校低学年の頃だった。トイレ掃除が終わったらトイレットペーパーを三角に折る。小学校から高校、大学で学生寮に住んでいた時もトイレ掃除の当番が回ってくる度に続けた。最初は不格好な三角だった。次第に綺麗に折れるようになった。トイレ掃除を終えた者だけが行うマナー。そう信じて疑わず、今まで生きてきた。

二〇二三年七月、大学生最後の夏に私はひよんなことから入院していた。慣れない入院生活が始まったばかりの頃、私の不満の一つがトイレットペーパーの三角折りだった。五六七号室、四人一部屋の相部屋にトイレが一つ。トイレの清掃が来るのは週に一度。それなのに私がトイレを利用する時はいつもトイレットペーパーが三角折りされていた。清掃員ではなく同室患者の誰かによる仕事ということだ。私はこの三角折りがたまらなく

不愉快だった。三角折りは清掃完了の合図、このトイレは清潔であるという証だ。利用者が行つては何の意味もない。用を足した後の手で次の人が使う紙を触ったら不衛生だし、過去に「三角折りをしないでください」という張り紙だって見たことがある。れっきとしたマナー違反ではないか。絵に描いたような有難迷惑に当時の私は辟易していた。

それでは一体誰の仕業か、候補は同室の三人。真っ先に思い浮かぶ人はいた。隣のベッドの山田さん。彼女は認知症だった。「なんでアタシは入院しているのかねえ」が口癖で、看護師にいつも同じことを聞き、通話禁止の病室で電話、病院食に一人でケチをつけながら食べ、消灯後も大きい独り言。つまりは私の入院生活における不満の筆頭だった。

他の同室患者の洋子さんと加代子さんにはよくしていただいた。二人は私の親よりも少し年上で、私が入院した初日から気さくに接してくれて仲が良かった。だからこそ山田さんの行動が余計に目に入る。正直、疎ましい存在であった。まさかあの良い人たちがマナー違反はするまい、今回の三角折りも山田さんがボケてやったのだろうと思っていた。

真相は思いのほか早く明らかになった。病室にて三人で雑談をしている時、山田さんは検査か何かで不在だった。真犯人は山田さんではなく洋子さんと加代子さんだった。

「最近トイレットペーパーが三角折りされているでしょ？ あれね、かやちゃんがやっているんだよ。私、感動しちゃって。入院したてで余裕がない時でも温かい気持ちになって勇気づけられたから私もやるようになったの！」

自分なりに上手く三角折りできるように頑張っているのと嬉しそうに語る洋子さんと、私は髪の毛がよく抜けるからそれを片付けるついでにねと照れくさそうにする加代子さん。マスクをしていてよかった。青ざめた顔が見られる心配もない。私は上手く相槌を打っていただろうか。最初は山田さんのことかと思い、苦笑混じりの相槌を打っていた。しかし蓋を開けてみればそれはよくできた感動話で、二人の三角折りは紛れもない善意によるものだった。和やかな雑談の中、自分の狭量さを責められた気がして居心地が悪かった。

真相を知った三日後、私は部屋を移動する

ことになり五六七号室とはお別れになった。移動する直前、洋子さんが声をかけてくれた。

「この前話した三角折りのこと忘れないで、新しい部屋でもやってあげてね。誰かが心温まるかもしれないから。」

どう答えたのかは覚えていない。忘れてしまっただけ心にもない体の良い返事をしたのだと思う。洋子さんは自分が大切に思っているこの出来事を若輩者の私に伝えて、何かを感じて行動に移してほしかったのだろう。

それでも三角折りはやらなかった。いくら善意でも掃除をしていないのに三角折りをするなんて。私が間違っているのか？ 私は善意の輪を広げない薄情者か？ 答えは出ない。

洋子さんは入院したてで余裕がない時に三角折りに勇気づけられたが、私は全く同じ状況で苛立ちを覚えた。善意と受け取った彼女と受け取らなかった私、価値観の違いという一言で片づけたところで心の霧は晴れない。

本来の自分であればマナー違反の三角折りなど気にも留めない。こんな些細なことにも苛立つくらい当時の私には余裕がなかった。

昔から学校を休むことが嫌いだっただ。休む

ことはその分、皆に遅れを取ることを意味する。そして学年が上がるにつれて遅れた分を自力で取り返すのは難しくなる。それが嫌で中学・高校時代は皆勤賞、大学では入学と同時に訪れたコロナ禍にも負けまいと走り続けた。周りに置いて行かれないと走り続けた。走って、走って、走り続けて、転んだ。体が丈夫なことが取り柄だったのに気づけば人生初の入院。大学生最後の夏に就活、卒論、ゼミ、全てを投げ出して入院しているこの状況に私は耐えられなかった。早く退院していつもの生活に戻らないと、皆に追い付かないと、そんなことばかり考えていた。

新しい部屋は静かだった。話しかけられることも独り言を聞くこともない。トイレで三角折りをする患者もいない。五六七号室の面々とはすっかり疎遠になってしまった。洋子さんは知らない間に退院しており、加代子さんは病室から出られないため会えない。山田さんはそもそも私のことを覚えていないだろう。良くも悪くも心が動かず、焦りだけがまわりつく日々。早く退院したかった。

退院が決まったのは入院してから二か月を

過ぎた頃、夏はもう終わっていた。

あれから一年が経った。このうだるような暑さも二年ぶりの再会と思えば少しだけ愛おしい。あの時取った二か月分の遅れは大体取り返せた。人生意外となんとかなりそうだ。

自宅でトイレ掃除をしていると五六七号室にいた頃を思い出す。あの時考えた答えはまだ出ていない。しかし私も相手もきつと間違っていないかった。それだけでよかったのだ。

グリーン賞 馳せては返す

秋田市 跡部 佐知

もう何回目だろう。

人を好きになった回数が、齡二十歳過ぎにして両手に収まらなくなっていた。

後腐れなく好きだと思えた人はおよそ五人くらいだけれど、少し気になったような相手も含めれば十人くらいの人に恋愛的好意を抱いたことがあると思う。

昔、親に言われたことがある。あなたは誰でも好きになれるのねと。

自分の中で譲れない何かはあるにせよ、親の発言にも納得できる箇所はある。

人を好きになるたびに、私はその恋が最後の恋でありますようにいつも思う。そのまま恋が実って、ゆくゆくは結婚したり、将来とともに歩んだりできますようにと願ってしまふ。

相手の一生を自分と共に拘束することを願うのだから、それはある意味で、どんなブランドバッグや腕時計より、うんと高価で替えるのきかない存在をおねだりすること

だ。一夜限りの欲望よりも、ずっと贅沢で意地汚いこともある。

お金で買えないものを願うというのは、ある意味で純情だけれど、どこかおぞましきようなものを孕んでいるような気がする。

そして、告白して振られたり、相手との関係が消滅したりすることで、自分が勝手に灯した一方的な恋愛の火が消えたとき、急に相手の嫌な部分が目について、今までのすぐく大好きだったのに興ざめしてしまい、この人と結ばれなくて良かったとまで思ってしまうのは、自尊心の防衛機制も混じっているのかもしれない。けれど、気持ちが冷めてしまふのは、恋というまやかしのフィルターが取り外された結果があらのままに映されるせいだとも思う。

人は、自分の頭の中で脚色を加えた相手に恋をする。そして、素の相手に惚れ直したり、幻滅したりする。その繰り返しを行ううちに、自分と一緒にいて居心地のいい人を選んでいく。

ときに、運命だと思って引っ張った赤い糸が切れてしまったり、慎重に手繰り寄せた糸の先に何もなかったりする。

そうして、若いうちに色々な恋愛を見て、心を豊かにしていくのだ。目にするのは自分の恋愛だけではない。友達の恋愛や、年下の初々しい恋愛、年上の相手から香るこなれた恋のにおい、夜にはびこる恋愛などを目にしたり耳にしたりする。それが若いうちの色恋だと思う。

人を好きになることは、ちよつぱり利他的になるということだと思う。

人に限らず、何かを大切に思ったり、愛しく思ったり、思いやったりすることは、自分以外の何かに良さを見出した、自己の審美眼の表れを実感すると同時に、一種の献身的な態度の表明ではないだろうか。

頼まれてもいないのに親切にされるのは、相手にとって割りかし負担のかかることではあるし、何かを好きになって行動に移すという時点で利己的な姿勢が見られるものの、相手の喜ぶ顔が見たいがためにひたむきに努力するのは素敵なことであってほしい。

かつて、私にも好きな人がいた。

昨年の秋の終わり頃から温め始めたその気持ちは、お盆の時期に消えていった。

浜辺に波が打ち寄せて、そして帰っていく

ように、始まった恋はあの人を前にして終わった。

特別、告白をしたのではない。

お盆にあの人を見たときから、ドキドキしたり、容姿に見惚れたりすることがなくなってしまったのだ。

私の中では、あの人全てだった。そばで笑顔を見ていたと思ったし、学校を卒業しても仲良くしたいと願っていた。

自分が眠れない夜には、あの人のことを考えてそわそわしていた。今何をしているのか、誰といるのかをふとしたときに意識している自分がいた。

夏の始まりに、私は新しいバイトを始めた。そこには以前のバイト先と違って同年代の気の合う人がいた。進級して、友達とはもっと仲良くなった。新しく着任した先生は、私の話を親身に聴いてくださった。

全く以って、あの人全てではなかった。それどころか、あの中はのりくらしと私の好意を避けつつ、都合の良いときだけ私の好意に甘えたりしているように見えた。

あの人がかろうじて私と話してくれるの

は、同じコミュニティに所属しているからであって、私そのものに魅力があるからではなかった。

私は、あの人と仲が良いと思っていた。

でも、あの人にとっては、同じコミュニティだから仕方なく接しているに過ぎなかった。

それに気づいたから、何ヶ月も温めた気持ちが冷え切ってしまったのだろう。

あの人と私は打算的な糸で繋がっていた。

相手の笑顔が見たいと思っても、私でいることそれ自体が受け入れられない要因になるということを知った。

同時に、私が私でいるだけで、尊いと思ってくれる人のそばにいられたらと思った。

気持ちが生ものだとするならば、恋愛感情にも匂や食べごろがある。

あの人に抱いた私の恋は、とつくに傷み切ってしまった。もう何に魅力を感じて、どこが好きだったのかさえ思い出せない。

最優秀賞受賞のことば

自責と自戒

小説・評論部門 坂本愛子

この五月、人口戦略会議が発表した「消滅可能都市」に愕然とした人は少なくなかったと思います。県都秋田市を除く二四市町村が西暦二〇五〇年には消滅の恐れ、というのです。とはいえ、市町村がすっかりなくなるといふよりは、人家は中心市街地に集約され、辺縁部にはそこにとどまらざるを得ない第一次産業の担い手が取り残されるというイメージでしょうか。そういう農林漁業者の暮らしを守るには、今こそ社会の知恵と新しい技術を集集しなければならぬと思います。

高校卒業後の息子たちを、積極的に都会に送り出したのは私です。この地の豊かさ、住みやすさを伝えてこなかったのも私です。その自責と、未来を諦めてはならないという自戒を込めて、四半世紀後の秋田をたくましく生きる人々の物語を書きました。

楽しく継続

短歌部門 熊谷すが子

毎月十首の歌を詠む歌会と、月に二冊の本を読む読書会が私の日常に彩りを添えてくれています。私にとって歌を詠むことも本を読むことも、楽しいからという一語に尽きません。同時に、ひたすらな継続も力になったかと。この二つの会が私の礎となって、思いがけない受賞に繋がったのだと感激に浸っています。

今回は、日々進化するデジタル世界に右往左往する近頃の心境を詠みました。今までの私の中にあった歌の世界とは異次元の歌への挑戦でしたが、評価していただき自信になりました。これからも新しい切り口で歌の世界を広げ、歌作りを楽しんでいけたらと願っています。

今の私があるのは、これまで長くご指導いただいた山中律雄先生のお陰と深く感謝申し上げます。また推薦して下さいました選者の先生方に心から御礼申し上げます。

栗の木

俳句部門 片倉 弓

我が家には樹齢百年以上の栗の木がある。今では中に虚があり、樹皮もはがれ枯れる寸前である。数年前には実もつかず、伐採しかけてはと考えていた。ところが今秋、どう言う訳か、残っている枝に以前と同じような大きな栗の実をつけたのである。

この栗の木は家族の思い出、家族の変遷を見守り続けてくれた木で、耳をすませば、まだ生きていると叫んでいるように思えた。

自分の周りすべての物に心がある。その心持ちを知りたい、対話したいと考えるのが、私の俳句の原点であるかも知れない。

俳句に支えられて生きて来た思いもあり、二十数年前に創立した吟社の仲間達とこれからも楽しく年齢を重ねていこうと思う。

拙い句に光を与えて下さった選者の皆様に感謝致します。

川柳ばんざい

川柳部門 藤 子 あられ

川柳を続けていて良かった。本当にありがたいことと、つくづく思いました。夕方のバイク音に「何の請求書が来たのかしら」と思いつつポストに手を延ばした。封を開けてびっくり仰天。「最優秀賞、おめでとうございます。」「の文言に二度目のびっくり、飛び上がった。十一月は私の誕生日。一足早くプレゼントを頂いたような気分でした。川柳と出合って十六年。辛い時期もありましたが、諦めずに続けてこられたのは声を掛けて下さった恩師や先輩、旧友のお陰と感謝しております。

そしてこの度の選者の諸先生方、私の作品に目を止めて下さり心より御礼申し上げます。ありがとうございます。

ささやかな喜び

エッセイ部門 高 橋 文 子

小屋の前に並んだ数多くの苗木を眺める度に、種を植えた時の父の顔を想像してみる。なぜか自然に優しい笑顔になれる気がする。半信半疑で植えた種から、芽が出たのを発見した時の喜びは、ささやかだけれど格別だろうと思う。身の回りで起こるささやかな喜びの場面を、これからも書き続けていきたいと思う。

アボカドは今年の夏の暑さにも負けず、元気に成長し続けている。

この度の受賞に際し、選をいただきました先生方に深く感謝申し上げます。そして、次々と飽かすことなく話題を提供してくれている私の家族にも、また、私を支えてくれて多くのの方々にも感謝しています。ありがとうございました。

選 評

小説・評論

ディテールを重ねて大きな物語を描く

石 倉 葵

「あきたの文芸」はいわゆる短編にあたります。読むのは大変ではない文字数なのに、書いてみるとペース配分や作中での整合性、なにより表現したい主題をこの長さのなかに織り込むのは、プロでも簡単ではないことです。そのなかで最優秀賞となった「二〇五〇年 東北州 由利支庁」は今から25年先の未来の秋田の田園風景を描くという設定のおもしろさに加えて、農業という仕事や暮らしのディテールが生き生きと感じられて、どんどん読みたくなる作品で、迷わず最優秀賞に推しました。

連続テレビ小説「虎に翼」がヒットした

2024年。ドラマの主人公・寅子が遭遇するさまざまな壁や矛盾がおよそ五十〜百年後の現代を生きる私たちにとってもいまだに眼前にあるという点に深く共感させられるドラマでしたが、「二〇五〇年 東北州 由利支庁」で描かれる未来の話のなかに、「今も未来も変わらぬ秋田らしさ」がところどころに差し挟まれているところに、生活のリアリティが感じられました。個人的にも「あきたの文芸」は秋田に限らずどこかしらローカリティを感じさせる作品が選ばれるべきだと考えており、その点でも本作を高く評価しました。

回想や郷愁でもなく、単純なお国自慢でもない地平で、文学として秋田をどう描くか。今回の最優秀賞の作品は、今後の「あきたの文芸」のひとつの道標となるような作品だと感じています。本作ではドローンを使いこなし、超スマートシティ化した未来の秋田にもしっかりと残っていく、今と変わらない秋田らしい風物詩がたびたび登場します。それも一つひとつは些細なものです。方言でやりとりする会話の端々、洗濯物を干す何気ないシーン、ばたもちの相談をするシーンなど

「あ、25年経ってもそこは変わらないんだ」と微笑ましく思えるようなシーンが重なっていきます。現代の環境問題や地方行政など対するシニカルな視点が光る作品ですが、それを淡々と描く筆致も優れており、今後この書き手の作品を読み続けたいと思えるものでした。今後「あきたの文芸」に応募する方々にはぜひ一読の上参考にしてほしい作品です。

奨励賞となった「パパ活」は、作品としてきちんと成立している点が評価された作品でした。読み手としては、不穏な出だしで描かれた「パパ」との関係が、そのままの緊張感を保つてもっと意外性のある展開に結びつくことを期待したのですが、それが不発に終わった印象は残念に感じました。「パパ」という人物像をもう少しきっちりつき詰めて書いてみると、読者が納得して読み通せる作品に仕上がったのではないかと思います。なお、タイトルは作品の魅力を伝えるのに重要な役割を果たしますので、しっかりと練ってみるとより読者を引きつけるものになるでしょう。

文章的な間違いや技巧の稚拙さが目に付く

選を終えて

羽田 朝子



のは例年のことですが、この二年間で気づいたのが、作品としての論理性の欠如が散見される点です。登場人物を作者の都合のいいように動かすがあまり、キャラクターとしての一貫性を感じられない作品も少なからずありました。登場人物をきちんと描ければ、物語は読み手の頭のなかでどんどん展開するものです。二〇、〇〇〇字以内という制限の中だけ登場する都合のいい人物としてではなく、作品を書き終えたあとでも書き手や読者の頭のなかに生き続ける人物を、ぜひ描ききってほしいと感じました。また初歩的なことですがSFやファンタジーなどのジャンル小説は特に、ストーリーの上での論理のつじつまが合わない、その形式を取った意味も薄れてしまします。ぜひとも作品の論理性には留意されたいところです。

最後に、審査をとおして受賞作のような作品に出会えたことと、惜しくも選から漏れた作品からも自分にしか書けないものを書くという意欲を感じられたことをうれしく思っています。

今年度は小説九篇、評論一篇の応募があり、とくに小説に優れた作品が多かった。そのため選考にあたり、私が自分なりに設定した審査の基準も、例年よりも厳しいものになった。それは以下の三点である。

一つは登場人物の造形や背景の設定が確固としており、情景や心理の描写が巧みであるか。二つ目は、物語の展開や構成に工夫が施され、十分に練られているか。三つ目は独自の世界観が表現されており、読者を惹きつける魅力があるか、である。

最優秀賞の「二〇五〇年 東北州 由利支庁」は、これらの基準をすべて満たした大変優れた作品である。首都圏や太平洋側に壊滅的な打撃を与えた「災厄」の後の世界を背景とし、秋田の地方都市に住む農家の主婦が語り手に設定されている。評価したいのは、作中におけるサイエンス・ファンタジーとリアリティのバランスが絶妙であることだ。科学

技術や通信手段が進歩した近未来が舞台となっているものの、現在にも通じる日常生活や人間関係がリアルに描かれており、何ら違和感を抱かせることがない。物語が進むにつれ、作品世界では国家体制が大きく転換し、地方と首都圏の関係性も逆転していることが明らかに becoming いく構成も秀逸である。視点が平凡な一庶民の女性に置かれ、淡々と日常生活や心情の機微を描きつつ、国家的規模の「災厄」にまつわる内省や鎮魂が語られるという点も面白い。

全体の作風としてカズオ・イシグロの『わたしを離さないで』を想起させるが、秋田らしい風景や人情が織り込まれており、独自の世界観を構築している。まさしく「あきたの文芸」にふさわしい作品である。

奨励賞の「チチ活」は、大学生のヒロイン玲奈と中年男性聡との不可解な関係性の謎が解明されていく過程を、ヒロインの繊細な心情とともにスリリングに描き出している。とくにヒロインの人物形象が魅力的であり、友人たちとの大学生活も生き生きとリアルに描かれていた。展開のテンポもよく、最後まで読者を惹きつける力を持っていた。

残念だったのは、物語の重要な人物である聡の形象に深みがなく、どこか物足りない印象だったことだ。聡が亡くした娘をヒロインに投影していたという結末もありふれている。それにしてもこの二人は主従のような奇異な関係性を形作っており、これが読者の興味を惹く大きな要素となっていただけに、より入念な設定や描写が必要だったと思う。

受賞には到らなかったものの、「歓喜の春がやって来た」も印象深い作品であった。秋田のある歌舞団の一員を主人公に、その子ども誕生とベトナム戦争の終結という二つの歓喜を交錯させて描く。自らの経験をもとにしているのか、当時を知る者ならではの視点が新鮮であった。応募作品には他にも自己の経験を素材にしたものが含まれていたが、この作品はなかでもテーマがよく絞られ、文学にまで昇華することができていた。

グリーン賞の「螢の送り火」は、双子の弟を事故で失った主人公の喪失感を繊細に描写していた。冒頭の描写が際立っており、線香の香りや母親が身につけている黒のワンピース、その目の下に浮かんだ隈により、テーマの死を暗示していた。全体として情景と心理

の描写が巧みでバランスがよく、構成にも工夫が見られ、現実と記憶が交錯する形をとっていた。ただし場面の切り替わりが曖昧で読者を混乱させたり、展開がやや単調で盛り上がりに欠けていたのが残念だった。

グリーン賞の対象となった他の作品では、独自の想像に依拠したファンタジー作品が複数あり、若い作者の意欲的な取組みに感心させられた。受賞作はありふれた日常を描きながらも、文学的な完成度が比較的高かったことを評価した。今後の活動に期待したい。



十作品を読ませ ていただいて

尾崎 加奈

応募された作品は、いずれも主題と構成に創意工夫が見られ、個性が光る興味深いものでした。まず、小説の選考にあたり、私は次の三点を基準としました。第一に、作品の主題に独自性があること。第二に、作者の趣意（読者へのメッセージ）が明確であること。

第三に、物語の展開（数々のエピソード）が

途中で散逸することなく一貫して主題を描くために構成されていること。つぎに評論については、次の二点を選考基準としました。一つ目として、対象作品の分析が論拠をもとになされていること。二つ目は、主張が論理的に示されていること。これらの基準をもとに選考し、他の選者と協議の末、本年度の受賞作品が決定しました。以下、受賞作品を紹介し、その他の応募作品にも触れます。

・最優秀賞「二〇五〇年 東北州 由利支庁」

まず、テーマ設定における独自性が群を抜いていました。作品の舞台は三十年後の近未来ですが、主題として据えられているのは現代の秋田県が抱える社会問題と政策です。作者は、柔らかな語り口とは裏腹に、現在の県政が行きつく先を提示し、私たちの底流にある根強い男尊女卑の意識を痛烈に批判します。また構成については、多岐にわたるエピソードが挿入されているものの、その一つ一つが主題をより深く描き出し、一つの物語を織りなしました。三十年後、機器の発達が生活や社会の人手不足を補完するように見えて、その極度に合理化された世界で人々の心

は、果たして今ほどに満たされるのか。このままではいけない、今こそ本気で考え行動すべきではないか、そんな作者の切実な思いが伝わってきます。秋田県民のみならず、全国の人々にぜひ読んでいただきたい作品です。

・奨励賞「チチ活」

構成が巧妙で、テンポの良い展開が読者を惹きつけます。主人公の女子大生と男性との謎めいた関係が徐々に解き明かされる課程は、まさにミステリーのような面白さをもたしました。青春のさわやかさ、悩み、友情、家族といった周縁の要素が見事に絡み合い、主人公については重層的な人物造形がなされています。作品にちりばめられた個々の魅力的なテーマを統合させた題名であれば、読者の読後感により一層寄り添う作品になると思います。

・グリーン賞「螢の送り火」

文章から情景が浮かび上がるような丁寧な描写が印象的です。肉親の死に対する当事者のストレートな心情が、シンプルな構成と相まって、効果的に表現されました。母や友人とのエピソードを膨らますことで、主人公の弟に対する思いをより多面的に描くことがで

きそうです。

・その他の応募作品

小説作品は、戦争体験や史実から題材をとったものと、現代を舞台にした作品、そしてサイエンスフィクションとして創作されたものがありました。歴史や戦争に材をとった作品には、当時の人々の思いや心情が真に迫って描かれており、こうした作品は、当時を生き抜いた人にしか書けない大変貴重な内容です。現代を描いた作品では、登場人物たちの個性が会話でよく表現されており、作品全体の雰囲気にも反映しています。サイエンスフィクションの作品は、現実世界で普段は認識されない事象を扱う果敢な試みで、その中に現実味のある登場人物を据えることで、現実と非現実との間に読者を誘う工夫が見られました。

評論作品は、一篇の俳句を対象とし、そこに描写された事物の背景を歴史的に遡って調査、考察したものです。様々な資料を丁寧に紐解き、同時代作家との比較を行うなど、工夫の見える力作でした。

全ての応募作品からは、一つの主題を作品として描こうとする作者の熱意が伝わってき

ます。さらに工夫するとすれば、たとえば語り手の人称の一致、主軸となる筋や論理の一貫性、個々のエピソードと主題との繋がり、比較対象の必然性など、形式的な面でのさらなる創意がそれぞれの作品の魅力をより一層高めることと思います。

詩

自戒をこめて



寺田 和子

二〇一七年第五十回を迎えた「あきたの文芸」は応募者数五十二名、うち十〜二十代は十九名であった。その後二〇二〇年からのコロナ禍蔓延中はじりじりと減少。五類に移行した今年は二十五名、十〜二十代は八名であった。

秋田県は人口減少が急速に進んでおり、世界各地での紛争や異常気象による災害の多

発、地震、猛暑等の影響下、物価高、経済的格差の拡大などで日々の生活も危い昨今である。このような状況の中で、詩を書いて応募してくださった方々に敬意をこめて心からの感謝を申し上げたい。

選考結果は次の通りである。

◇最優秀賞 該当作品なし

◇奨励賞1 「君の歌」

たまたま迷い込んだコオロギとの出会いから世界の現況や災害に翻弄される日本の状況をも取り込んで、第七、八連に祈りをこめて希望を託す。易しい言葉で深い思いを表現している。

◇奨励賞2 「キチジョウソウ」

自負心の強い「俺」と「衛生兵だったと言う父」との関係がテーマであろう。第八連からは、父に対抗するように生きて来た「俺」の、キチジョウソウに託した父の思いを示唆されて変化した気持ちをどう扱うべきかと戸惑うようすががわかる。終連にはそうした思いをもちや伝える術がないことへの深い悲しみがこもる。

◇入選1 「あなた」

前半で大好きな「あなた」を「心」がどの

ように受けとめていたか、その「あなた」を喪った今の気持ちも含めて第六連で述べる。

後半では、前半で感じていた「あなた」を「思い出せない」と繰り返して、終連で「戻らない日々を心に置いて／今日もあなたに手を合わせます」と結ぶ。よく練られた構成である。「手を合わせる日々」を重ねて、やがて心に安寧が訪れますように。

◇入選2 「時のブランコ」

長生きするなら最期の日まで頭脳も含めて健康でありたいものだが、なかなか思い通りにはいかない。第二、三連の終行「ただ穏やかに過ごしてほしい」、第四連の終行「笑顔が見えるだけでいい」に温かさを感じる。

◇グリーン賞1 「友よ」

ふだん遣いの言葉で素直に表現している。第三連、それまで一人称「僕」だったのが四行目で「私」になっているが、意図的にそうしたのであるか。

◇グリーン賞2 「字数制限なしの恋」

題がおもしろい。第四連「だって恋って／五感を駆使してつくるものでしょ」に驚いたが、終連になるほど、と。

他に印象に残った作品について述べたい。

・「田植」——今昔の違いなどについてもう少し掘りさげて構成から練り直してみてもうどうだろう。

・「千七百七十三歩」——私を忘れないで！」

「回顧」——書きたいことがたくさんあるのはよいが、あれもこれもと書き過ぎると詩情が損われる。最も伝えたいこと・思いに的をしぼってまとめてみよう。

・「ジレンマ」——作者はこれから伸びてゆくだろう。他の人の書いた詩をたくさん読んで、たくさん書いてほしい。

最後に用語・表記・表現等で気をつけてほしいことを。口語と文語（それも誤った表記で）を混ぜた表現が見られたのは残念だった。また、誤字・脱字は言葉の意味が正しく伝わらなくなるので辞典で確かめて書いてほしい。「これでいいのだ」は「ひとりよがり」になりやすい。自戒の言葉でもある。

詩誌「歷程」「密造者」各同人

秋田県現代詩人協会会員、秋田市在住



「これはなんだ」

保坂英世

『海は鏡だ／その日、わたしはわたしの、溺れている体を見る／わたしの指の隙間／海があふれ出て、／わたしはそこに吸い込まれながら、／やっと／言う／これはなんだ』最果タヒの「0」という詩の一節である。詩もこのように私たちの目の前に現れてくれたらどんなにいいことだろう。

「これはなんだ」に出会える期待に胸を膨らませながら、二十五篇の作品を読ませていただいた。昨年より三篇の減だが、今回も十歳代の作品の比率が高かった。これはうれしい。美味しい料理をいただくときは、食レポのようなコメントやあれこれと解説など不要、感動しながら食べるだけでいい。詩だって同じであろう。「ああ、いい詩だった」と。「変な解説は野暮」と言いながらも役目柄少し書かせていただくこととする。

選考の際は、その作品の良い所を見つけることから始めることとした。そうしないと欠

点に引きずられて、つい良い所まで見逃してしまうことが多い。選考委員の間に評価の大きな違いがなく、少しほっとした気持ちもあった。協議の結果、今回最優秀賞は該当なしとなった。「これはなんだ」がいかに難しいことかを証明している。

奨励賞の『君の歌』は、私の一番評価の高い作品で、選考委員三人の点数合計でも一番高かった。「詩集という文字を／ブロンズの粉で消したように」とか、ポエジーが感じとれる作品になっている。そこが一番の強みであろう。詩になるべき必然性でも言っていないのだろうか。同じく奨励賞の『キチジョウソウ』は淡麗な作品。吉祥草はスズラン亜科の常緑多年草。花が咲くと縁起がいいとされ、「吉事」「祝福」「よろこび」などの花言葉があるようだ。地下茎が長く伸びて育て方も簡単だという。展開もそれに沿った物語になっていて手堅い。

入選の『あなた』は素直に書かれている詩。そこが一番の強みではなからうか。前半は現在のところかと読んでいくと、中盤で「あなたのいない」ことを知らされる。後半は前半と同じ項目を別の視点でなぞっていくとい

う形態。ちょっと形が決まりすぎではないかと思うものの、素直さがそれをあまり感じさせない。書き方は若い人のようで、内容は年齢の幅もあるように感じたが、後でグリーン賞対象者と知って驚いた。同じく入選の『時のブランコ』は、正直言ってもう少し書き込みがほしいと思った。材料はいいのだから、小さくまとめないで、少し飛躍してもいいからポエジーを感じさせるような工夫が必要でなからうか。

グリーン賞の『友よ』。「自分」「僕」「私」は意図して使い分けたのか。まだ粗削りなところが目立つが、そこは魅力の一つでもあるだろう。どんどん書き進めて自分のスタイルを作ってほしい。同じくグリーン賞の『字数制限なしの恋』は恋の表現から始まる。題名と少しイメージが異なるのが気になった。

この他の作品で目にとまったのは、『田植』、『漁師の心の風景』、『地球』、『千七百七十三歩』『あなたには一等星』など。例えば『田植』は入選作品より獲得点数は高かった。しかしなぜ選ばれなかったのか。一つには上手いけれど手慣れ感があるからだろう。早乙女の部分も安易にそこに置い

たように感じられた。どこかで見たようなものは必要ない。他の作品全般にも言えることだが、誰もが経験することを、普通に書いたらつまらなくなる。普通のことだと思っているのを驚かせるのが詩でなからうか。

これからも楽しく詩を作りつづけよう。来年また会えることを楽しみに。

＊秋田県現代詩人協会会員、詩誌「日本海詩人」同人



選を終えて

前田 勉

今年度も多くの素晴らしい作品と出会うことが出来、詩表現の多様性と可能性を感じた。応募総数は二十五編。年代別では十代が最多の七名であった。

選考の結果、奨励賞二編、入選二編、グリーン賞二編となった。

・奨励賞 「君の歌」

各委員とも高ポイントであった作品。部屋

へ迷い込んできたコオロギを、砲弾が飛び交う「生命の星」（地球）の中の更に台風が襲いかかる「島国」で「僕等は出会った」、と語りかけるように展開して行く。おとぎ話風に見えるが、実は寓話そのもの。「尋ねなかった」「何か」とは果たして何であったのだろうか。含みのある詩だ。

・奨励賞 「キチジョウソウ」

表題植物の漢字表記は「吉祥草」か。この植物を導入モチーフとして、静かに表出される感情表現に安定感がある。「七十六年の土塊に／どのように対峙できるだろうか」と自問する姿はキチジョウソウ、つまりは亡き父への想いであり自身の在り方に重なる。

・入選 「あなた」

「あなた」の特徴や思い出を自身との接点として2行ずつ位置付けていく。6連ではその2行構成を変えながらも、やはり並列で「寂しさに破裂しそうです」と表わす。表現と構成に力量感。今後のいろいろなテーマ展開を含め、詩作継続に期待したい。

・入選 「時のブランコ」

生き方を「大きな振り子」のブランコと喻え、その往と復を過去と現在、あるいは現実

と望みに振り分けながら見守っている。見守られているのは自身でもあろう。終連の最後「笑顔が見えるだけでいい」に、作者の心情が凝縮されている。

・グリーン賞 「友よ」

「自分」「僕」「私」「キミ」と立ち位置と人称を変え、短い詩ながら演劇の一場面のように展開する特徴ある詩。多様で変化に満ちた自身の表出なのかも知れない。三連目はもう少し一連との関連付けをしながら、自然体で表現してみてもどうだろう。

・グリーン賞 「字数制限なしの恋」

恋の表現の普遍性に疑問を投げかけて、達観したように「まあ単純な／比喩表現であることは明白だ」と言い切る。が、心の中では情報処理がうまくいかない。理屈っぽいところがまた魅力か。「自分のボキャブラリーを増むほどの／恋物語を書き上げ」てほしい。

入賞作品以外で注目したのは、「暑い夏」「田植」「地球」「千七百七十三歩」「懐古」「ジレンマ」など。選考対象として最後まで残った作品であった。

選を終えて感じたのは、表現におけるロジ

カルな部分での違和感であった。例えば事象並列によって長くなったセンテンス、情景描写の多さ、文語体の組み入れ、文脈の乱れ、主観的過ぎる表現など。書き手であると同時に読み手でもあるということを意識したい。

また、気になるのが「い抜き」言葉（例Ⅱ増えて「い」く等）と、「ら抜き」言葉（例Ⅱ見「ら」れる等）。年代による使用頻度や言葉の時代変化という面から一概には言えないのかもしれないが、会話はともかく、書き言葉としては避けたい。効果として用いるにしても最小限にとどめたいもの。

詩誌「密造者」、「海市」各同人。県現代詩人協会、日本現代詩人会、日本詩人クラブ各会員。秋田市。

短歌



「小感」

山中 律雄

「デジタル世界」

デジタル化が進む社会に取り残される不安を表現しているが、あまり深刻ぶらずに歌っているのがいい。生き生きとした作品で華やきもある。

とめどなく抽象となるデジタルの世界迫り来否応もなく

変はりゆく画面に長く弄されてネット予約の迷路さまよふ

戦禍なき世を歩み来てデジタルに悩めるけふの平穏たふとし

一首目、デジタル時代の到来が描かれている。注目すべきは「とめどなく抽象となる」の表現だ。単純に言い得ている。二首目、病院の予約さえ今はネットだ。予約の最後まで行きつかない経験は、高齢者にはよく

あることで、「迷路さまよふ」に思いが籠る。三首目、デジタルというの些末的な悩みに「平穏」の尊さを実感しているのだろう。作者の持つ良き資質の現れた一連である。

「なにわ梅」

破綻のない作品で評価できるものが多かった。日常の一齣を捉え、和みがあり、その和みがしみじみとしているのがいい。

袋にてぐらぐら揺らせばたつぷりと液あがりきて梅なじみゆく

わが漬けし梅待ちくれし族らも今は大方この世にあらず

梅雨の雨やうやく上がりてみちのくも猛暑となるや先づは梅干す

一首目、梅干を作る過程での歌。「ぐらぐら」「たつぷり」は俗調になりやすい表現だが、ここではよく納まっている。梅干であることを考えると「液」は、「汁」がいい。二首目、梅干が亡き人と繋がるよすがであることが伝わる。三首目「なるや」は気になるが、思いのある歌だ。一連、力まずに歌いながら、情景が浮かび上がってくる。

「盆帰り」

題名の「盆帰り」が気になった。帰省の歌

は一首しかなく、「帰り」にどれほどの意味があったのか考えてもらいたい。

太さ長さがキュウリを超えた胡瓜たち手の回りきらぬ母の畑に

聞き返しが増えたる母はこのところ懐かしきものに呼ばれる目をして

キャベツは甘く茗荷オクラはほろ苦く花も味わう母の食卓

言葉に弾みがあつて、ふつくらとした作品群だ。日常を肯定し、充足感が感じられるのがいい。一首目、上句の表現に特徴を見るが、下句の語順は考えたい。「母の手回らぬ畑に育つ」くらいは言えるだろう。二首目、下句がいい。「聞き返しが増えたる」の具体が下句を支えている。三首目、つましい母の姿を歌って、親子の情愛を感じる歌だ。全体、無理に作っている感じがなく素直で鋭敏だ。

「亡夫のワイシャツ」

再手術夫の手にぎり泣き合つた病室なれば声をころして

あの時に酸素マスクを外したらはつきり聞けたのに夫の声

日曜日ごとにアイロンがけてた亡夫^{まづ}の

ワイシャツ刺繍して着る

亡き夫を歌って悲しみの伝わる作品だ。三首目、「亡夫」と表記して「つま」と読ませるのは、言葉に対する甘えとしか言いようがない。「亡夫のシャツを刺繍して着る」で充分に伝わる。「アイロンがけ」とあるので、言わずもがなだ。一首目、「声をころして」に言い知れぬ悲しさがある。ありきたりの表現だが、それをそう押さえることが大事なのだ。次の歌、悔恨の思いのあふれる歌で細ごまと言わずに伝わってくるものがある。

他には「草原詩歌」「まぶしい今をふたりで」「夫婦未満」「橋」に注目した。

グリーン賞の「ひと夏の純愛観測」。こちらの揺らぎを感じるが、やや独善的である。作品には読者がいることを忘れては駄目だ。

あと二分既読の文字がいじらしいアイス
コーヒー汗をかいてる

山中律雄

短歌結社「運河」代表。秋田県歌人懇話会会長。

日本文藝家協会、現代歌人協会会員。
歌集『刻ゆるやかに』（秋田県芸術選奨）。

『淡黄』（第50回日本歌人クラブ賞、第25回島木赤彦文学賞）。歌書『川島喜代詩の添削』（第10回日本短歌雑誌連盟雑誌評論賞）。他に秋田県芸術文化章など。にかほ市。



選考を終えて

古澤 りつ子

あきたの文芸の選者を担当して二期目となりました。近年の短歌ブームもありますが、源氏物語をテーマとした大河ドラマで、貴族が和歌を詠み交わす場面がたびたび登場し、雅な世界に憧れる方も多かったのではないのでしょうか。

そして、今年の応募状況を見ますと、新旧割合で今回初めて応募した方の作品が二十一件と、他の部門を少しばかり上回っています。短歌に限らず、文学を愛好する人口の高齢化が問題とされています。一時的なブームに終わらず、若い方や初めて短歌を作る方が増えていくことを願っています。以下、私が

注目した作品について述べたいと思います。

「デジタル世界」

やうやくに繋がるラインの時差ながくときめき褪せて齟齬多かりし

騒立ちし気を指先に変換し屈託のなき絵文字に送る

戦禍なき世を歩み来てデジタルに悩めるけふの平穏たふとし

今の情報社会の世相をよく表しています。

わたしたちは今、インターネットや、モバイル通信などと切りはなせない社会で生きています。人との連絡手段や交流は、アナログな手紙からメールやラインなどのデジタルな世界に変わりつつあります。わたしたちの生活はこれからどのような未来に向かっているのか、便利さもありますが、不安もあります。アナログな世界からデジタルな世界へ移行する戸惑いに共感しました。

「なにわ梅」

梅漬くる季とはなれどあまりにも瓶は重きと半ば諦む

わが漬けし梅待ちくれし族らも今は大方この世にあらず

玻璃鉢にルビーのごとく透く梅の香りかぐ

はし朝餉の卓に

今年は諦めようと思っていた梅漬けを、気を取り直し、手間をかけながら仕上げていく。その様子が一連の歌に収まっています。

さりげない日常生活の中、梅漬けの工程と共にそのときの心の動きが細やかに描かれています。このように連作は、時間の経過や感情の変化など、大きなうねりを表現できます。その魅力が十分に生かされている作品だと思います。

「亡夫のワイシャツ」

病室で夫と筆談したノート世間話のそれらであれど

あの時に酸素マスクを外したらはつきり聞けたのに夫の声

土手の菊黄の群れほめた亡夫ゆえに今年も咲きたるを供えたり

作者にとって、短歌は単なる表現手段ではなく、苦しいことや哀しみなどの感情を昇華させるための強力な力を持つものとなりました。最愛の夫を亡くした、感情の重みをそのまま抱え込むのではなく、歌に昇華させていきます。そうすることで、心を軽くし、新しい視点や希望を見つけることができます、これ

らの作品は示してくれています。

「延齡草」

幼き日我をなだめて幼稚園に連れ行きくれし兄逝き給う

高速の道両側に山百合はとぎれることなく咲きて居りたり

去年の春病む兄の生命希いてし延齡草が今も咲いてる

歌を通して人生の喜びや悲しみを表現し、それを後に続く人々に伝えていくことも、作者の生き方の一部となっているのかもしれない。延齡草や山百合の花の描写が歌の中で効果的に使われています。身近な方を亡くされた哀しみを「延齡草」に託し、実際に植えられた体験が、作品をより身近に引き寄せています。

「月のころは」

夏の夜の月を待ちているばら苑の深紅の八重は清少納言

いにしえの人恋う文字は白き紙のひだりにわずか寄りてくずれる

にくきものひとつひとつを並ぶれば千年前にも今のわれにも

紫式部の生き方を描いた大河ドラマに発想

のヒントを得た作品だと思います。平安時代
さながらの雅な世界を彷彿させるような表現
や、小道具の使い方が際立っています。七首
目の歌は今の自分に引きつけて、「にくきも
の」という古語の持つ複雑な感情を女性の感
性で捉えている、巧みな構成になっています。

「写経」

うぐひすの声のみ今日の写経の間余白ゆた
かに心やすらぐ
かぎりある身とぞ思ひて書く経は序章のご
とし黄泉への旅の
写経をする心の豊かさや余裕を感じさせま
す。亡き人たちに供養の心を捧げる姿勢と、
神仏への深い信仰心に惹かれるものがありま
した。

「語らいの森」

トナカイの挨拶ならん柵越しに子へゆつく
りと角振りくれし
園の果て象舎の森にひぐらしの声わきたち
て風にまぎれず
若い親子の動物園での出来事が生き生きと
歌われており、いろいろな動物がよく観察さ
れています。動物に向けた視線と、我が子に

向けた慈しみの視点が、うまい具合に絡み
合っています。子育ての不安や希望が、感性
豊かに表現されています。

短歌結社「白路」同人。現代歌人協会会員。
秋田県歌人懇話会副会長。歌集『魔法の言
葉』



選歌短評

加藤 トシ子

○最優秀賞「デジタル世界」

・とめどなく抽象となるデジタルの世界迫り
来否応もなく

・キャッシュレス決済あやしむためらひに時
勢の波に置き去りになる

・平易な言葉で、デジタル世界の現実を戸惑
いながらも受け入れようとしている日常を詠
う。調べも整って、臨場感が伝わり共感を覚
える。多くの高齢者の様子が見えてくる。

○奨励賞「なにわ梅」

・つぶらなるなには梅の実店頭にしばし迷ひ

てつひに購ふ

・生活の中から生まれた厨歌。暮らしの様子
が丁寧に詠まれている。迷いつつも買った梅
が、朝餉の卓に載るまでを時系列に詠み、楽
しんでいるようだ。構成が上手く素直に表現
されている。食の文化は、土地の文化である
ことを感じさせる。

○奨励賞「盆帰り」

・キャベツは甘く茗荷オクラはほろ苦く花も
味わう母の食卓
・聞き返しが増えたる母はこのところ懐かし
きものに呼ばれる目をして
・連作としての焦点が少しずつ変わるところ
もあるが、こころ優しい母の姿が温かく描写
される。季節の情感を織り込みながら、老い
ていく母への作者の思いが滲む。

○奨励賞「亡夫のワイシャツ」

・日曜日ごとにアイロンがけてた亡夫^まのワ
イシャツ刺繍して着る
・病夫から亡夫になってしまった夫に対する
思い。しみじみと悲しさ切なさ^きが伝わってく
る。描写に真実^まみがこもり、映像が浮かんで
くる。「亡夫^まのワイシャツ刺繍して着る」が
とても印象的。

○入選「延齡草」

・幼き日 我をなだめて 幼稚園に 連れ行
きくれし 兄逝き給う
・どの歌も一句毎に一字あけているが、その
の必要はない。季節の情感とともに兄を失っ
た悲しみを詠み、その重い現実を伝えている
が、その事をもっと焦点化した方がいい。

○入選「月のころは」

・十六夜の月は一糸もまとわずに御簾のすき
間を抜けて入りくる
・黒髪にうずもれ睡るおおかたの女御はひと
り空洞を抱く

・題材が珍しい。「千年前」の事を詠み、艶
で官能的な雰囲気が漂う。絵画的でもあり印
象鮮明。全くの空想の世界を、今の自分に引
きつけて詠み、魅力的。

○入選「写経」

・かぎりある身とぞ思ひて書く経は序章のご
とし黄泉への旅の
・天逝の母の遺愛の写経集ときをりめぐり亡
き母偲ぶ

・平明な中に思索性を湛えた歌。独特の存在
感と心情に深まりがあり、純度の高い作品と
なっている。リズムも自然で整っている。

○入選「語らいの森」

・トナカイの挨拶ならん柵越しに子へゆつく
りと角振りくれし
・動物園での出来事を詠み、描写がしっかり
して楽しい。納得のいく発見や事実の持つ重
みがあり、リズム良く、場面の切り取り方も
上手い。

○入選「術後十年」

・明暗の区別かすかな夫が指す高窓よりの月
のあかりを
・古い二人の情景が、ひっそりと温かい。多
くの人に共通する老いに向かう体験を詠み込
んでいて、リアリティがあり心にしみ入る。

○入選「まぶしい今をふたりで」

・「アロハシャツ似合う」「ズボンが新鮮で
良いね」褒めて確かめあつて
・作者の心弾みが、シンブルに伝わってく
る。ただ句読点の打ち方に、もっと神経を
使って欲しい。

○グリーン賞「ひと夏の純愛観測」

・返信は来ても来なくてもいいんだ寧ろ来な
いほうが風ぐ心
・恋する想いが過不足なく表現され、作者の
率直な想いが溢れる。題のつけ方に工夫が必

要。

・「かりん」同人・かりん秋田
・飯田川短歌会・秋田県歌人懇話会・日本歌
人クラブ会員

俳句



俳句は17音の長
く深いステージ

佐藤 茂樹

俳句はわずか17音なれど、自己表現するた
めに与えられた長くて深いステージ。それゆ
え、巷の常用句ではなく、自分の言葉で表現
し、句意が読み手に平易に伝わることを心掛
けるべきだと思います。

そういう観点で述べると、句意が余り理解
出来ない句も散見されたのは残念。一度自分
の俳句を突き放して見ることも大事です。

○最優秀賞

「窓から」

生家いま蟬の集まる木を育て

秋桜父は一人になりたがる

窓から見える木は、作者が子供の頃から眺めていた木であり、それが今は大樹となって蟬があまり鳴いている。お父さんはそういう窓から離れたくなくて、一人で居たいと仰っているのだろうか。

○奨励賞

「羽黒山」

温顔の水子地藏に蟬の殻

振る鈴の音色涼しき巫女の舞

水子地藏の「水子」に蟬の殻の空虚が厳しく響き合う。巫女の振る鈴の音の清涼感。

「古希のほとり」

気がつけば秋の風吹く喉仏

自画像に覚悟描き足す星月夜

秋の風に下五「喉仏」が意表を突く。自画像に付け足す「覚悟」とは眼光であらうか。

「玄武」

白神は玄武や無量無辺に雪

白神嶺のでこぼこ撫づる盆帰省

白神の荘厳さと雪の降る様が玄武と引き合う。帰省時は、自ずと白神の峰々に目が行く。

○入選

「田植時」

黒々と水のしみ入る代田かな

田植終ふ一夜明ければ水澄みて

「黒々と」水がしみ入り、田植えの翌朝、濁りが落ちて水が澄む。実作業からの活写。

「霊山」

ケルン積む鼻の欠けたる地藏仏

雲海の果ては浄土か茜さす

登山家ならではの体験を基にし、しかも、「地藏仏」、「浄土」など仏教観が通底。

「百姓の一生」

水遊び爺も一緒に叱らるる

土蔵よりガリ版一式秋の暮

孫と一緒に叱られる無邪気さ、ほのぼのとした家族との触れ合い。自らの境涯を振り返る「ガリ版一式」の出現。

「出羽山河抄」

秋天の櫓の朱き手摺かな

採油機の囲ひの外に秋桜

秋田の風物を点描。千秋公園の御隅櫓か。県内ではいまだに採油機が作動している。

「平和」

桜蕊降る校庭のチャイム音

小鳥来る公会堂の版画展

校庭のチャイム音も公会堂の版画展も平和なればこその人々の日常的な営み。

「ふるさと」

泥鰌掘る泥の重さの古ばけつ

形良き寒鯉を二尾年祝

泥鰌の泥の重さも寒鯉も、今は懐かしき生活の一齣。

「詩の国」

学寮の庭班ごとの雪達磨

不恰好な自作の小皿ばつけ味噌

詩の国秋田ならではの風物。

「自給自足」

椀ぎたての水も弾じける茄子の紺

大根の曲りに倣い抜きにけり

水を弾くのは茄子の紺色であり、大根の曲りに合わせて折れない様に抜く動作など、実作業からしか出てこない言葉の数々。

○グリーン賞

「最後の夏」

暑い日に私を追い越す雲の影

夏影を2人で歩く自転車へだて

真っ直ぐにみつめる向日葵わたしみたい本来使わない「私」という表現、算用数字

の使用など、斬新さがある。

俳人協会会員 香雨同人 同矢羽句会所属

選評



泉屋 おさむ

俳句は有季定型の世界一短い詩と言われている。

詩においては調べの良さは大切である。もちろん無季や破調の句にも名句があり、これを否定するつもりはないが、破調の句の多くは推敲不足によるものが多いと感じている。今回、選句を引き受けるにあたり、選句は自身の俳句の創作につながると思い、応募された作品の一句一句に向き合い選をさせていただいた。

最優秀賞 「窓から」

窓拭きの青年涼しき目をもてり
生家いま蟬の集まる木を育て
霧深し窓から波の音を聞く

平易な表現ながら読み手の心に響く。外連味の無いのが魅力である。作者がその時その場で見聞きした景や心情までもが素直に伝わり秀逸。

奨励賞 「羽黒山」

神殿へ千古磴や青葉闇
振る鈴の音色涼しき巫女の舞
昼暗き修験の谷や朴の花

嘗て山伏の修験の場だった羽黒山の情景がよく捉えられている。下五が体言止めとなっており安定感のある俳句であり、しかも夏の季語で纏められていて、俳句巧者の感がある。

奨励賞 「古希のほとり」

父の呼ぶ方から青田波ざざと
古希晩夏いつも時間を追いかけて
自画像に覚悟描き足す星月夜

一句目だが、己が古希ともなれば父や母との別れは避けられない。五・七・五の定型からすれば破調の句であるが、破調なるがゆえにもはや逢うことの叶わない父との隔たりを感じさせる効果が得られた。自画像に覚悟を

描き足しいつまでも旺盛な作句力でおられることを願う。

奨励賞 「玄武」

白神は玄武や無量無辺に雪
ちちははの手の分厚さや稲穂波
白神嶺のでこぼこ撫づる盆帛省
白神山系は海を育み、また農の糧となっている。

自然豊かな国に生まれたことを感謝したい。根底にアニミズムを感じる作品である。

入選 「田植時」

溝浚え一直線に流れをり

入選 「霊山」

ケルン積む鼻の欠けたる地藏仏

入選 「百姓の一年」

服衣脱ぎ即田植機に跨がりぬ

入選 「出羽山河抄」

秋天の櫓の朱き手摺かな

入選 「平和」

桜蕊降る校庭のチャイム音

入選 「ふるさと」

泥鰌掘る泥の重さの古ばけつ

入選 「詩の国」

学寮の庭班ごとの雪達磨

入選 「自給自足」

漬け桶の底をまさぐる春の納屋

グリーン賞 「最後の夏」

夏影を2人で歩く自転車へだて

俳句としては未完成の部分が多い。だが、所々に「詩」を感じた。俳句は継続することで力が付く。一旦休めば元のレベルにもどるまでには休んだ期間の三倍はかかると言われる。ぜひ作句を続けて魅力ある俳句の世界で輝いて欲しい。

選考寸感



加藤 昭子

今年度、初めての選考に緊張感と、期待感

を持ち臨みました。応募数六十九編は、読み応えがあり、作者の思いや句の背景を、自分なりに一枚の絵にし選考基準を決め当たりました。題名に沿った作品か、有季定型、独自の発見、季語の斡旋、既存のものではないか、誤字、脱字、句の並べ方、助詞の使い方、原稿はていねいに書かれているかなど考慮、最優秀賞に「窓から」、奨励賞に「羽黒山」「古稀のほとり」「玄武」としました。

最優秀賞「窓から」

表題に沿い、日常をさらりと掬う技量。派手さはないが、作者の目差しの暖かさを感じられる句群。理屈っぽくなく、軽やかな生活感、独自の発見が五感を通して描かれている。

窓拭きの青年涼しき目をもてり

中七の感受の青春性、発見。

秋桜父は一人になりたがる

窓から見えた父、秋桜との取り合わせに、家族の思いが見えて来る。

笑ひヨガ終はりて見上ぐ天の川

賑やかな場面からの切替え。窓から仰ぐ天の川の美しさ。

霧深し窓から波の音を聞く

海辺の宿で聞く波の音だろうか。夜の暗さで海も見えず、窓を開けて打ち寄せる波の音を聴いている。きつと一人旅。立ち籠める霧の深さもドラマチック

奨励賞「羽黒山」

目、耳など五感で捉えた実景句。重厚感がある。句の並べ方が少し気になった。

振る鈴の音色涼しき巫女の舞

中七の「涼しき」は鈴の音にも巫女の舞にも掛かり、修験の登山者に一服の涼を与えたに違いない。

法螺の音の止むや鳴き出すほととぎす

耳で捉えた夏、中七の句またがりが技巧的。羽黒山に響く法螺の音に心が洗われる。

昼暗き修験の谷や朴の花

日中の小暗き山中に咲く朴の白さ。ほっと
させられる見事な花の白さが伺える。

奨励賞「古稀のひとり」

日々の暮らしの思いが淡々と書かれ好感。

底紅の耳打ちを待つ道祖神

道祖神に散る底紅。耳打ちと捉えた感性が
若々しく、ありふれた光景が光り出す。

古稀晩夏いつも時間を追いかけて

時間に追いかけられての日々。家族の為に
働き続けた来し方。晩夏の光にしみじみ感じ
入っている姿が見える。

自画像に覚悟描き足す星月夜

自画像はこれまでの顔、古稀を過ぎてから
の時間の使い方、楽しみ方を覚悟と読んだ。
星空が美しい。リフレッシュ出来る時間が見
えて来る。

奨励賞「玄武」

白神山に根付く暮らしが滲み出ている。な
つかしさの中に、白神の地を誇りに思う気持
ちが出ている。

白神は玄武や無量無辺に雪

白神を水の神と捉えた大らかな感性。計り
知れない雪量もたらす北国の景。

ちちははの手の分厚さや稲穂波

働く親の手の分厚さに感謝しながらも、自
分も又、この地で生きて行く。稲田の美しさ

白神嶺のでこぼこ撫づる盆帛省

白神山のおおらかさ、そこに暮らす人々と
の係り、短い帛省の時間を大切に思ってい
る。

グリーン賞に推した「最後の夏」、学生生
活の様子が描かれており好感。残り少ない学
生の今を楽しんでもらいたい。

川柳

「四十三人との

出会い」



山崎 如 酔

選考に当たっては、昨年も話しているが

五七五の原則、誤字脱字の有無、漢字ひらが
な片仮名の使い分け、助詞の使い方などの形
式的なものから入った。句については、題と
七句との関連性、発想の斬新性などに焦点を
当てた。その結果、中六や中八などの句は選
考の土俵にはあげなかった。

今回は選者の票が割れ、3選者が入選以上
の点数を入れたのは最優秀賞の一作品のみで
あった。句の良し悪しだけではなく、選者の
好みも左右したかも知れない。

最優秀賞「あれから」

反抗心を持っていた青年期の思い出を「臍
曲がり」「バカヤロウ」で表現し、反抗期を
卒業したその後に、その時代を懐かしむよう
に「思い出をゆっくり拾う曲がり角」と表現
している。そして、7句目で「青い日を丸呑
みにして現在地」で締めたのが良かったと思
う。ただ昨年の奨励賞の句の中にも最後に
「現在地」で締めたものがあり、その点気に
なったのは確かだ。

奨励賞「刹那を生きる」

これは私が最優秀作品として選んだ作品
だ。発想が良かったと思う。どの句にも人は
出てこない。すべて虫だ。しかしどの虫も擬

人化されていると思った。カマキリは詐欺犯、他人同士がシェアハウスに同居。「海越えるアサギマダラの華奢な翅」このアサギマダラは海外へ留学する娘だろうか。七句目は、ミノムシの蓑を個室とした発想にも好感を持てた。

奨励賞「羽化の序章」

少女時代の自分を詠んだものだろう。全体的に詩的要素のある川柳である。七句目の「清楚とか無垢とかゆれているヴェール」にある「ヴェール」は結婚を表しているのだろうか。迷いのある心を詠んだようにも思える。ただ他の句に比べて六句目の句が浮いているように感じられた。

奨励賞「母」

形振りをかまわずに子供たちのために生きて来た平凡な母を、身近な発想で表現したことが良かったと思う。七句目の「長生きをしたいさせた肩を揉む」で母親に対する感謝の気持ちが表れている。ただ「したいさせた」が気になった。

入選「バス停」

認知症気味の妻を詠んだものと思われる。妻に対する思いやり、優しさが見えてくる。

三句目の「叱っても後で悔やんでいるばかり」から、作者のいら立ちそしてそれに対する反省が見えてくる。聖人君子ではない本来の人間の姿だ。七句目も「固い」ではなく「ゆるい」という意味の言葉を使った点も人間らしくて良かったと思う。ただ、題を「バス停」とした点が気になった。

入選「老いごころ」

老いてなお、好奇心旺盛な前向きの句である。六句目の「年金が帳尻合わす余命表」は二千万円の底が見え始めた頃が、人生の終わりと見ているのだろうか。七句目の「昇華」は個体から気体になると言う意味もあるので、ここでは死と見た。それで言うと、人生の七合目は相当早い気がするが、虹の見えるうちに、ピンピンコロリと逝くつもりなのか。

入選「めぐり逢い」

私が奨励賞に選んだ句だ。大人の情熱的で濃艶な女性の姿が見えてくる。時実新子さんを思い出した。「裏切りの小指・移ろいの月日・水鏡・燃えてくる火種」から情熱・妖艶さが伝わってくる。作者のノンフィクションかフィクションかは知る由もない。川柳をこ

なしてきたベテランの方の句と見た。

入賞作品以外に、私が入賞作品にしたかったのは「えへへ」「まなうらのブルー」「ワクワク」である。

この度も十代は一人、二十代三十代は一人もない状況である。私も含め、身近な人に声掛けをしていきたいものである。

(川柳あきた・柳山泊・川柳宮城野同人)



一篇の詩

伊藤光愁

四十三篇三〇一句の応募作品であったが、そのいずれからも作者の意思、想い、念というものが伝わり、これにしっかりと対峙深く精読そして再読を重ね、その内容の受け止めに努めた。

選にあたっては、その句意が誰が読んでも理解でき、しかも内容の深いものという事を基本に置き、チェックポイントとして、①発想・着想②その表現力③句調④句の構成ということに配意した。また、「あきたの文芸」

は題を付しての七句連作であり、一篇の詩としてその文芸性についても評価の対象とした。

最優秀賞 「あれから」

誰もが辿った青春期の葛藤から現在に至るまで、その心情を句に巧みに並べ詠んでおり、句意がしっかりと伝わってくる。

- ・ 足止めを喰らった朝の反抗期
- ・ 風向きを一気に変えたバカヤロウ
- ・ 青い日を丸呑みにして現在地

どの句も平明な表現であるが、三句目の「バカヤロウ」は父親の一喝か、この一言が題を深く詠み込みこの連作を支えている。

奨励賞 「刹那を生きる」

発想に独自性があり、作者の心情を巧みな比喩で詠いあげている。

- ・ 懸命に刹那を生きたセミの腹
- ・ 叩かずにそつと追いやる九月の蚊

主題となっている三句目の「刹那を生きたセミの腹」は句郡の柱となっており、その人生観が伝わってくる。

奨励賞 「羽化の序章」

七句それぞれが題をしっかりと詠み込んでおり、連作としてのドラマ性、詩性を感じさ

せる。

・ 母さんに初めてのウソうつむいて
・ 清楚とか無垢とかゆれているヴェール
措辞が巧みで、作者の心情を効果的に詠みあげている。

奨励賞 「母」

母を思う一連の句は、読むものに心地よく染み込んでくる。

- ・ ガッコ茶が美味いと母の総入れ歯
- ・ 長生きをしたいさせたい肩を揉む

「ガッコ茶と総入れ歯」を効果的に対比させるなど、平明だが表現の巧さを感じた。

入選 「バス停」

題と句群との整合性に気になるところもあるが、高齢夫婦（句からの想定）の日常起こっている事象を、比喩を巧みに使いながら詠んでおり惹かれるものがある。

- ・ ゆるんでも結び目だけはほどけない
- 結びの句で、夫婦の絆が伝わってくる。

入選 「老いごころ」

老年を前向きに生きるという作者の強い意思が伝わってくる。

- ・ 好奇心学びの森に湧く泉
- 全体に明るさがあり、句の並べも巧い。

入選 「めぐり逢い」

一篇のポエムを読んでいるようでその詩性を高く評価したい。

・ 葛藤をくぐって写す水鏡

偶然の巡り逢いに揺れる思いを、巧みなレトリックで詠み込んでいる。

グリーン賞については、その対象作品について審査をしたが、いま少しの課題があり、賞には該当しなかった。今後の研鑽に期待したい。

冒頭にも述べたが、連作とは一篇の詩として、詩性川柳とも呼ばれているスタイルである。大切なことは、句の並べ方であり、一連の句は起承転結を意識して並べ、全体を一篇の詩としてドラマ性を持たせることである。今回選を通じて感じたことは、この点に配意したならば、なお素晴らしい一篇になったと思われる作品が多かったことである。

川柳銀の笛吟社同人

秋田市住

選を終えて



近藤 たつお

この度初めて選考委員を引き受けることになりました。四三人の方の応募があり、年齢分類を覗いてみると七〇才代の方と八〇才代の方で八〇パーセント以上を占めていました。

責任と緊張の綱交ぜの気持ちのまま作品を読み進めると「老い」に関わる句作の多いことに気がつきます。川柳は私を詠む事が多い文芸であることを思うと当然のことなのでしょう。しかし、コンテストでもあることを思うとテーマや表現に工夫があつていいのかもしれません。

その中で、一〇代の方の作品が一篇ありました。自転車で駆け抜ける様子を若々しく表現されていて好感を持ちましたが、窮屈な一七音字が散見され、グリーン賞を逃してしまいました。今回の応募を待ちたいと思います。

最優秀賞「あれから」

・叶わない夢ばかり追う臍まがり
・風向きを一気に変えたバカヤロウ

・思い出をゆっくり拾う曲がり角
・青い日を丸呑みにして現在地

三人の委員から高点を獲得し最優秀賞に決定した。臍まがりでもバカヤロウな時代があった。反省はするものの本質はそんなに変わっていない気がする。同様に大人になった三人の男性委員には多くの共感を呼ぶ句群となった。

奨励賞「刹那を生きる」

・カマキリが欺く揺れる花となり
・懸命に刹那を生きたセミの腹

昆虫たちを題材に意欲を見せてくれた句群。それぞれの所でそれぞれの刻を生き抜く命が輝く。：：ただ、作者の視点と存在を求めながら読み進めると希薄な気がする。

奨励賞「羽化の序章」

・ポケットに夢のつぼみとミントガム
・清楚とか無垢とかゆれているヴェール
少女の成長を上手く組み立ててみた。ミントガムから白いヴェールまで時空の存在を捉えてみせた。もし、作者が少女の親なのであればもう少しあたたかな愛情を感じてみたか

った。

奨励賞「母」

・文法はどうだっていい母の文
・ガッコ茶が美味いと母の総入れ歯
長生きをした母を愛おしむ詩を詠んだ。

カブトムシで遊んだのは男の子だろうか。男の子は母に弱い。題材は「母」であるが、沢山の句を作ってきたであろう作者の力量を感じる。

入選「バス停」

忘れん坊になった妻を愛おしむ詩。

忘れん坊さんを叱っても嫌いにはならない作者。そして川柳を友とする作者。

七句それぞれが独立を果たし、連なって作者の愛情が心に染みる。

入選「老いごろ」

多くの「老い」を詠んだ句の中で、五七五のリズムが秀でていた。好奇心、向学心がそうさせるのか。句作の力量たっぷりの作者が老春を謳歌する。

入選「めぐり逢い」

深すぎる「愛」を連想させる言葉が散りばめられている。

愛に生きることが命懸けであることを教え

ていただいた。

初めて選考委員をさせていただいたことに感謝いたします。選することは試されていることでもあります。精一杯の選でした。

ありがとうございました。

能代川柳社同人

エッセイ



応募作品を読んで

武田 幹 夫

①選考委員会で話題になったことの一つは、作品募集要項に沿ってほしい、ということです。氏名や住所はどこに書くのか、字数の程度は、等々。要項には選考の公平を保つ役目もあることを理解してください。

②資料の引用文に、誤字・当て字・旧字体・

常用漢字表外の漢字や音訓・等々がある場合は、どのようにすればよいのでしょうか。そのまま表記するか、注記の「原文ママ」や「ママ」を添えるか、丁寧な説明を付加するか、などと迷います。読みやすく、理解しやすくするための配慮があれば、読み手はありがたいです。その配慮が主文に自然に溶け込んでいると読みやすいと思います。

「蛍光管にアボ」家庭での小さな出来事を結び合わせ、文学として仕上げています。さりげない会話・心理・動作が、貴重な安らぎとなることに気づかされます。日常をさりと語りながら、家族愛の基本を描いています。「母のおはぎ」世代をつなぐ家族のきずなを感じます。日常の食べ物が未来の一家だんらんに連なることを教えてくれます。時の流れに自然体で臨み、目に見えない大切な芯を心で見つめています。

「思い出の椅子」健康についての説明を、言葉を紡ぐように丁寧に述べています。淡々と話が進み、やがて、大切な思い出にたどり着きます。静かな語り口のなかに、夫の優しさが大きく強く明確に浮かび上がります。

「マナーと善意の三角折り」いらだつ原因は他人の悪意のない言動という困った状況です。多くの人々、特に若い人々に考えてほしい体験談です。話題の流れが醸し出す微妙なおかしみがあり、上品な苦悩となっています。

「母のお免状」母の姿を描写しながら、嫁の立場を浮き彫りにしています。筆者の夢も潰されました。家族が抱えている重大な問題に向き合っています。社会全体の差別や格差を文学として昇華することが期待できます。

「時の連なり」庭の風景が幽玄な光の空間になり、今昔の物語が優雅な時間の流れになっています。木や花を気ままに植えてしまった失敗さえも輝く映像となって印象に残ります。美しい文章の底に家族への愛が感じられます。

「山デビュー」観察しながら行動し、一瞬の風景を記憶し、それを文章として再現する力を感じます。登山の様子を実況中継で見聞しているように感じました。いろいろなテーマの紀行文に取り組むことも期待できます。「草木に癒され」農業と草木の手入れに自信と誇りをもっています。植物に対する愛情と

ともに衰えぬ探求心が読み取れます。試練にも冷静に対処しているのがわかります。自然を楽しんでいる境地に読者は癒されます。

「歌の旅人」多くの人々に感動を与える活動をしています。同時に、執筆者ご自身の生き方に共感する人々が多いのではと推察します。時代と場所を超越した普遍の人間愛を文章の行間に感じます。

「帰省ではなくAターン」状況説明と心理説明の組み合わせが巧みです。人生経験がそのまま物語の素材になっています。東京での生活・健康・仕事・資格・社会情勢などの体験は捨てがたい貴重な文学的素材です。

「老後を楽しむ」きちんと伏線を敷いて構成が整っています。常用表記で丁寧書き、原稿の記載に心遣いが感じられます。情景を時系列に整理し、場面ごとに満喫感を添えて、幸福な旅を明るく写し取っています。

「かの人をめぐる」歴史論文ではなく、人物や家系の探究プロセスを語る作品です。歴史の専門家でなくとも興味をもって読めるスタイルだと思います。固有名詞などの表記にも配慮しています。



自分の人生に一貫性をもたせること、それによって癒されること

中村 寿

審査委員会は合議制にて、本年度の受賞作として、最優秀賞一作、次点奨励賞一作、次々点入選一作、グリーン賞二作を「あきたの文芸 第57集」掲載作として推薦するに至った。投稿前には「作品募集要項」をよく読み、投稿規定を守ること。本年度の投稿には、執筆者名が記されていたものがあつたほか、字数制限を大幅に超過していたものがあつた。なお、本年度は全作が審査対象になったことを申し添える。

投稿作をテーマ別に分類してみると、投稿者自身の人生を回顧する、いわゆる「自分語り」、夫婦家族や友人知人に関するもの、旅、植物や自然、郷土の偉人があつた。審査員は一致して、自分語りを高く評価していない。壮年期を過ぎてくると、われわれはみんな自分の人生が若き日に抱いた理想の通りに

はなっていないことに気づくのだろう。そんな想いを直接的に表現すると、世相に対する不満や自慢話になりがちである。

人生は決断の連続である。書くことはその時々を決断という個別の点と点を、線でつないであげることである。点のつなぎ方は自分次第。自分なりの視点で点と点をつないだとき、すなわち、自分の人生を自分の視点から記述したとき、それと引き換えに、癒しが得られるのではなからうか。自分語りをする場合、自分を小説中の登場人物の一人として描くような、一歩退いた俯瞰的な視点をもつことが必要である。自分を語るには、自分に対して距離を置き、客観視することが肝心だ。

最優秀賞「蛍光管にアボ」

アボはアボカド。家族の帰省に合わせて作られるアボカド料理からは、家族への愛が伝わってくる。その種を植えて一年後、投稿者は鉢植えのことを忘れてしまっていた。その間、父が鉢の管理をしている。父にはアボカドはなじんだ食事ではなく、「アボ」としか記憶されなかったうえ、名札代わりに「アボ」と書いた蛍光管を挿していた。

父のユーモアは私たち家族を癒し続けている。人生にユーモアは必要だと私は思う。忙しく過ぎる日々の中で、笑える瞬間がたくさんあればいいと思う。

上の引用に審査員一同合意、最優秀賞に決まった。

奨励賞「母のおはぎ」

三世代家族の絆を描いた作。母の作るおはぎは家族みんなのお気に入り。母の体調不良をきっかけに、おはぎは配偶者（妻）に引き継がれていく。若い、子供の進学等で家族の状況が変わっていくなか、家族の行事が続いていくことへの喜びが読み取られる。妻へのコメントが少ないという問題が指摘され、奨励賞となった。

入選「思い出の椅子」

テーマは亡き夫への愛。投稿者は病気が発覚、手術を受ける。体調が回復しないのを見て取った配偶者は、妻に高価な椅子を買ってくれた。座り心地の良さと夫の優しさがシン

クロする。夫への愛は伝わってくるが、別れの記述があっさりし過ぎているという指摘があった。

グリーン賞二作はいずれも自己分析の記録。「三角折り」はトイレ清掃完了の合図。

病院で同室となった年上の患者が入院仲間を思いやる行為として三角折りを勧めてくる。投稿者は善意の三角折りが受け容れられない。その頑なさの背後には、学業の遅れを懸念する焦燥感があった。「馳せては返す」は、届かなかった恋心がテーマ。二作とも、展開に難があったが、それを上回る「若さ」があるという理由から、受賞となった。

評者は本号をもって任期満了となる。審査を通じて、集団就職、農村の婚礼、青年活動等、通過儀礼について貴重な経験を読ませてもらった。重機がなく、農作業は過酷をきわめたが、学校には子供の笑い声が響いていた過去、農作業は楽になったが、学校が閉校になり、静まりかえっている現在。創刊号から本号まで通読すれば、県民の意識等についてさまざまな変化を指摘することができるだろ

う。文芸雑誌は、続く世代の人々が読むときにはじめて、その真価を発揮する。

若い書き手に注目

渡辺 修

最優秀賞の「蛍光管にアボ」は、タイトルが秀逸である。冒頭サラダのレシピから始まり、アボの正体はすぐに分かるのだが、蛍光管の意味は後半まで明かされず、読む者の興味を引っばる仕掛けが心憎い。

本作の最大の魅力は、父の素朴で愛らしい言動である。父が登場する後半になると、何度読み返しても笑顔になる。家族間の愛情が嫌味なく描かれた、読後感のよい一作だった。

受賞はすんなりと決まったが、審査員二人が満票を投じたのに、私だけが一点を減じた。

その理由は、冒頭のレシピが本当に必要かという疑問である。エッセイの書き出しとしてよく見る手法だが、限られた字数の無駄遣いに思えるのだ。この行数なら、父のエピソードを追加する、あるいは娘の祖父に対す

る愛情が仄見える場面を入れた方が、作品の密度がより向上しそうな気がする。

奨励賞の「母のおはぎ」も佳作。母の作るおはぎを妻が受け継ぎ、おそらく娘にも……と容易に想像できる。おはぎが家族と世代の結びつきの象徴であるのと同時に、地域社会の確かな存在を匂わすキーアイテムになっていることにも注目したい。

残念に思ったのは、重要な役割を担う妻の表情が見えてこないことだった。姑に黙々と仕え、その味を受け継ぐ彼女が、何を思い感じていたのか、そこまで描けていたら、最優秀賞も狙えたのではないかと感じた。

入選の「思い出の椅子」は、普段は愛情表現とは無縁の（と想像される）夫が、闘病中の妻のために高価な椅子をためらわずに購入する、というエピソードが核となっている。不器用な優しさと愛情の発露が、夫の死後も残された椅子から漂ってくるラストは、しみじみと余韻を残す。

それだけに、夫の発病から死の描写を三行で片付けてしまったのは、大いに疑問である。これに対して、自分の手術や病状を延々と書き綴るのでは、反感を生みかねないだろう。

う。

選に漏れた作品では、「人生案内」「山デビュー」「時の連なり」「母のお免状」が印象に残った。入賞まであと一歩である。

今回の審査で一番面白かったのは、グリーン賞に推した二作だった。作者はともに二十代前半の若さだが、感心するくらいに文章がしっかりしており、確かな実力が窺えた。

「馳せては返す」は、読んでまず度肝を抜かれた。全編にわたって作者の恋愛観が語られるのだが、まったく銜（て）いなく、内心をさらけ出す勇氣は、年配の評者が持ち得ないものだ。何より文章に勢いがあるのがいい。

本作は最後の三行で全てがひっくり返る。ネタバレらしは無粋なので詳述しないが、ここまで語られた強気の恋愛観は、作者がそう思い込むための言い訳に過ぎなかったのだ。

「マナーと善意の三角折り」は文章・構成ともに巧みで、書き慣れた方だなと思った。

四人部屋の病室という、女の社会で、若い作者は正義と潔癖を武器に、認知症の女性に精神的なマウントを取る。だが、実際の犯人は無知の善意で武装したおばさんたちで、

結局作者は何も言えなくなる。この辺の微妙な人間関係の描き方が実に面白い。

ただし、この「三角折り」は、これまで幾多の媒体で語り尽くされ、手垢に塗れた題材である。読者に既視感を与えるのは致命的で、作者の実力は認めるが、入賞は難しい。

前回もそうであったが、自宅の庭を題材とする応募作が複数あった。悪いわけではないが、よほど新鮮な視点で書かないと埋没する可能性がある。

また、題名は作品の顔であり、評価の要素だと意識してほしい。その意味では「馳せては返す」は面白かったし、「蛍光管にアボ」はよいお手本である。

あきた県民文化芸術祭2024「あきたの文芸」応募状況

1 部門別（以下、数値は応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
R6年度	10	25	58	69	43	20	225
R5年度	11	28	56	77	47	22	241
R4年度	9	32	61	77	39	24	242
R3年度	14	38	55	78	45	25	255
R2年度	10	41	63	91	54	25	284

2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳		エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
R6年度	6	4	13	12	27	31	41	28	26	17	8	12	121	104
R5年度	7	4	9	19	22	34	44	33	27	20	6	16	115	126
R4年度	7	2	13	19	24	37	39	38	25	14	12	12	120	122
R3年度	9	5	13	25	20	35	44	34	31	14	13	12	130	125
R2年度	7	3	10	31	23	40	51	40	37	17	16	9	144	140

3 年代別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	100代	不明	総数
R6年度	18	7	3	7	11	29	75	63	11	1	0	225
R5年度	20	9	1	10	9	38	81	65	8	0	0	241
R4年度	18	4	2	8	13	44	85	63	5	0	0	242
R3年度	11	6	3	10	21	51	77	68	7	0	1	255
R2年度	22	6	3	10	18	51	98	69	7	0	0	284

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	100代	不明
小説・評論	3	0	0	0	1	2	3	0	1	0	0
詩	7	1	0	1	0	5	6	4	1	0	0
短歌	4	3	1	1	5	6	18	18	1	1	0
俳句	3	1	1	4	2	9	26	17	6	0	0
川柳	1	0	0	1	0	4	16	19	2	0	0
エッセイ	0	2	1	0	3	3	6	5	0	0	0

4 新旧割合

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	7	19	37	56	37	15	171
新	3	6	21	13	6	5	54
計	10	25	58	69	43	20	225

再…以前にも応募したことがある方
新…今回初めて応募された方

5 月別応募数

6月	7月	8月	計
24	30	171	225

あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第五十六集 （令和五年度）応募二百四十一作品

・小説・評論部門

・詩部門

・短歌部門

・俳句部門

・川柳部門

・エッセイ部門

奨励賞	森田 真	「明るい北朝鮮」
最優秀賞	小林 康子	「ソラプチの春」
奨励賞	鈴木 敏男	「夏至の汗」
奨励賞	金 万 和	「多すぎる余白」
最優秀賞	工藤 美咲	「ラムネの瓶」
奨励賞	加藤 厚子	「小さな子のおい」
奨励賞	森田 溥	「日々片々」
奨励賞	佐々木 鏡子	「明日に向かひて」
最優秀賞	大橋 風太	「日記の余白」
奨励賞	加瀬谷 敏子	「晋山法要」 しんざんほうよう
奨励賞	鈴木 修一	「いのちの楽園」
奨励賞	田村 陽子	「城跡散策」
最優秀賞	伊藤 光 愁	「さびしんぼ」
奨励賞	荒木 小 菊	「郷の風」
奨励賞	鈴木 明 夫	「昭和回想」
奨励賞	澤田 幸 代	「こんな夏」
最優秀賞	高橋 文 子	「母と野球」
奨励賞	佐々木 真知子	「ただ、生きる」
奨励賞	大久保 菜 巳	「日本海、帰り道、鳥海山」

編集後記

◎あきた県民文化芸術祭2024「あきたの文芸」入賞作品集『あきたの文芸第五十七集』を刊行しました。

この作品集は、十五歳から百二歳にわたる応募者からの作品二百二十五編より、最優秀賞五編、奨励賞十三編、入選二十編、二十五歳以下の文芸活動を応援するグリーン賞七編、計四十五編を掲載しております。

◎この事業は、あきた県民文化芸術祭2024の一環として実施しております。応募いただいた皆様をはじめ、文芸団体や広報協力をしてくださった各市町村、報道機関、図書館などの文化施設、さらには、事前審査から選考・校正まで多大なる御協力をいただいた選考委員の皆様に深く感謝申し上げます。

◎「あきたの文芸」は、今後もより読みやすく親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、一層充実させていきたいと思っております。

あきたの文芸第五十七集

あきた県民文化芸術祭2024

「あきたの文芸」入賞作品集

令和六年十一月十五日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話 〇一八—八六〇—一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

印刷・製本 株式会社三森印刷

たくさんのご応募 ありがとうございます！

応募総数 225 作品

入賞 45 作品

小説・評論	2 編
詩	4 編
短歌	10 作品 70 首
俳句	12 作品 84 句
川柳	7 作品 49 句
エッセイ	3 編

グリーン賞 7 作品

小説・評論 詩 短歌 俳句 エッセイ



ブンカ DE ゲンキ
はこちらから！



あきた県民
文化芸術祭

2024

あきたの文芸 第57集
入賞作品集
令和6年11月
発行・秋田県(非売品)